

島内地下式横穴墓群VI 灰塚地下式横穴墓群II

島灰
内塚
地下式
横穴
墓群
群VI II



2020

2020

宮崎県えびの市教育委員会

島内地下式横穴墓群VI
灰塚地下式横穴墓群II

2020

宮崎県えびの市教育委員会

序

えびの市は、宮崎県の南西部に位置し、日向・肥後・薩摩・大隅の分岐点にあたる、南九州の要であります。北の九州山地と南の霧島山系に挟まれた狭長な盆地は河岸段丘が発達し、豊富な降雨や湧水、肥沃な氾濫原の存在により、段丘面の殆どが周知の遺跡となっております。2万年前には黒曜石を流通させ、古代には官道も整備され、段丘崖を利用した牧も営まれた重要拠点として栄え、必然的に様々な文化や文物が混合した独特的の地域であります。

本市の西部、川内川左岸の低位段丘に立地する島内地下式横穴墓群は、古墳時代中後期の鉄製武具・武器が有機物を伴って数多く出土する遺跡として周知されており、平成24年9月には出土品の約7割1,029点が重要文化財に指定されております。

本書は、平成27年10月以降平成30年8月までに陥没・調査した163～173号墓および05号・06号板石積石棺墓ほか、さらには、2.5km東の灰塚地下式横穴墓群24号墓の調査成果であります。島内では、刀剣や弓矢、鉄鋌等の武器やガラス栗玉が出土しました。

本書が学術資料としてだけでなく、生涯学習や学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する理解と認識が深まれば幸いです。

本遺跡の調査にあたり、ご指導・ご協力頂いた諸先生方、調査に対してご理解・ご協力頂いた地権者・耕作者の諸氏、発掘作業・整理作業に従事して頂いた作業員の方々に対しまして厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

えびの市教育委員会

教育長 永山新一

例　　言

1. 本書は、平成 27 年 9 月から平成 30 年 8 月にかけて陥没・調査した島内地下式横穴墓群 163 ~ 173 号墓、05・06 板石積石棺墓および平成 27 年 5 月に陥没・調査した灰塚地下式横穴墓群 24 号墓の報告書である。
2. 出土人骨の実測～取上～分析については、鹿児島女子短期大学の竹中正巳教授に委託し、玉稿を賜り、付篇に掲載した。
3. 補遺の 10・11 以外の執筆と編集は、中野が担当した。
4. 出土遺物の浄書は、古川奈緒子・米倉千春が行った。
5. 島内 163 ~ 173 号地下式横穴墓については、鹿児島大学総合研究博物館の橋本達也教授にご観察頂き、質の高い写真記録をご提供頂いたので、図版 1 のドローンによる航空写真や各遺構と出土遺物の大部分に活用させて頂きました。記して感謝申し上げます。
6. 調査の関連資料や出土遺物は、えびの市歴史民俗資料館に保管している。人骨は、全て宮崎県立西都原考古博物館に保管して頂いている。
7. 補遺として、『報告書 V』において掲載のできなかった錫製耳環、重要文化財保存処理過程の接合作業において登録台帳記載写真と形状が変わった刀剣とヤリ・鉄鉢・鉄斧について報告する。加えて 77 号墓出土の胡籠金具については橋本達也教授が写真撮影と再実測をされたので、玉稿を賜った。また、164 号墓から、橋本教授が三次元画像を作成されたのでその成果を掲載させて頂いた。併記し、感謝申し上げます。

凡　　例

1. 地下式横穴墓は S T、板石積石棺墓は S I として略している。
2. 遺構断面図の閉塞材の断面の斜線は石を、格子目は土塊（主にアカホヤ火山灰）を示す。

調　　査　組　織

特別調査員

鹿児島女子短期大学 教授 竹中正巳

調査主体

社会教育課長	白濱美保子（平成 27 年度）	主任主査	中野 和浩
領家 修司	（平成 28 年度～）	主事	町川 貴子（平成 27 ~ 28 年度）
文化係長	前田 誠（平成 26 ~ 28 年度）	主任主事	小島 英子（平成 29 年度～）
田中美千代	（平成 29・30 年度）	作業員	上牟田忠正（平成 27 年度～）
山下 誠介（令和元年度）	整理作業員	古川奈緒子（平成 27 ~ 29 年度）	米倉 千春（平成 29 年度～）

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第2章 遺跡の位置と歴史的景観.....	1
第3章 島内地下式横穴墓群	
1. はじめに	5
2. 基本的層序	5
3. S T -163	5
4. S T -164	7
5. S T -165	12
6. S T -166	15
7. S T -167	22
8. S T -168	25
9. S T -169	26
10. S T -170	26
11. S T -171	29
12. S T -172	32
13. S T -173	36
14. S I -05	40
15. S I -06	45
第4章 灰塚地下式横穴墓群	
1. はじめに	49
2. 基本的層序	49
3. S T -24	49
第5章 補遺	
1. 錫製耳環とガラス小玉	55
2. 島内 22 号墓出土 刀子（重要文化財 No785）	55
3. 島内 77 号墓出土 木装鉄剣（重要文化財 No43）	56
4. 島内 91 号墓出土 大刀（重要文化財 No71）	56
5. 島内 91 号墓出土 鉄斧（重要文化財 No764）	56
6. 島内 91 号墓出土 大刀（重要文化財 No72）	56
7. 島内 56 号墓出土 ヤリ（重要文化財 No96）	56
8. 島内 91 号墓出土 ヤリ（重要文化財 No97）	59
9. 島内 91 号墓出土 鉄鉢（重要文化財 No95）	60
10. 島内 77 号墓出土 胡蘿蔔金具（重要文化財 No748）	60

11. 島内 164 ~ 173 号地下式横穴墓の三次元計測	63
付篇	
1. 島内 163 ~ 173 号墓の人骨	165
2. 灰塚 24 号墓の人骨	184

挿 図 目 次

第 2 章

第 1 図 遺跡の位置と周辺の遺跡位置図 2

第 3 章 島内地下式横穴墓群

第 2 図 島内地下式横穴墓群遺構分布図	3・4	第 22 図 ST-169 遺構実測図	23・24
第 3 図 ST-163 遺構実測図	6	第 23 図 ST-169 玄室内実測図	25
第 4 図 ST-163 玄室内実測図	7	第 24 図 ST-170 遺構実測図	27・28
第 5 図 ST-163 出土遺物実測図	7	第 25 図 ST-170 玄室内実測図	29
第 6 図 ST-164 遺構実測図	8	第 26 図 ST-170 出土遺物実測図	30
第 7 図 ST-164 玄室内実測図	9	第 27 図 ST-171 遺構実測図	31
第 8 図 3 号人骨頭部東側鉄鏃 2 と矢入れ具の 有機物、鉄剣切先部詳細図	10	第 28 図 ST-171 玄室内実測図	32
第 9 図 矢入れ具の有機物（発見直後）	10	第 29 図 ST-171 出土遺物実測図	33
第 10 図 ST-164 出土遺物実測図（1）	11	第 30 図 ST-172 遺構実測図	34
第 11 図 ST-164 出土遺物実測図（2）	12	第 31 図 ST-172 玄室内実測図	35
第 12 図 ST-165 遺構実測図	13	第 32 図 ST-172 出土遺物実測図	35
第 13 図 ST-165 玄室内実測図	14	第 33 図 II 層出土遺物実測図	36
第 14 図 ST-165 出土遺物実測図	14	第 34 図 ST-173 遺構実測図	37
第 15 図 ST-166 遺構実測図	15	第 35 図 ST-173 玄室内実測図	38
第 16 図 ST-166 玄室内実測図	16	第 36 図 ST-173 出土遺物実測図（1）	38
第 17 図 ST-166 出土遺物実測図（1）	17	第 37 図 ST-173 出土遺物実測図（2）	39
第 18 図 ST-166 出土遺物実測図（2）	18	第 38 図 SI-05 出土遺物実測図	40
第 19 図 ST-167 遺構実測図	19・20	第 39 図 SI-05 遺構実測図	41・42
第 20 図 ST-168 遺構実測図	21	第 40 図 SI-06 遺構実測図	43・44
第 21 図 ST-168 玄室内実測図	22	第 41 図 SI-06 出土遺物実測図	45

第 4 章

第 1 図 灰塚地下式横穴墓群分布図	45	第 3 図 ST-24 玄室内実測図	47
第 2 図 ST-24 遺構実測図	46	第 4 図 ST-24 出土遺物実測図	48

第 5 章

第 1 図 錫製環耳・ガラス小玉実測図	55	第 10 図 島内 164 ~ 173 号墓埋葬姿勢一覧	66
第 2 図 重要文化財再実測図 (1)	57	第 11 図 166 号墓三次元展開図	67
第 3 図 重要文化財再実測図 (2)	58	第 12 図 167 号墓三次元展開図	68
第 4 図 重要文化財再実測図 (3)	59	第 13 図 168 号墓三次元展開図	69
第 5 図 ST-77 出土 胡縫実測図	60	第 14 図 169 号墓三次元展開図	70
第 6 図 胡縫の復原案とその類例	61	第 15 図 170 号墓三次元展開図	71
第 7 図 164 号 ~ 173 号墓一覧	64	第 16 図 171 号墓三次元展開図	72
第 8 図 164 号墓三次元展開図	65	第 17 図 172 号墓三次元展開図	73
第 9 図 165 号墓三次元展開図	66	第 18 図 173 号墓三次元展開図	74

表 目 次

第 3 章

表 1 ST-164 出土貝鏡観察表	12	表 5 ST-171 出土遺物観察表	31
表 2 ST-165 出土貝鏡観察表	15	表 6 ST-172 出土遺物観察表	35
表 3 ST-166 出土遺物観察表	22	表 7 ST-173 出土貝鏡観察表	42
表 4 ST-170 出土遺物観察表	27		

第 4 章

表 1 ST-24 出土遺物観察表	47
-------------------	----

第 5 章

表 1 島内地下式横穴墓群出土錫製環耳観察表	55	表 3 灰塚地下式横穴墓群出土ガラス小玉観察表	55
表 2 灰塚地下式横穴墓群出土錫製耳環観察表	55		

写真図版目次

表紙 島内 ST-169 玄室内 赤色顔料

島内地下式横穴墓群

図版 1 ST-171・172 遠景（西から、ドローンによる）

図版 2 ST-163 坑上部閉塞 崩落板石、壁坑検出状態（南から）、壁坑半截（東から）、（南半部）

- 図版3 ST-163 堅坑完掘（東から）、玄室内（陥没坑から、南から）
- 図版4 ST-163 1～3号人骨の頭～胸部と4号人骨の頭（下端中央）（南から）、上半身 右下に4号人骨の頭（南西から）
- 図版5 ST-163 1～4号人骨 下半身（南から）、（東から）
- 図版6 ST-164 1層・擾乱土除去、2段目堅坑検出状態（南西から）、堅坑（南から）、掘り起こされた堅坑上部閉塞板石
- 図版7 ST-164 玄室 全景、1～3号人骨頭部周辺 左（奥壁）の弓赤漆と上（右側壁）の鉄剣・鉄鏃
- 図版8 ST-164 3号人骨上半身、1～3号人骨 下肢
- 図版9 ST-164 3号人骨頭部右外方の鉄鏃3と矢入れ具、2号人骨左腕の貝釧6
- 図版10 ST-164 人骨除去 弓の赤漆と鉄剣、鉄剣の把部
- 図版11 ST-164 鉄鏃茎部～矢柄と矢入れ具（発見直後）、矢入れ具の一部
- 図版12 ST-164 人骨除去後 弓の赤漆（西側）、中央付近、東側と鉄剣の把部
- 図版13 ST-165 深耕耕耘による堅坑検出（西から）、耕作土・擾乱土除去 堅坑検出（西から）、（東から）、堅坑完掘（南から）
- 図版14 ST-165 玄室内 3体、下肢
- 図版15 ST-165 2号人骨右腕の貝釧、接写
- 図版16 ST-165 玄室 西壁、東壁、天井東半～東壁、左楕部
- 図版17 ST-166 玄室 俯瞰（南西から）、2・3号人骨と副葬品
- 図版18 ST-166 1号人骨と副葬品、上半身と小刀
- 図版19 ST-166 1号人骨 下半身と鍔付大刀、3号人骨と副葬品（左寄りやや上に乳歯、左腕部に刀子、右腕部に鉄鏃）
- 図版20 ST-166 2・3号人骨 下肢～玄室天井、漢道 アカホヤ塊閉塞状況
- 図版21 ST-167 堅坑検出 右奥は崩落していた閉塞板石（南から）、堅坑断面層序（東から）、完掘全景（南から）、玄室全景（陥没坑俯瞰、南から）
- 図版22 ST-167 玄室内 人骨1、頸骨 接写
- 図版23 ST-167 貼床状況確認試掘 全景（北西から）、北中部の貼床断面、玄室中位から堅坑底面の貼床断面、北西部の貼床断面、
- 図版24 ST-168 堅坑検出（南東から）、堅坑半截、断面層序（西から）、堅坑上部板石閉塞状況（東から）、（北から）
- 図版25 ST-168 堅坑完掘（北西から、漢門～玄室天井は崩落）、玄室内 人骨2
- 図版26 ST-168 1・2号人骨（南から）、西から
- 図版27 ST-168 玄室 北壁、堅坑東壁～東楕部檻面（北西から）、崩落板石
- 図版28 ST-169 堅坑検出状態（南から）、堅坑半截、断面層序（東から）、堅坑漢門の赤色塗彩、崩落閉塞板石、堅坑完掘全景（南から）
- 図版29 ST-169 玄室内 人骨2、1・2号人骨 上半身（西から）
- 図版30 ST-169 1号人骨 頭部 自然崩壊、2号人骨 上半身 頭頂部の穿孔は現代昆虫によるもの
- 図版31 ST-169 1・2号人骨 下肢、足先～西壁に肋骨と中手骨を動かし置く状況

- 図版 32 ST-169 右羨道～玄室天井の赤色顔料塗布、左羨門部、堅坑～羨道西側天井、堅坑 南壁下半、天井の削り出し棟木と赤色顔料塗布
- 図版 33 ST-170 耕耘・畝立時の発見状況（東から）、堅坑から吹き出る謎と上部閉塞板石（裏返っている）、堅坑検出状態（南から）、板石中位に堅坑内面の縁がプリントされている
- 図版 34 ST-170 堅坑検出状態（西から）、堅坑半截、断面層序（東から）、接写、追葬確認、玄室内 東壁砂礫層崩落状況（南西から）
- 図版 35 ST-170 玄室内 全景、1号人骨と石枕・鉄鏃 5
- 図版 36 ST-170 2号人骨、1・2号人骨下肢、西～奥壁
- 図版 37 ST-170 1号人骨副葬品 鉄鏃、右裾部付近の鉄鉢
- 図版 38 ST-171 1～3号人骨、頭部～胸部と副葬品・動き置かれた骨、鉄鏃 4と鉗
- 図版 39 ST-171 1号人骨と奥～東壁の底、下肢 右大腿骨右に動き置かれた骨
- 図版 40 ST-171 1号人骨、胸部～膝部 右脇下・胸部・大腿骨間中央部に動き置かれた骨
- 図版 41 ST-171 1号人骨頭部と副葬品・動き置かれた骨
- 図版 42 ST-171 西壁～北壁と1号人骨下肢、羨門板石閉塞状態（北から）、貼床断ち割り 中央から東南方向、鹿児島大学 橋本達也教授による写真撮影風景
- 図版 43 ST-172 堅坑 検出状態（東から）、堅坑半截・西壁 断面層序（東から）、断面層序（東から）、南半部 接写（東から）
- 図版 44 ST-172 堅坑 上部板石閉塞状態、板石除去 完掘（南から）、東から 北西部は農機加重によるズレ落ち、崩落板石
- 図版 45 ST-172 玄室内 被葬者 4、1～4号人骨 上半身（西から）
- 図版 46 ST-172 1～4号人骨（南から）、下半身・西壁～北壁
- 図版 47 ST-172 1～3号人骨 集骨状況、3号頭骨東側の鉄鏃
- 図版 48 ST-172 1号人骨右側の圭頭鏃、人骨除去 1～2号間の枕石と赤色顔料・鉄鏃
- 図版 49 ST-173 堅坑検出状態（南から）、埋土半截 断面層序（東から）、完掘全景（東から）、掘り起こされた上部閉塞板石
- 図版 50 ST-173 玄室内 被葬者 6、1～5号人骨の頭部
- 図版 51 ST-173 5～6号人骨間の貝釧、6号人骨頭と1～5号人骨下肢
- 図版 52 ST-173 1・2号人骨 下肢、1号人骨右側の鉄鏃、6号人骨西の鉄劍 刃を立てている
- 図版 53 ST-173 1～3号人骨上半身と北壁、6号人骨頭部と西壁
- 図版 54 SI-05 板石検出状態（南から）、堀形検出状態、埋土掘り下げ（西から）、（東から）
- 図版 55 SI-05 床面（西から）、鉄劍出土状態（南から）、北西、鉄劍出土状態、鉄鏃 2（東から）
- 図版 56 SI-05 床面（南西から）、北から
- 図版 57 SI-05 貼床断面層序（南から）、西から、貼床除去（北から）
- 図版 58 SI-05 貼床除去（東から）、基底側石 東側 堀形、南側 堀形
- 図版 59 SI-05 断面 E の板石除去、断面 N、断面 W の北、断面 W の南

- 図版 60 SI-06 堀形 検出状態（西から）、床面、貼床確認（西から）、断面層序（西から）
- 図版 61 SI-06 遺物出土状態（西から）南東部中央寄りにガラス栗玉、接写
- 図版 62 SI-06 貼床除去、側石堀形検出状態（南から）、完掘（西から）
- 図版 63 SI-06 北東部 堀形（西から）、南東部（西から）、西部（北から）、南西部（北から）
- 図版 64 ST-163 出土遺物 刀子、刀身関部寄りのハエ開跡殻、中央部棟の織維とハエの開跡殻 関部寄りの織維
- 図版 65 ST-164 出土遺物（1）、（2）、鉄劍の鞘と組紐巻き
- 図版 66 ST-164 出土遺物（3）貝釧、No11 中央付近の刻み（外面～側面）、内面、No12 の左片
- 図版 67 ST-165 出土遺物 貝釧
- 図版 68 ST-166 出土遺物（1）鉄鎌、No24 裏 布痕・ハエ開跡殻、No21 ハエ開跡殻、No23 裏 ハエ開跡殻、出土遺物（2）
- 図版 69 ST-166 出土遺物（3）跨付大刀、刀身のハエ開跡殻、無窓跨、跨と目釘・把
- 図版 70 ST-166 出土遺物（4）刀子 中央棟にハエ開跡殻、（5）刀子、（6）小刀
- 図版 71 ST-170 出土遺物（1）鉄鎌、（2）鉄鉢、鉄鉢の袋部、側面
- 図版 72 ST-171 出土遺物（1）鉄鎌・鉗、No41 の側面、基部の紐、出土遺物（2）刀子、（3）刀子
- 図版 73 ST-172 出土遺物
- 図版 74 ST-173 出土遺物（1）鉄鎌、（2）ヤリ、側面、（3）鉄劍
- 図版 75 ST-173 出土遺物（4）貝釧、（5）骨角器、堅坑北側 掘乱層出土 土師器
- 図版 76 SI-05 出土遺物（1）鉄劍、把部拡大、（2）鉄鎌、SI-06 出土遺物 ガラス栗玉

灰塚地下式横穴墓群

- 図版 1 ST-24 眩暈（西から）、人骨と副葬品 後頭部は北西部の大刀の横に動き置かれている
- 図版 2 ST-24 顔面・頸と刀子（西から）、後頭部と大刀、雜骨と鉄鎌 6、羨門土塊閉塞状態（東から）
- 図版 3 ST-24 玄室北壁～南壁（右側壁）、左側壁
- 図版 4 ST-24 出土遺物（1）鉄鎌・大刀、No2 の基部 ハエ開跡殻、No9 の縄、No10 の把縁

第 5 章 捨遺

- 図版 1 重要文化財再録（1）
- 図版 2 重要文化財再録（2）

第1章 はじめに

島内地下式横穴墓群は、地下式横穴墓群 120ヶ所を代表する墳墓群の一つであり、平成 24 年 9 月 6 日付けで、出土遺物のうち保存状態の良好なもの 1029 点が国の重要文化財に指定された。これらは地鉄のみならず、木・皮革・布や組紐・鹿角・貝製品など様々な装具・有機物が銹着・遺存し、武器・武具の製作技術研究には不可欠の遺物群として周知されている。また、熟年女性人骨の上顎前歯部舌側面磨耗（LSAMAT）と頭上前方運搬痕の他、糞石 3 例、鉄器に銹着したニクバエの囲蛹殻など、全国的にみても希少性の高い資料が出土しており、古墳時代像を探る一助になる。

162 号墓まではすでに報告書を刊行しているが⁽¹⁾、大型耕耘機の多用と深耕により、平成 27 年度に 4 基、28 年度に 4 基、29 年度に 2 基、平成 30 年度に 1 基の地下式横穴墓が陥没、加えて板石積石棺墓 2 基を調査した。

灰塚地下式横穴墓は、平成 27 年 5 月末に陥没通報が来たのを受けて調査した 24 号地下式横穴墓について報告する。

第2章 遺跡の位置と歴史的景観（第 1 図）

島内地下式横穴墓群は、えびの市大字島内字平松・杉ノ原に所在する。本市の西部、盆地中央を西流する川内川の左岸、標高 233 ~ 235 m、氾濫原との比高 10 m ほどの低位段丘に立地する。墳墓群は、東西 650m・南北 300m 強、約 12ha に分布し、北端の 1.5ha ほどは、昭和 46 年（1971）、地表下 2 m ほどで露出する砂利を採取するために削平されている。

周囲は、島内遺跡（2）・中浦遺跡（4）・大溝原遺跡（3）の縄文時代以降の広大な遺跡群が続くと想定されるが、半径 1.5km 以内の調査事例は無い。

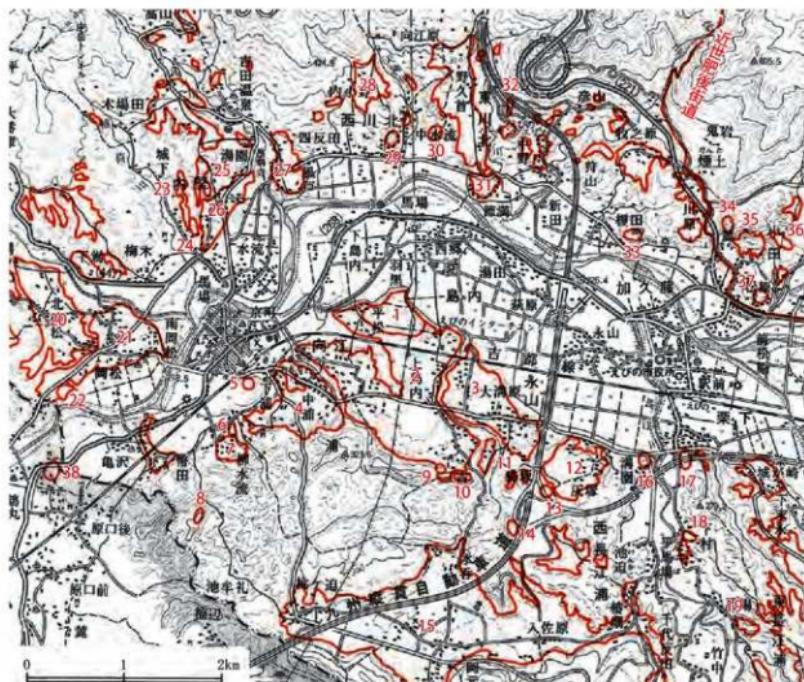
灰塚地下式横穴墓群は、市の中心付近、島内地下式横穴墓群の南東 2.5km、えびの市大字灰塚字猫坂・四日市・高仏、大字西長江浦字西城の標高 260 ~ 263 m、氾濫原との比高 28 ~ 31 m の中位段丘に立地する。墳墓群は、北東部を除く東西 550 m・南北 450 m の範囲を分布範囲として周知している。

川内川左岸には、2 ~ 3 km 間隔で、西から島内・灰塚・小木原・建山と大規模な墳墓群が立地し、小規模な遠目塚・杉水流の墳墓群が続く。右岸の大規模墳墓群は 1ヶ所（芋畑）しか無いが、小型形式の地下式横穴墓を内小野遺跡（28）で 1 基⁽²⁾、天神免遺跡（20）で 27 基⁽³⁾、岡松遺跡（21）で 2 基⁽⁴⁾ 検出している。このうち、灰塚・小木原・芋畑においては板石積石棺墓も混在する。対岸の 2 km 北には、弥生時代中期末～古墳時代中期の竪穴建物 130（推定総数 300 ~ 400）棟を検出した内小野遺跡が立地し、当墳墓群を造営した集団の主要居住地である可能性が高く、壺片を転用した溶鉄の取瓶や高杯転用輪の羽口のほか、71 号竪穴建物からは畿内産の初期須恵器大甕が、130 号竪穴建物からは小型の鉄鋤が出土している。その東には、5 ~ 6 世紀代の竪穴建物 41 棟・バリの付いた鉄斧や高杯転用輪の羽口を検出した妙見遺跡⁽⁵⁾（32）が、3 km 西には、弥生時代後期～古墳時代後期の竪穴建物 200 棟余り・高杯転用輪の羽口や鉄床石、鉄や錫を検出した転用土器片などが出土した天神免遺跡が、その南東には竪穴建物 28 棟を検出した岡松遺跡が立地する。

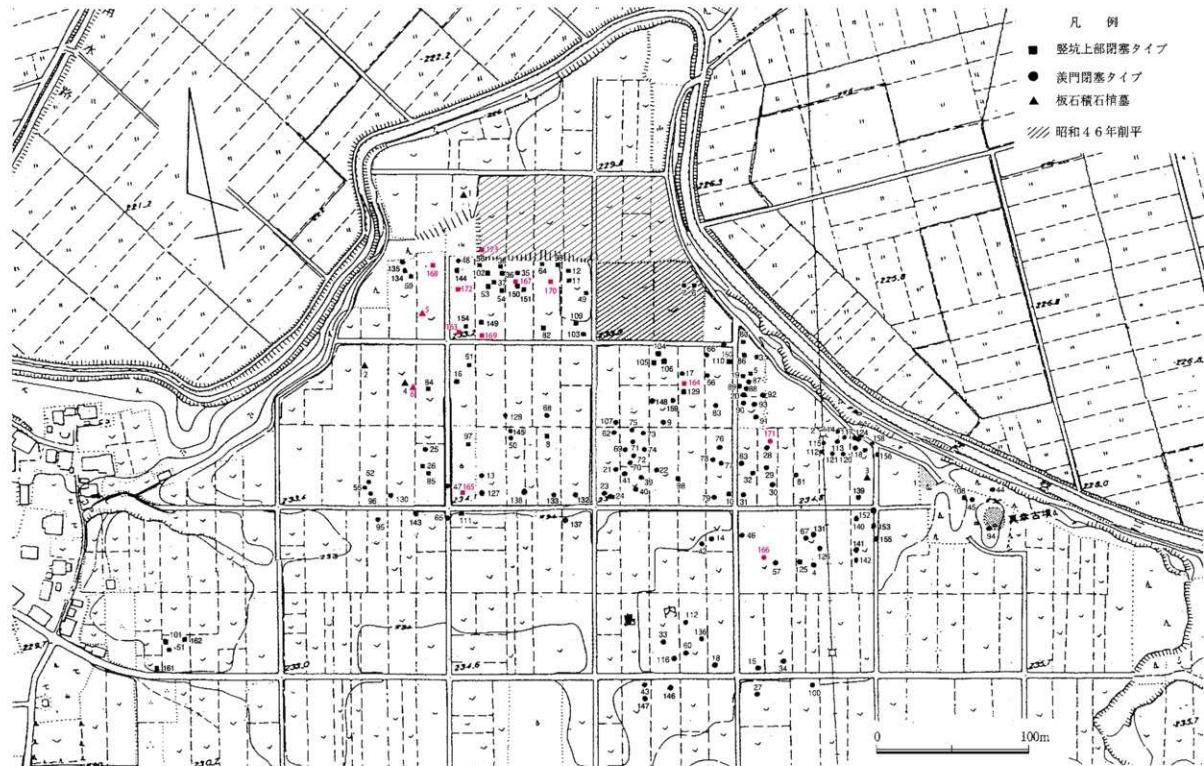
段丘下の氾濫原は遺跡が少ないが、徳永牟田遺跡（5）では弥生時代後期の壺や甕数10個が漬れた状態で発見され^⑯、自然堤防や微高地には遺跡が包蔵していることを留意する必要がある。中世には、左岸段丘の突出部や右岸丘陵の末端部に山城が連立し、肥沃な盆地と交通の要衝の覇権が争われた。三吉城西隣の独立小丘陵頂部（9）には、経塚3基があり、地権者によってうち1基から軽石製外容器が掘り出されている。

10

- (1) えびの市教育委員会「島内地下式横穴墓群」2001、同「島内地下式横穴墓群Ⅲ・岡松遺跡」2009、同「島内地下式横穴墓群Ⅱ」2010、同「島内地下式横穴墓群Ⅳ」2012、同「島内地下式横穴墓群Ⅴ・灰塚地下式横穴墓群」2017
竹中正巳・大西智和・宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群 69-70・71-72・73-74・75号墓発掘調査報告書」「人類史研究」第11号 人類史研究会 1999
竹中正巳・大西智和・宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群 76-77・78-79-87-88-89-90-91号墓発掘調査概報」「人類史研究」第12号 人類史研究会 2000
(2) えびの市教育委員会「内小野遺跡」2000
(3)・(4) えびの市教育委員会「北岡松地区遺跡群」2010
(5) 宮崎県教育委員会「久野首遺跡・平原遺跡・妙見遺跡」1994
(6) 未発表である



1:島内地下式横穴墓群 2:島内遺跡 3:大瀧原遺跡 4:中浦遺跡 5:徳永牟田遺跡 6:古城跡 7:
:古城遺跡 8:猿ヶ城跡 9:柿ヶ追絆塚 10:三吉城跡 11:小原遺跡 12:灰塙地下式横穴墓群 13:西
矢倉城跡 14:池山城跡 15:岡元遺跡 16:溝園城跡 17:稻荷城跡 18:小屋敷城跡 19:畠田城跡 20:
天神免遺跡 21:同松遺跡 22:赤花城跡 23:杉尾城跡 24:松尾城跡 25:丸ノ尾城跡 26:昌明寺遺跡
27:鳳戸遺跡 28:内小野道跡 29:東福城跡 30:新城跡 31:徳満城跡 32:妙見遺跡(消滅) 33:園田城
跡(消滅) 34:淨慶城跡 35:加久藤城跡 36:新城跡 37:小城跡 38:鶴丸、馬場地下式横穴墓群(湧水町)



第2図 島内地下式横穴墓群 遺構分布図

第3章 島内地下式横穴墓群

1. はじめに

今回報告する墳墓群は、平成27年10月以降、耕耘による陥没・通報を受けて調査した地下式横穴墓10基と、畑耕耘時に基底側石が現れたために調査を依頼された05・06号板石積石棺墓である。

2. 基本的層序

層序は上から、I層：畑耕作土、II層：旧耕作土・床土・客土、III層：黒灰～黒褐色土、IV層：アカホヤ火山灰（B P 7,300）、V層：暗茶褐色+黒褐色土、VI層：淡黒褐色土、VII層：淡黄褐色～淡茶褐色微砂質土～細砂質土、VIII層：段丘砂礫層（B C 14,700）に分別した。III層は本来はa・bに分かれ、厚さ10cm程のb層上面が古墳時代の遺構面であるが、開墾により、遺存していない地点が多い。IV層はa・bに分け、a層は淡黄褐色の2次堆積層で、遺跡によつて縄文時代前期～古墳時代の遺物包含層になつてゐる。b層はアカホヤ火山灰の本体で、最下部2～3cmは直径2～3mmの軽石粒が主体である。VII・VIII層には、小林軽石（B C 14,700、黄白色～黄橙色降下軽石）を含む。VIII層は、数10m間隔で起伏し、地形の原型を形成している。

3. ST-163（第3図）

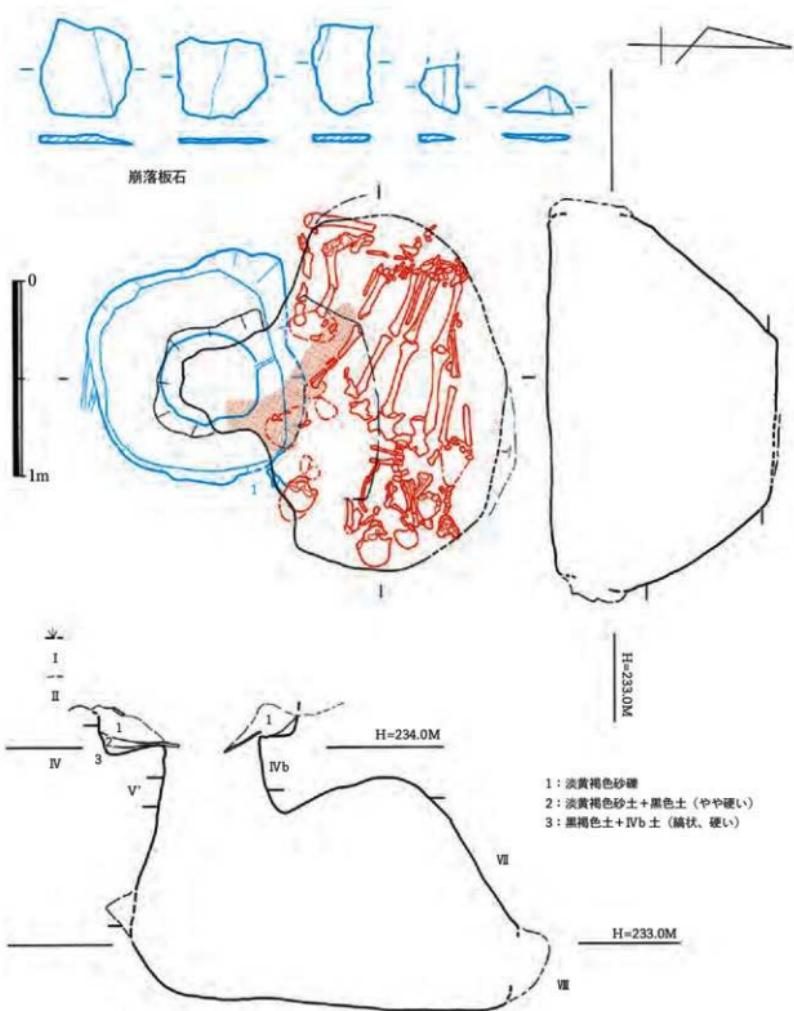
堅坑上部閉塞タイプ分布域の中央付近に位置している。大型農機の深耕耕耘によって板石が起き上がり破砕されたりして原位置をとどめず、堅坑1段目も上半部が削失している。閉塞には、長さ45cm前後・幅30～40cm前後の板石3枚と長さ30cm・幅15～20cmの板石2枚が使われている。

遺存する堅坑1段目は、東西1.2m・南北1.1mの北西部のみ角張る円形を呈し、底面は南側が10cm深い。埋土は軟質の第1層、やや硬くて混じり土の第2層、かなり緻まった第3層に分別が明瞭で、2回の追葬を窺わせる。堅坑2段目はほぼ中央に、東西0.40～0.46m・南北0.49mの楕円形を呈する。底面までの深さは、1.30mを測る。

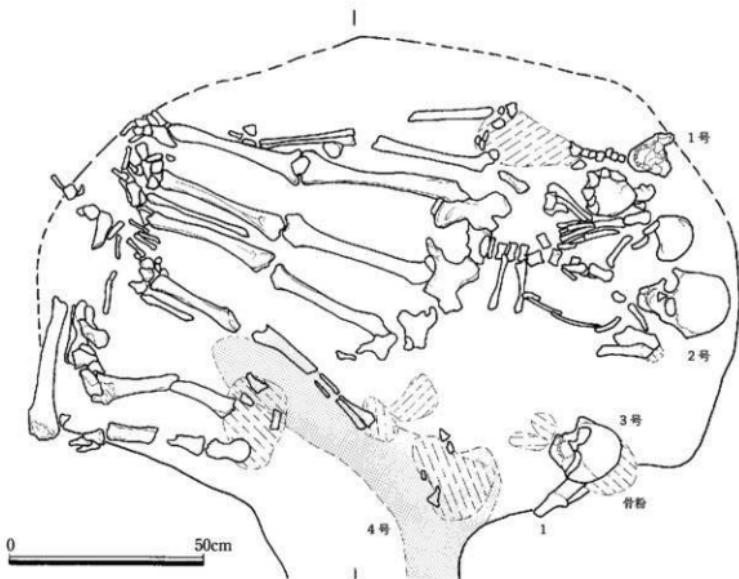
玄室は、平入り両据の楕円形を呈し、幅1.80m・奥行き1.24mを測る。天井は不明瞭な寄棟家型を呈し、高さ1.18mを測る。頂部はIV層下部に入り込み、現在の地表面まで0.7mしかない。下部0.4mほどは砂礫層内にあり、北～西壁は崩落が著しい。

被葬者は4で、全て東頭位である。1号人骨は若年（13～15歳）で、2号人骨は壯年後期の女性、3号人骨は壯年の女性で、頭の下に切先南の鉄剣1（1）が副葬されている。4号人骨は壯年の男性で、西寄りに埋葬されたことから下肢は北側に曲げられている。頭部の下～周囲には、赤色顔料が塗布されている。

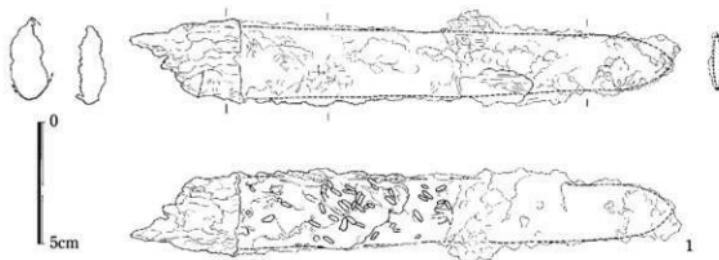
鉄剣は木把で、全長223mm、刃部長178mm・幅22～30mm、茎長32mmを測る。検出面の剣身下半には平綱が遺存し、裏面の剣身下半にはハエ囲蛹殻が多量に銹着している。把縁部には糸巻痕が残る。



第3図 ST-163 遺構実測図



第4図 ST-163 玄室内 実測図



第5図 ST-163 出土遺物実測図

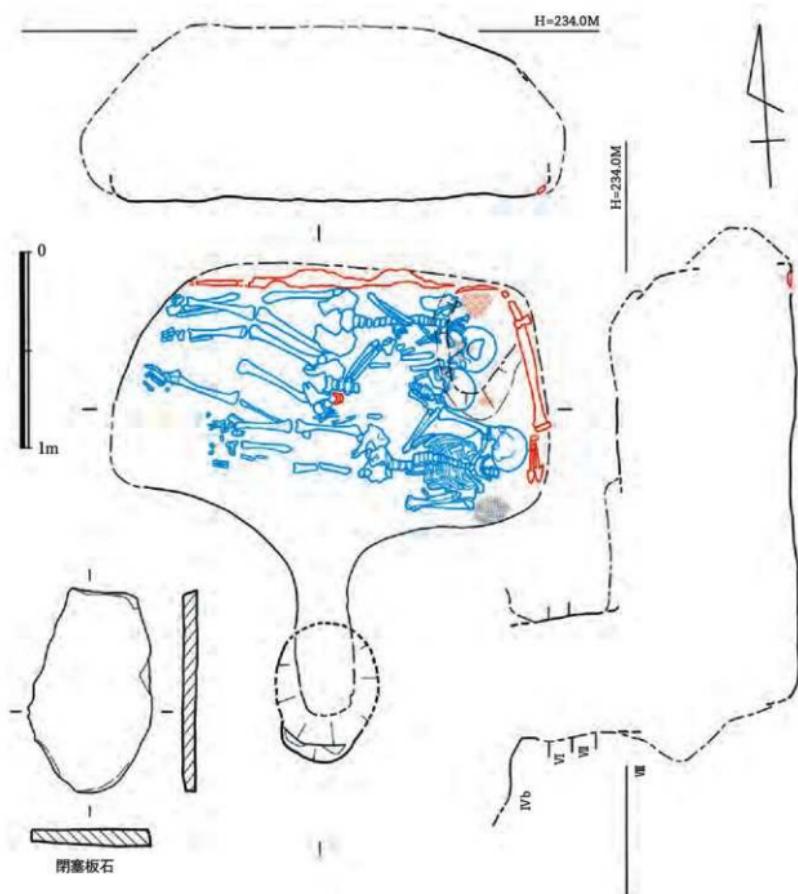
4. ST-164 (第6図)

分布域の北東部に位置する。耕耘機の鉤爪によって板石が地表に露出し、堅坑1段目も輪郭が全くわからないほど削失した状態の堅坑上部閉塞タイプである。閉塞石は、長軸82cm・厚さ7~8cmの大型1枚である。堅坑2段目は、長径62cm・短径52cmの楕円形を呈し、南側が8cm外方へ傾斜する。検出面から1.50mで底面に達し、0.8mほどで玄室に至る。

玄室は平入り両裾の隅円台形を呈し、平天井である。幅1.6~2.2m・奥行き1.25m、高さ0.90mを測る。壁面全てが砂礫層内であることから壁面は殆ど崩落していた。被葬者は3で、1・2号

の頭の下は1段（高さ4～10cm）掘り残しがある。1号人骨は熟年の男性で、右側に弓、頭の後に鉄剣1・矢3と矢入れ具が副葬されている。2号人骨は熟年の女性で、1号とほぼ同時期の埋葬の可能性が高い。左腕には6個の貝釧が装着されていた。3号人骨は壮年の女性で、最も遺存度が高い。大腿骨などが原位置ではないのは崩落土が押したためである。東南部に淡い赤色顔料が認められたが、人骨には接していない。

弓（6）は検出長1.60mを測るが、両端の弓弾部分は遺存していない。両端部20cm位は幅2～3cmの木質で、中位90cmも木質であるが崩土疊に潰されて幅5～9cmに圧延されている。東端から25～45cmの部分は赤漆が混在し、東端部22cmは赤漆のみ遺存している。鉄剣（5）は切先を南

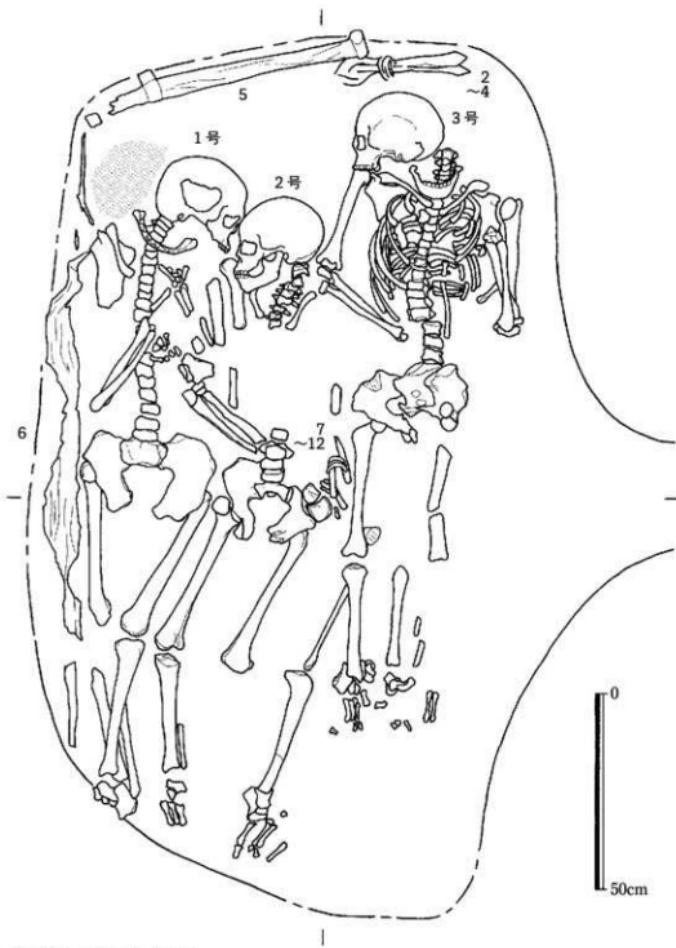


第6図 ST-164 遺構実測図

に向け、長さ 634mm、幅 41mm・剣身の長さは 507mm を測り、鞘は幅 10mm の組紐で巻かれているが、劣化が激しい。鹿角製装具と鹿角製の鞘尻と把頭飾が相当の劣化・風化しつつ遺存する。

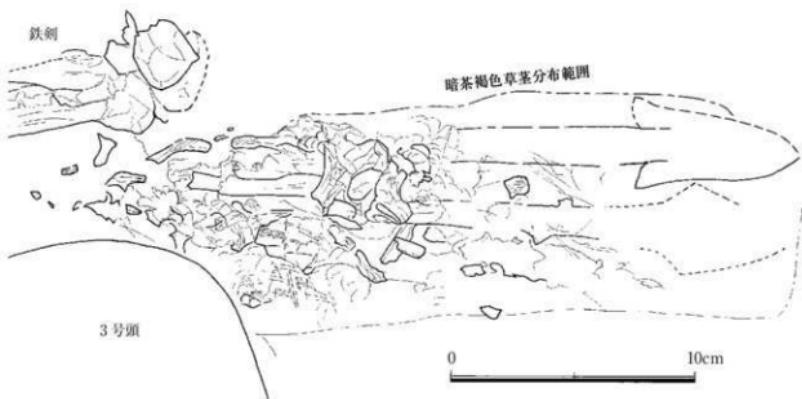
鉄剣の南には、矢柄とは異なる直径 1cm の炭化木や暗茶褐色を呈する葦類草茎もしくはツル植物の網代状断片が散在しており、矢 3 本（2～4）を入れた有機質の矢筒（第 8 図）と推定する。編込の縦横交差はやや不鮮明であった（第 9 図）が、翌日には若干劣化して一体化したように劣化した（第 8 図）。鉄鎌は、圭頭鎌 2 と腸扶柳葉鎌 1 で、錆びによる劣化が激しい。2 の口巻き部には $8 \times 5 \times 3$ mm と推定 9×4 mm の蝶の抜け殻状の付着物がある。

貝釧（7～12）は全てイモガイ製で、最大径 65～70mm・内径 54～58mm・幅 6～8mm を測る。

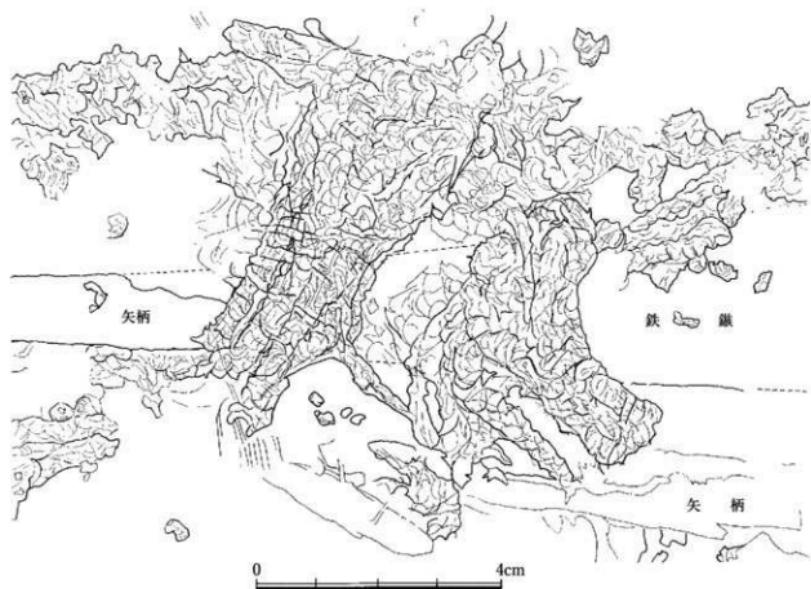


第 7 図 ST-164 玄室内 実測図

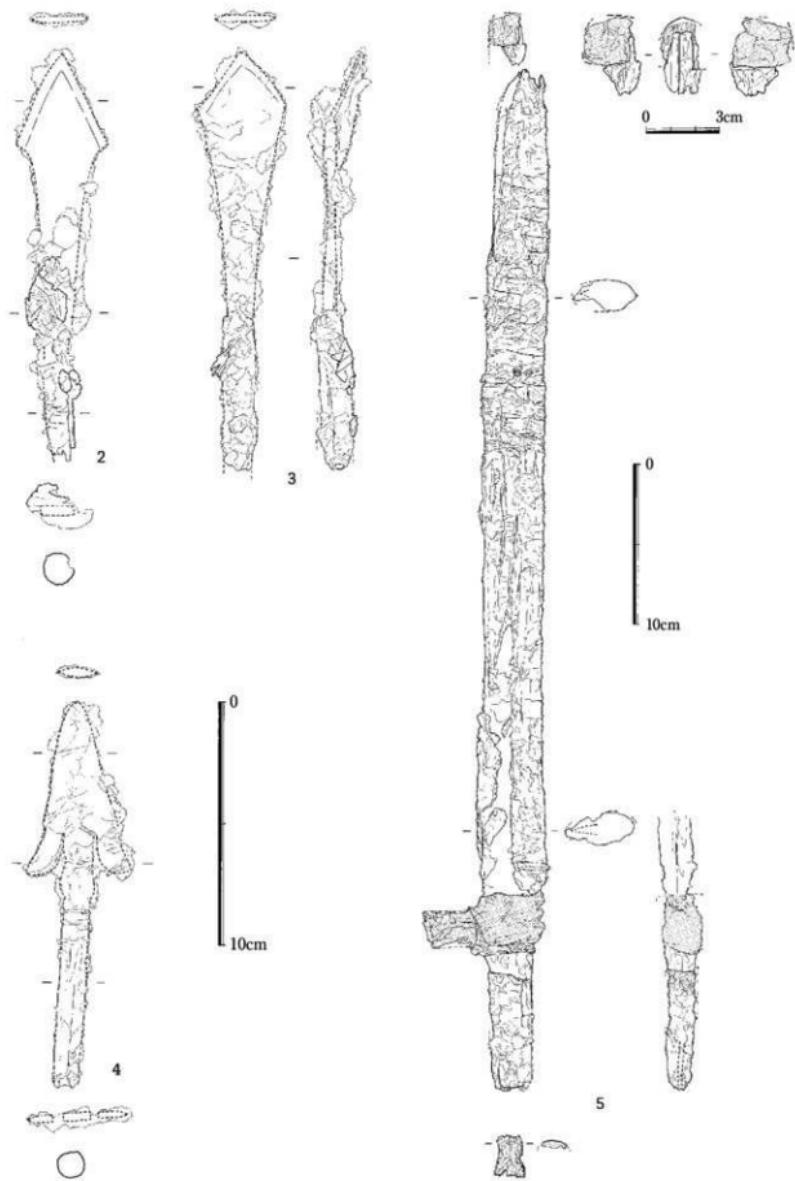
11と12の側面には赤色顔料が付着し、7と8には刻目がある。12は取上時に土中から出土したもので、遺存状態が悪い。



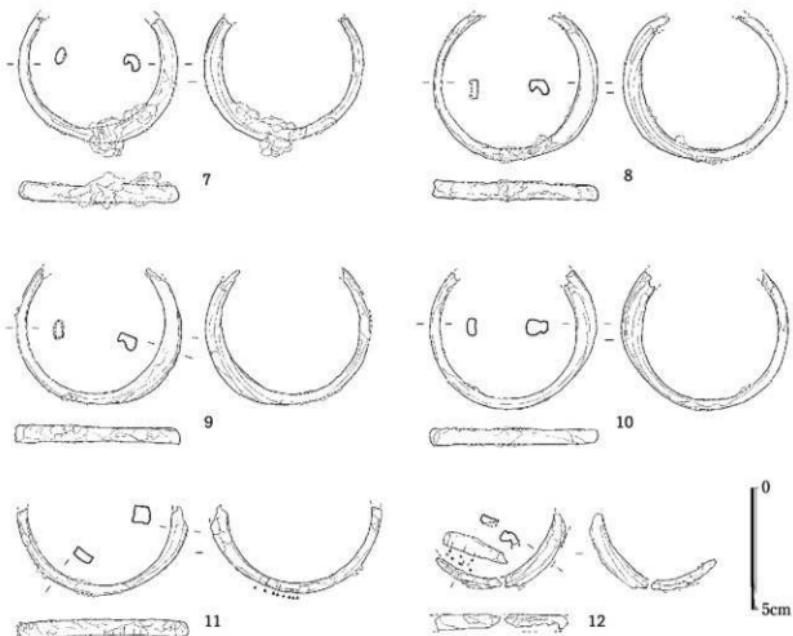
第8図 3号人骨頭部東側 鉄劍2と矢入れ具の有機物、鉄劍切先部 詳細



第9図 矢入れ具の有機物（発見直後）



第10図 ST-164 出土遺物実測図（1）



第11図 ST-164 出土遺物実測図(2)

表1 ST-164 出土貝釧観察表

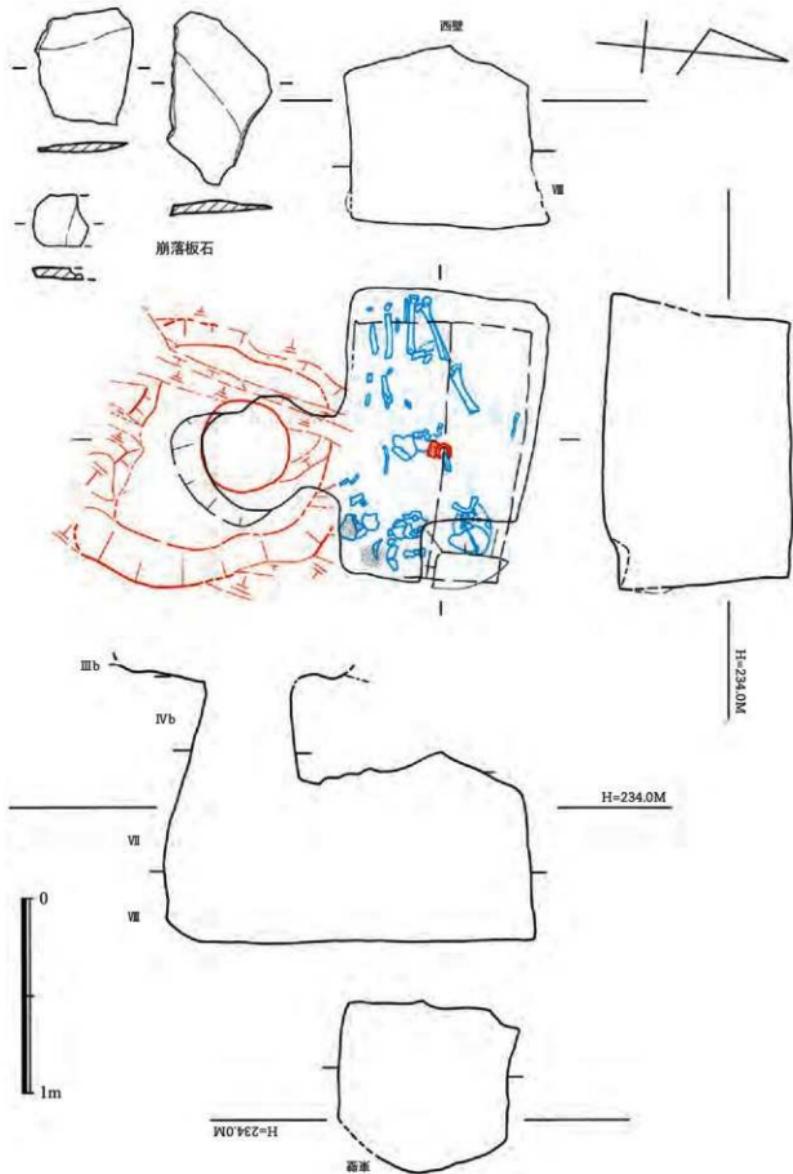
No	法量 (mm)			備 考
	最大径	内径	幅	
7	65	54	7	左側面に赤色顔料
8	68	57	6~8	左側面に朱
9	68	56	6~7	

No	法量 (mm)			備 考
	最大径	内径	幅	
10	68	55	6~7	左端側面に赤褐色有機物
11	70	58	7	B面左端の刻目は明瞭
12	—	—	7	刻みは2本か

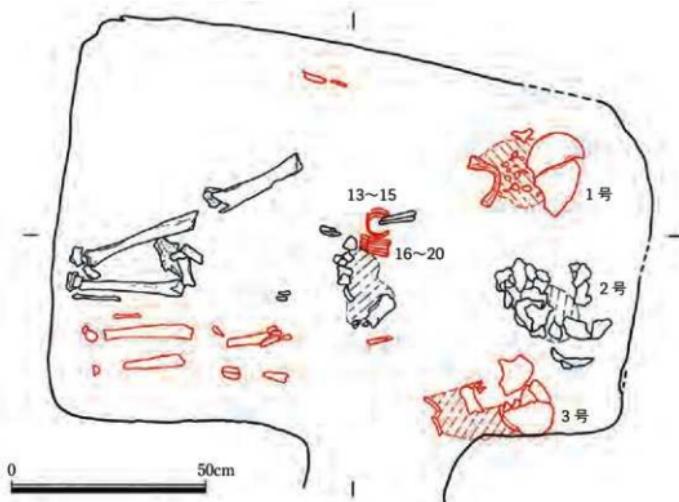
5. ST-165 (第12図)

分布域の中央やや西寄りに位置した、堅坑上部閉塞タイプである。耕耘によって板石3枚がもちらり、発見された。擾乱土除去後に堅坑プランを検出した際、VII層(砂礫)主体の上層とVII・III層混じりの下層に分別できたので、追葬痕と推定したい。

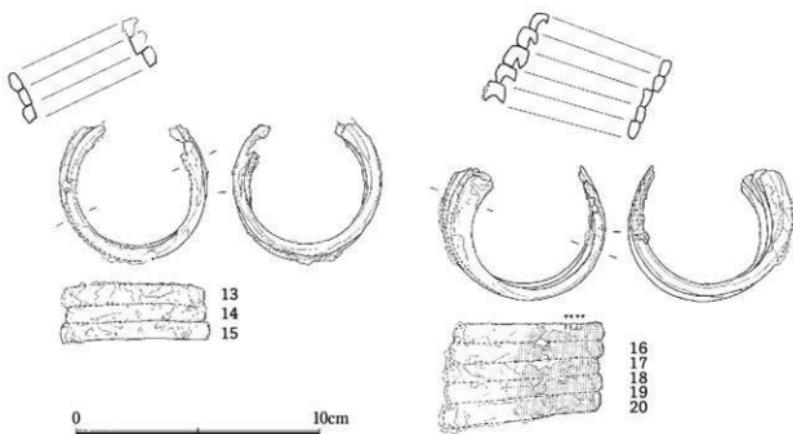
堅坑1段目は不整形で、南北1.1m以上・東西1.0~1.4mを測り、中央やや北側に直径0.45mの2段目が穿たれる。深さ1.32mで底面となり、玄室奥壁までほぼ水平である。羨道は長さ0.2mほどで、幅0.35mを測る。玄室は平入り両裾の限円長方形を呈し、天井は切妻の家型である。幅は1.48m・奥行き0.85~1.02m・高さ0.96mを測り、西側が広い。北東部には高さ7~12cmの掘り残しがあり、造り付け枕の機能である。



第12図 ST-165 遺構実測図



第13図 ST-165 玄室内 実測図



第14図 ST-165 出土遺物実測図

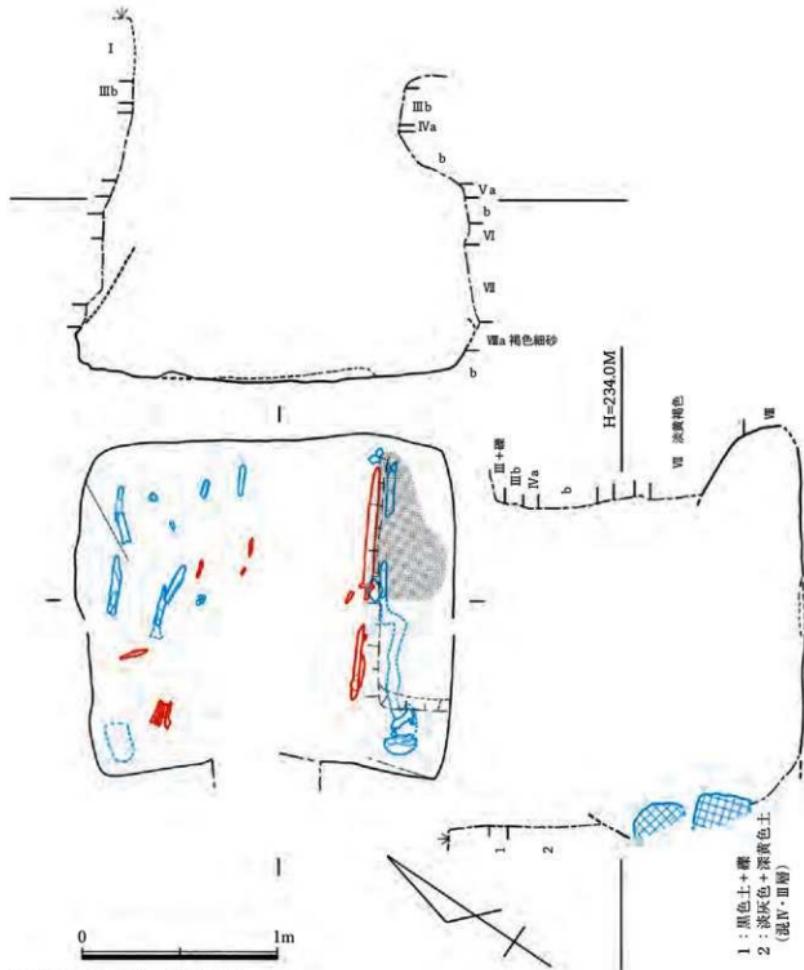
被葬者は3で、頭位は東である。1号人骨は熟年の性別不詳で、頭骨のほか僅かな遺存である。2号人骨は熟年の女性で、右腕に貝釧3が貫通し、5が離脱横転していた。東壁崩落時の衝撃によるものと推定される。3号人骨は若年（12～15歳）である。

貝釧（13～20）は、最大径58～64mm・内径46～52mm・幅7～9mmを測る。側面の6割に茶褐色の有機物（表皮）が残る。13の左側に刻み1、16に刻み4がある。

表2 ST-165 出土貝釧觀察表

No	法量 (mm)			備 考
	最大径	内径	幅	
13	59	47	7	左側に刻み 1
14	58	46	7	
15	60	49	7	本来は 4 と隣接
16	60	49	8	刻み 4 か
17	62	51	7 ~ 8	側面の 6 刻に茶褐色表皮
18	62	49	8 ~ 9	
19	64	51	7 ~ 8	
20	64	52	7 ~ 9	

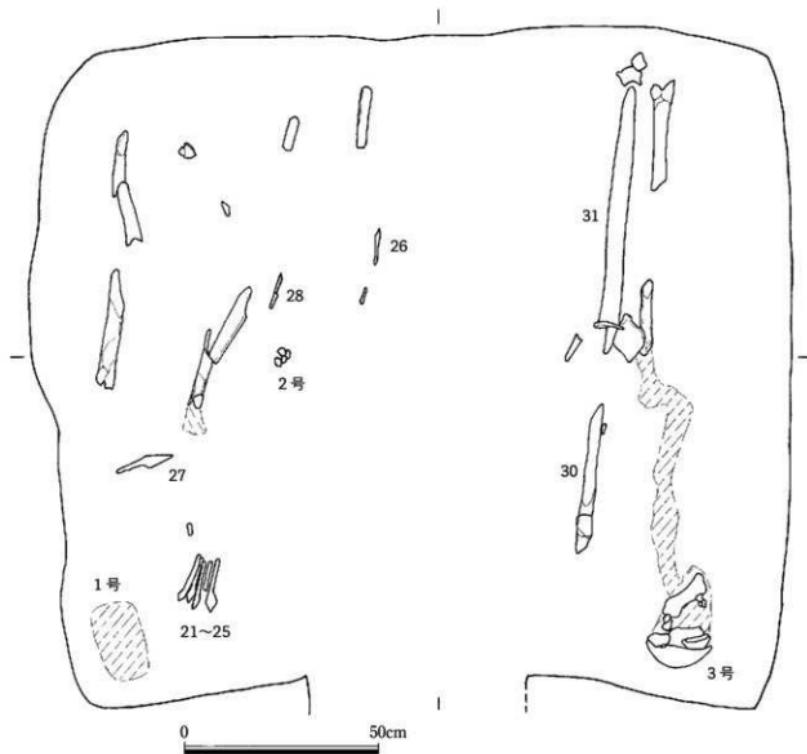
6. ST-166 (第 15 図)



第 15 図 ST-166 遺構実測図

分布域の東南部に位置した、羨門土塊閉塞タイプである。表土直下の遺構面は生きているが、羨門から玄室にかけての天井は全て崩落していた。VI層が軟弱なことから、以前から徐々に崩落していたようである。竪坑は未調査であるが、陥没坑壁面の最上層をみると、北西部には黒色土の下に淡褐色土の粗粒混じりが、東部には疎混じりの黒色土が厚さ10cmほど認められ、墳丘もしくは掘削廃土として遺存している。

玄室は、平入り両裾の隅円長方形を呈し、天井の高さは、羨道部で0.86m、奥壁で0.30mとかなり低い。幅1.94m・奥行き1.64mの寄棟タイプである。被葬者は3で、南頭位である。遺構面から床面までの深さは1.52mしかないことも人骨の遺存状態の悪さの要因である。1号人骨は性別不明の熟年で、頭部の東側に鉄鏃5(21~25、出土状況実測図と写真的ものは原位置ではない)が置かれ、腹部には切先東の刀子(27)が身体と直交していた。腹部の右には乳歯があり、その北方に痕跡程度の腔骨がある2号人骨は幼児(3~4歳)で、右に鉄鏃1(26)、左に刀子1(28)が副葬されている。取り上げた「歯」の中には錫製耳環1(29)が混入していた。

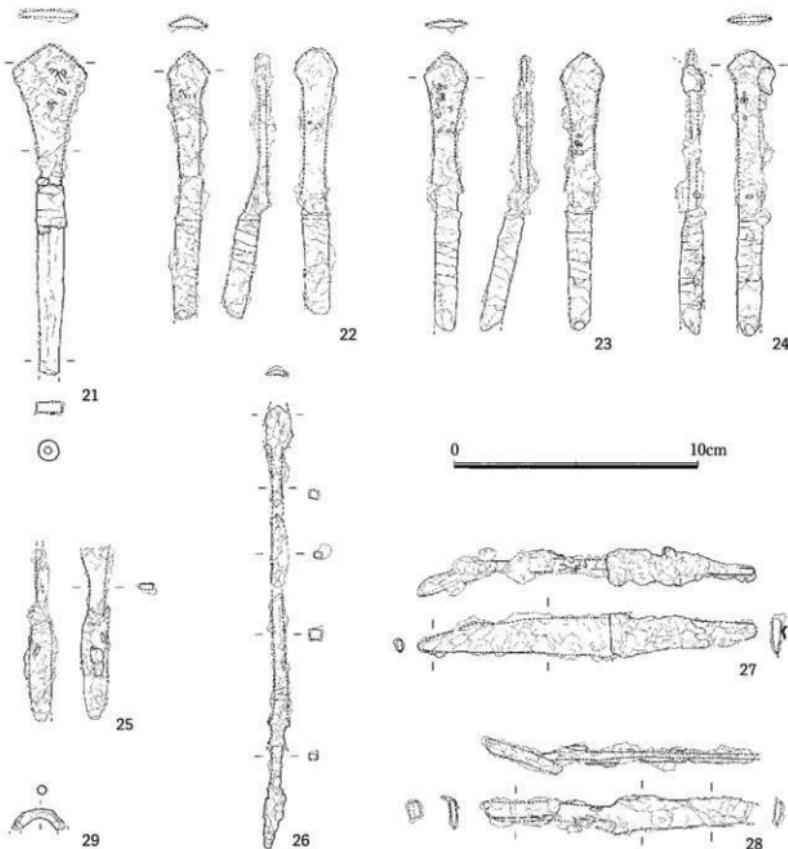


第16図 ST-166 玄室内 実測図

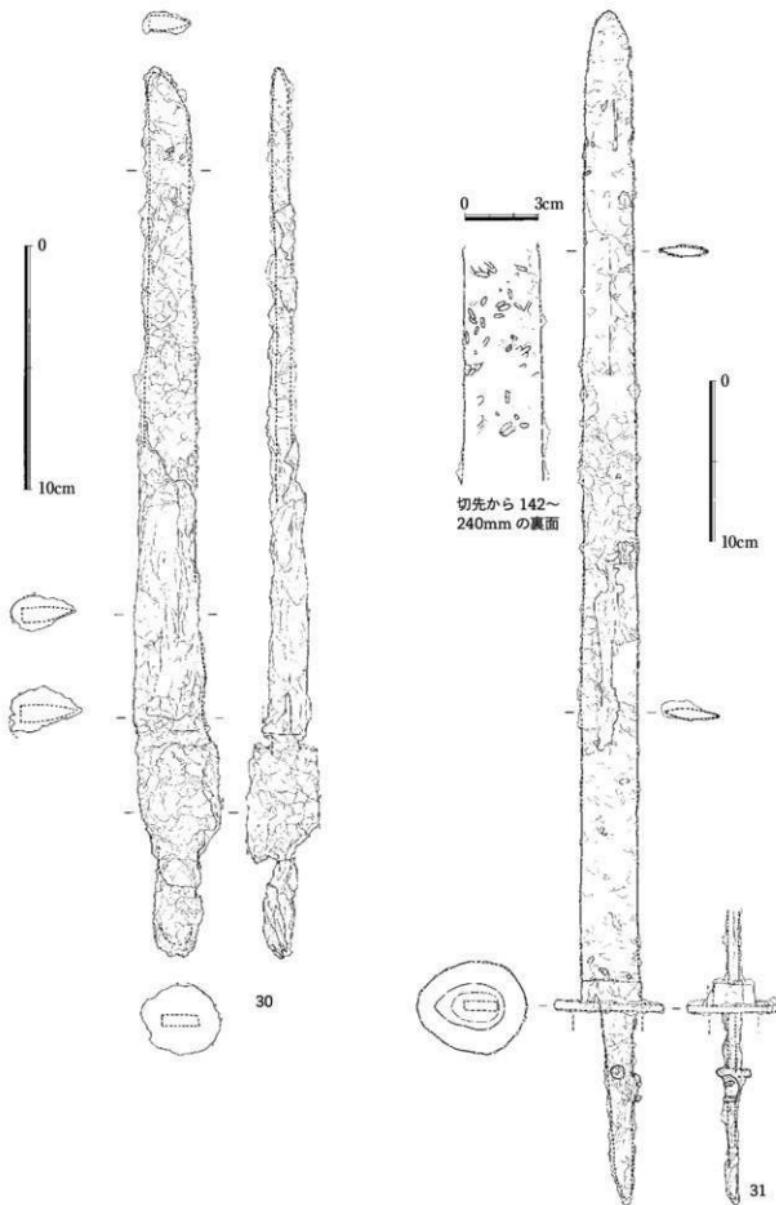
3号人骨は性別不明の成人で、頭部と西半分にはⅦ層主体の土塊で屍床が築かれ、左上腕部に切先北東の鉄小刀（30）、少し離れて切先北東の鍔付鉄剣（31、茎は崩落土圧によって西にずれている）が高まりの上に埋葬されている。鉄鍔は無く、下肢部分の床面に赤色顔料が塗布されている。被葬順序は、3号→1号→2号と推定される。

遺物の下にはⅦ層主体の貼床土がある。崩落土を掘り上げた時、天井塊の下に10～20cmのⅢ～Ⅳ層混じりの土が堆積している所もあり、貼床との区別が困難であった。

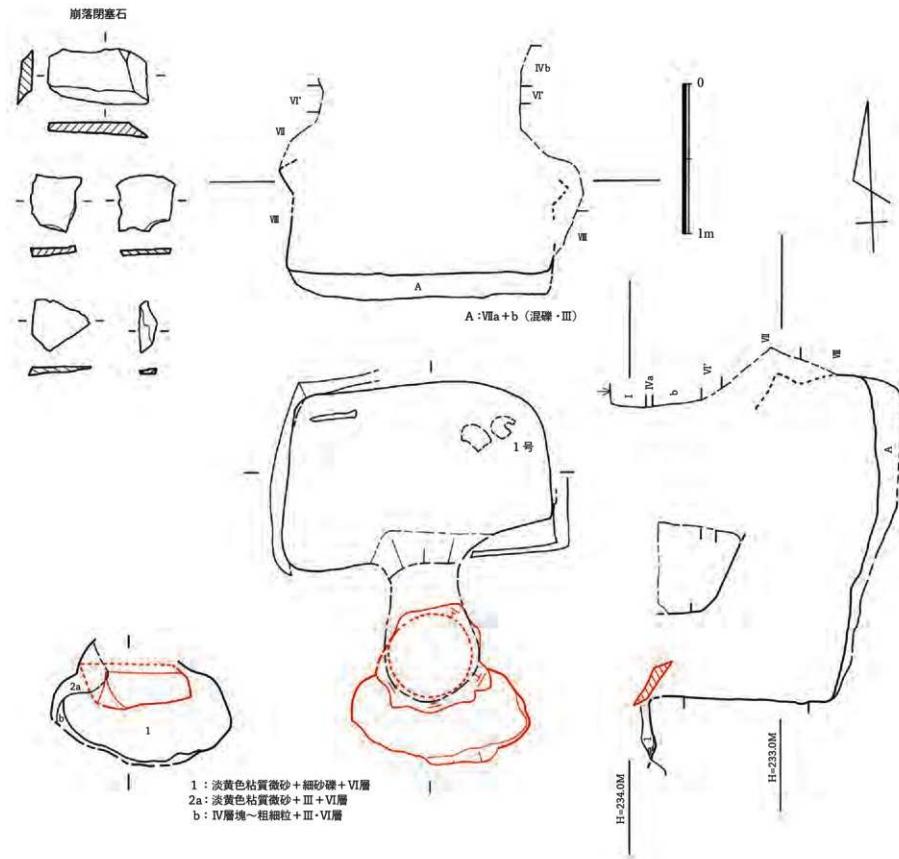
鍔付鉄剣の無窓鍔は56×68mmの倒卵形で厚さ5mmを測り、鍔と鍛接されている。木製把には、直径2～3mmの紐が遺る鹿角装具片が遺存する。剣身全面は層状剥離が進行しており、鑄が不明瞭



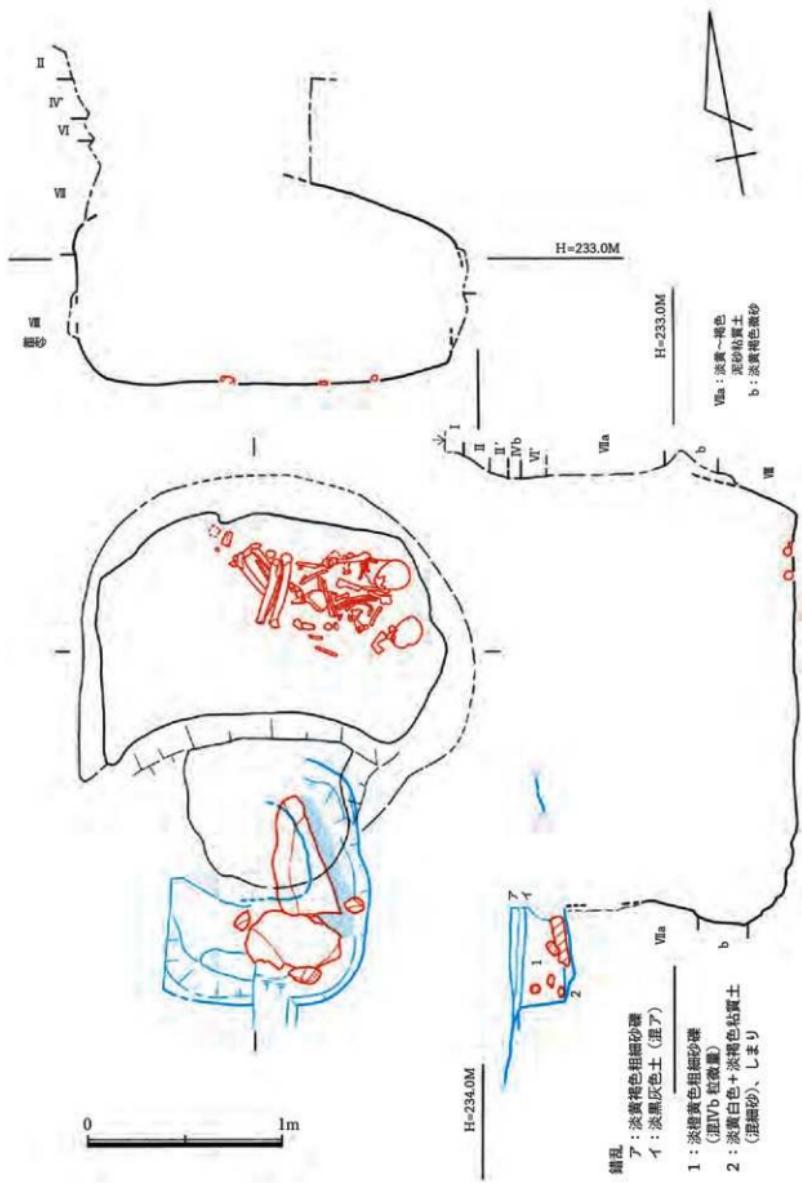
第17図 ST-166 出土遺物実測図(1)



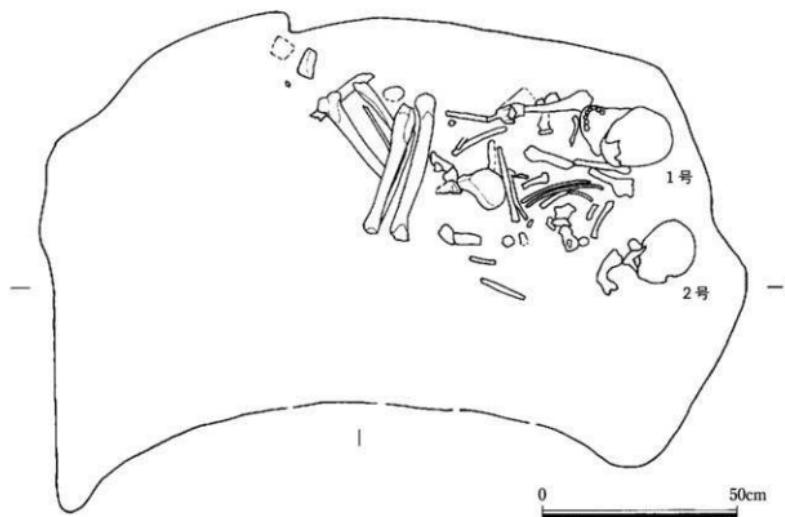
第18図 ST-166 出土遺物実測図（2）



第19図 ST-167 遺構実測図



第20図 ST-168 遺構実測図



第21図 ST-168 玄室内 実測図

である。また、剣身裏面の切先から 150 ~ 220mm の部分と鉄鎌 5 本の群には、ハエ團扇殻が集中して銹着している。

なお、元興寺文化財研究所の山田卓司氏によるエネルギー分散型蛍光X線分析装置を使用した分析によると、貝成分由来の物質であり、つまり、表皮であると判定された。

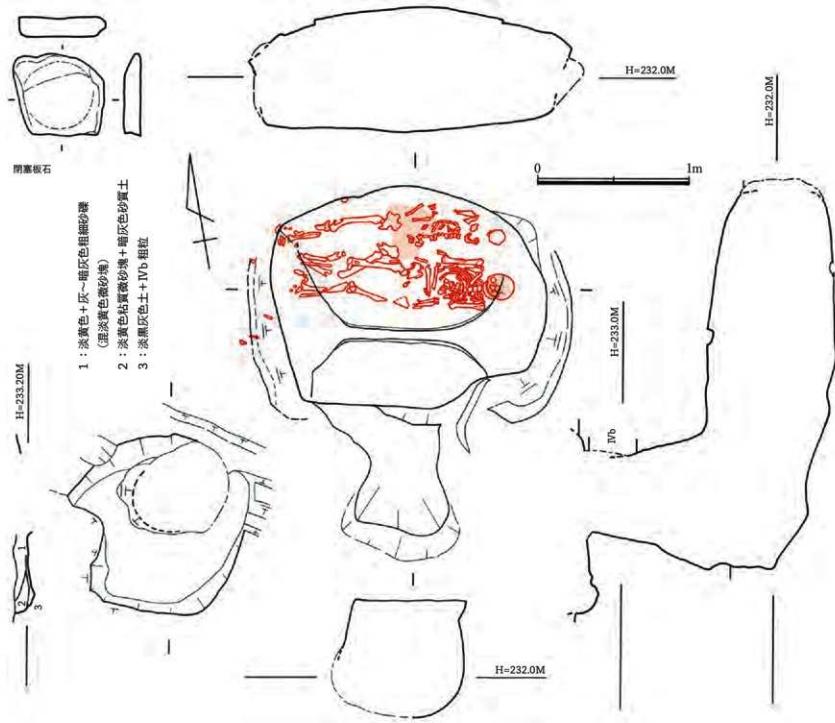
表3 ST-166 出土遺物観察表

No	種類	法量(mm)			備考
		全長	刃部長	刃幅	
21	鉄鎌	136	11	30	口巻2cm、ハエ團扇殻少量
22	鉄鎌	109	7	17	ハエ團扇殻少量
23	鉄鎌	(94)	(8)	18	ハエ團扇殻少量
24	鉄鎌	118	6	18	ハエ團扇殻少量
25	鉄鎌	(130)	—	—	主頭鍔、革銹着、ハエ團扇殻少量

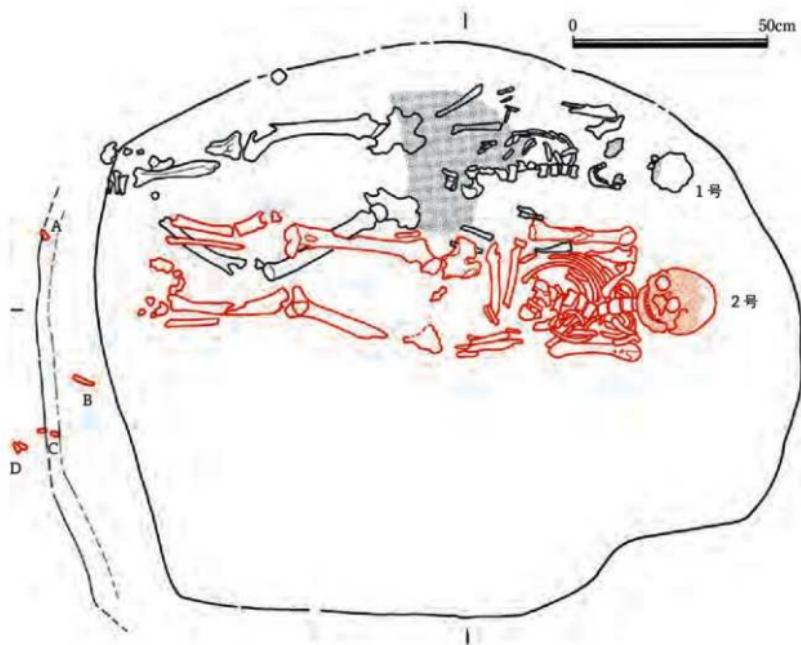
26	鉄鎌	(179)	—	(11)	3号人骨
27	刀子	138	79	16	2号人骨、鹿角柄、目釘1、棟にハエ團扇殻
28	刀子	112	(57)	14	3号人骨、木柄、
29	耳環	外径22	内径13	太4	暗茶褐色に乳白色斑、全面風化・劣化
30	小刀	362	264	25	木把鹿角装、切先付近にハエ團扇殻
31	鉄劍	737	596	35	跨付、ハエ團扇殻多量

7. ST-167 (第19図)

分布域の北中部において、深さ 40cm の耕耘によって竪坑上部閉塞の板石が半壊し、玄室が陥没した。竪坑 1 段目も相当の削失を受け、東西 1.19 m ・南北 0.70 m ほど・深さ 3 cm ほどしか遺存していない。閉塞石は 1 枚のみ原位置を保つが、農機の加圧によって 15cm 減り込んでいる。竪坑覆土の



第 22 図 ST-169 遺構実測図



第23図 ST-169 玄室内 実測図 A～D：壁面に置かれた小骨

2b層は堅く縮まり、色調も異なる。堅坑2段目は、直径53～55cm・深さ1.22m（さらに貼床が3～8cm）で北に下降する。羨道は、長さ0.5m・幅0.45m・高さ0.80mである。

玄室は、平入り両裾の隅円台形（南東隅のみ角張る）を呈し、床面は幅1.60m、奥行き1～1.16m、高さ0.8m以上である。北東コーナーは円く、隅円台形に近い。天井は切妻の家型を呈し、45～66度の鋭角な廟が巡る。床面には、厚さ13～23cmのVII層主体の貼床が施される。被葬者は東頭位の1体（熟年）で、赤色顔料が塗布された頭蓋骨と下頬、脛骨が遺存していた。副葬品は無い。

8. ST-168（第20図）

分布域の北西部において、前述墓と同様の耕耘によって堅坑上部閉塞の板石が持ち上がって開口し、玄室天井が陥没した。玄室中央付近から堅坑中心部にはトレッチャードの溝が走り、20～30年前にはすでに玄室に土砂が流入したようで、ビニルシートやビニル廃材も投入されていた。

堅坑北半部は消失しかけっていたが、南半部は西壁以外が遺存する。堅坑の長さは1.25m以上、幅1.03m以上の隅円長方形を呈し、底面は北に向かって上昇し、直径0.58mの2段目が開口する。覆土は2層で、下層には細砂が混じって縮まっている。閉塞石は長さ50～60cm・厚さ8～15cmの厚手の平石3個が拳大の礫と淡黄白色の粘土で目貼を施されている。堅坑2段目は、深さ1.14mを測り、羨道の底面と一体化している。

玄室は3cmの段差がついた平入り両裾タイプで、床面は幅1.5～1.78m、奥行き1.02m、高さ1.04m以上を測る。西壁は真直で東壁は突出した扇形を呈し、床面から0.6m上の廟部が最大幅(2.0m)になる。被葬者は2で、充分なスペースがあるにもかかわらず屈葬で、東頭位、頭蓋にのみ赤色顔料が塗布されている。1号人骨の年齢・性別は不詳で、遺存度が悪い。2号人骨の詳細も不明で、左半身の遺存度が悪い。

直径2mの円形と屈葬は、板石積石棺墓の影響を受けた可能性も考えておく必要がある。

9. ST-169 (第22図)

分布域の北中部に位置する。陥没通報を受けてすぐに確認すると、堅坑上部閉塞の板石が崩落していたが、堅坑～羨道の壁面に赤色顔料を塗布しているのが見えた。

堅坑は、擾乱と耕耘によって北半分と南西部が破壊されたが、平・断面において明瞭な追葬坑を確認した。1段目は、東西・南北1.18mの不整円形を呈し、底面は南端で深さ0.14mに傾斜する。2段目は北寄りに、復元直径0.45mで穿たれ、南端では深さ1.44mで羨門方向には0.30m下降する。玄室底面はさらに0.1m下がる。羨門の幅は0.70m、高さ0.98m、長さ0.40mを測る。閉塞石は、長さ0.6m、幅0.54m、厚さ0.10～0.13mの厚手の1枚石である。

玄室は、平入り両裾の半円半長方形プランで、東西壁に廟が遺存し、北(奥)壁部は全て崩落している。床面は、幅1.8m・奥行き1.46mで、高さ0.85mを測る。廟は幅2～3cmの斜面で、略円形(東西2.14m)に巡る。天井の中央南寄りには、2～4cmの段差で棟木と寄せ棟が削り出され、全面に赤色顔料が塗布されている。被葬者は東頭位の2であるが、副葬品は無い。2号人骨の頭部をはじめ、椎骨や寛骨・大腿骨などには直径1cmほどの、甲虫やケラによる穿孔が多数確認される。1号人骨は壮年の男性で、2号人骨は壮年の女性である。西壁の4ヶ所には、肋骨や中手骨1片ずつが置かれている。堅坑上部閉塞タイプで壁面全面に赤色顔料を塗布した例は初見である。

10. ST-170 (第24図)

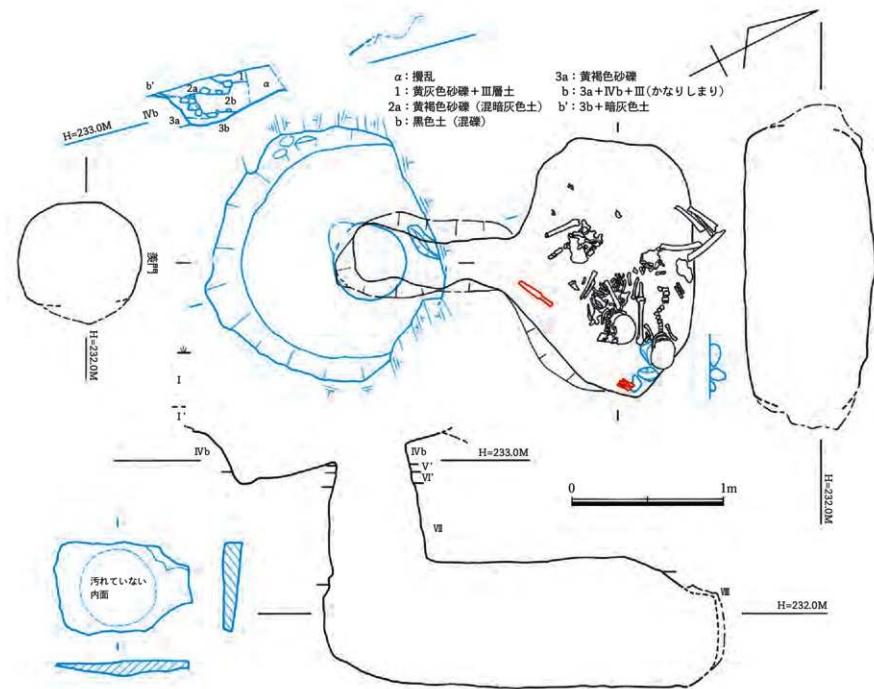
分布域の北中部に位置する。堅坑は耕耘により、北半部の破壊がひどく、堅坑上部閉塞石の位置も定かでない。断面においては、明瞭な追葬を確認した。堅坑1段目は、東西1.7m・南北1.54mが遺存し、南端部で深さ0.35mに傾斜する。堅坑2段目は直径0.45～0.48mに穿たれ、底面は深さ1.3～1.46mの傾斜がある。羨門は、丸天井で、幅0.64m・高さ0.83m、長さ0.56mを測る。

玄室は、平入り両裾の楕円形タイプで、東西壁は垂直に近い。床面は、幅1.68m・奥行き1.2mを測り、天井はほぼ平坦で、高さ0.80～0.85mを測る。

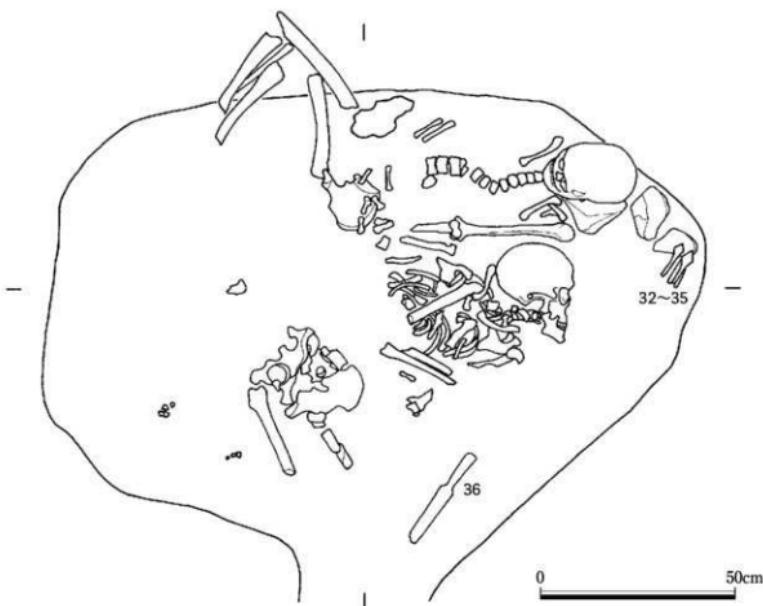
被葬者は東頭位の2で、立膝である。1号人骨は熟年の男性で、左側のみ枕石を有する。後頭部から東側は崩落砂礫に埋没していたが、拳大の疊2と圭頭鐵4(32～35)を検出した。2号人骨は壮年の男性で、下肢が羨道部を向く。左側には、切先南西の鉢(36)が副葬されている。鉢は抜身で平絹に巻かれていた。袋部の内面にも木質の痕跡は無い。

表4 ST-170 出土遺物観察表

種類	法量(mm) ()は現在			備考
	全长	刃部長	刃部幅	
32 鉄劍	99	14	25	口巻き部かなり風化
33 鉄劍	93	14	26	口巻き部かなり鋸彫れ



第24図 ST-170 遺構実測図



第25図 ST-170 玄室内 実測図

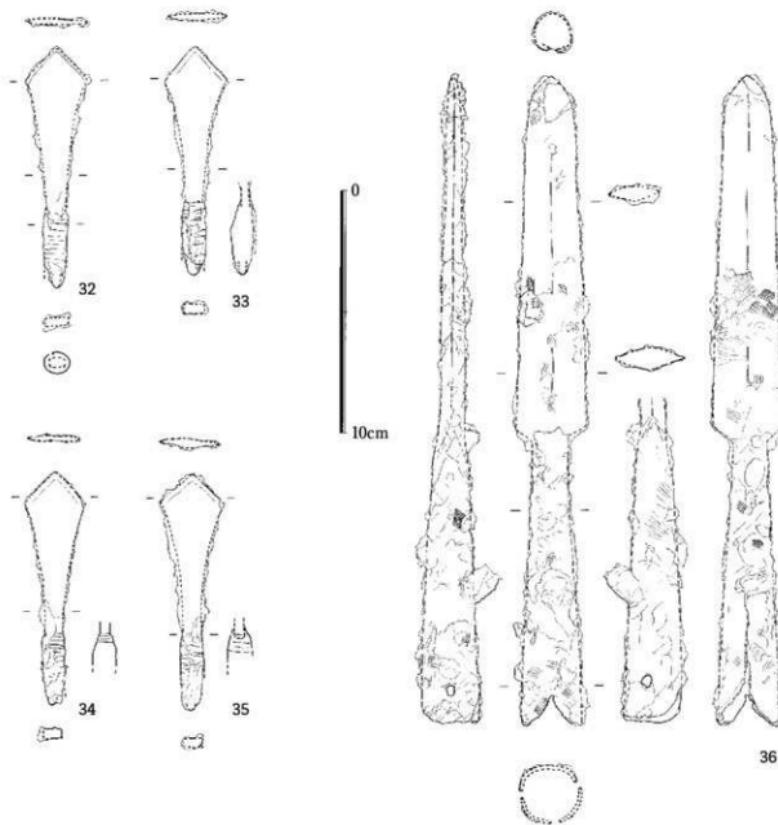
11. ST-171 (第27図)

分布域の東半中央付近に位置した、済門板石閉塞タイプである。陥没後3～4ヶ月経過しているとみられ、黒色土が10cmほど堆積し、天井まで枯葉が付着していたので、7月の大霖で水没したものと推定される。玄室は頂部付近に、平成6年夏の少雨による地割れ面で構成される天井塊が0.4m平方程度、農機の加重によって陥没した。竪坑は未調査であり、2枚以上の閉塞石の下は土砂で埋められているが、かなり締まっている。

玄室は平入り両掘タイプで、天井は寄せ棟の廂を有する家型である。幅1.60～2.07m・奥行き1.50mの円角長方形を呈し、高さ1.04mを測る。廂は幅3～4cmで30度前後の傾斜があり、所々崩壊している。

被葬者は3で、1号人骨は壯年（20～30歳）の女性である。頭部に赤色顔料が塗布され、右横に木柄刀子1（42）、東側に足の骨2片が置かれている。右大腿骨周辺にも赤色顔料が厚さ2～5mm程度の粗粒を多く含んで広がっている。刀子は関節部が誇張して屈折している。茎部は短く刃部に革鞘片、柄に布の痕跡がある。

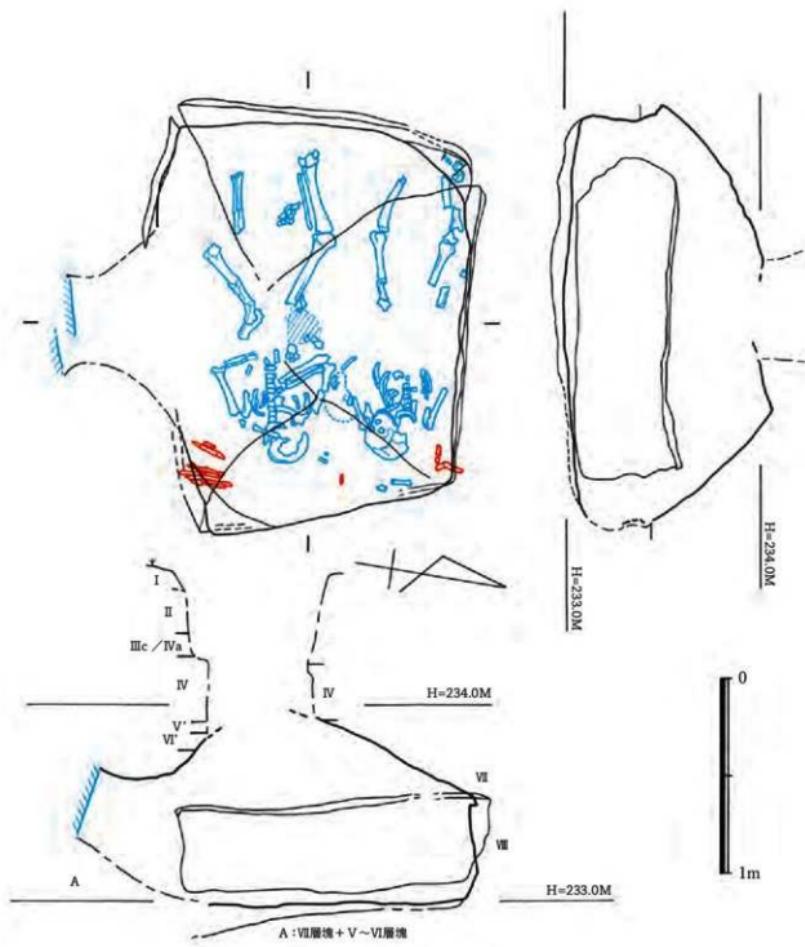
2号人骨は小児で、1・3号人骨の上腕の間に位置する。頭骨は崩壊扁平状態で、下頬乳歯が遺存する。東方55cmに、切先西南のミニチュア刀子（43）が副葬されたようである。鹿角装で、刃も



第26図 ST-170 出土遺物実測図

付いている。

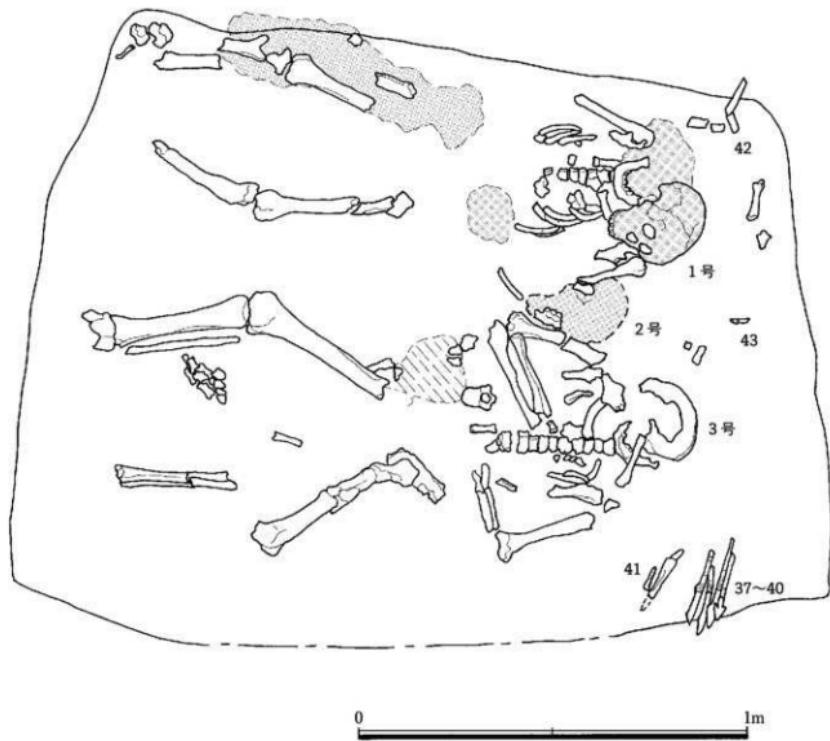
3号人骨は熟年の男性で、左鎖骨は下頸の上に立て掛けられ、腰椎3個が右腹部に置かれている。腰椎部下の指の骨も不自然な位置にある。頭の南東外方に切先南の鉄鎌4(37~40)と切先北の鎌1(41)が置かれている。鉄鎌は、片刃の長頭鎌2と長三角形鎌1、脇抉三角形鎌1で、矢柄の殆どは消失している。鎌は鹿角装で、刃部は幅狭くなり反っている。



第27図 ST-171 遺構実測図

表5 ST-171 出土遺物観察表

△	種類	法量(mm) ()は現存			備 考			40
		全長	刃部長	刃部幅				
37	鉄鏃	119	48	24	茎部誘曲			41 鉄鏃 176 34 8 鹿角柄、切先に革、基部端に紐
38	鉄鏃	203	45	30	竹柄末端に黄褐色付着物			42 刀子 123 87 19 木柄、革製鞘少量、茎部45度誘曲
39	鉄鏃	(150)	(20)	8	切先・基端消失、片刃・逆刺			43 刀子 68 45 9 鹿角柄、革製鞘少量、ミニチュア



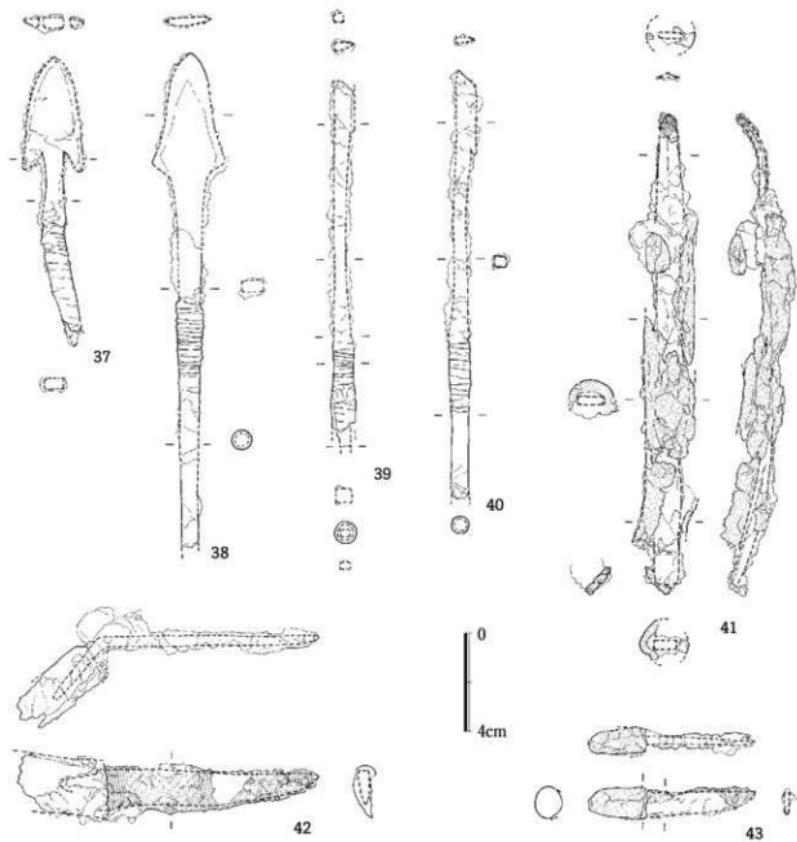
第28図 ST-171 玄室内 実測図

12. ST-172 (第30図)

分布域の北西部に位置した、堅坑上部閉塞タイプである。深耕鉤爪によって閉塞石2枚が持ち上げられて空洞が露出した。大きい方の板石には、赤色顔料が薄く粗雑に塗布してある。

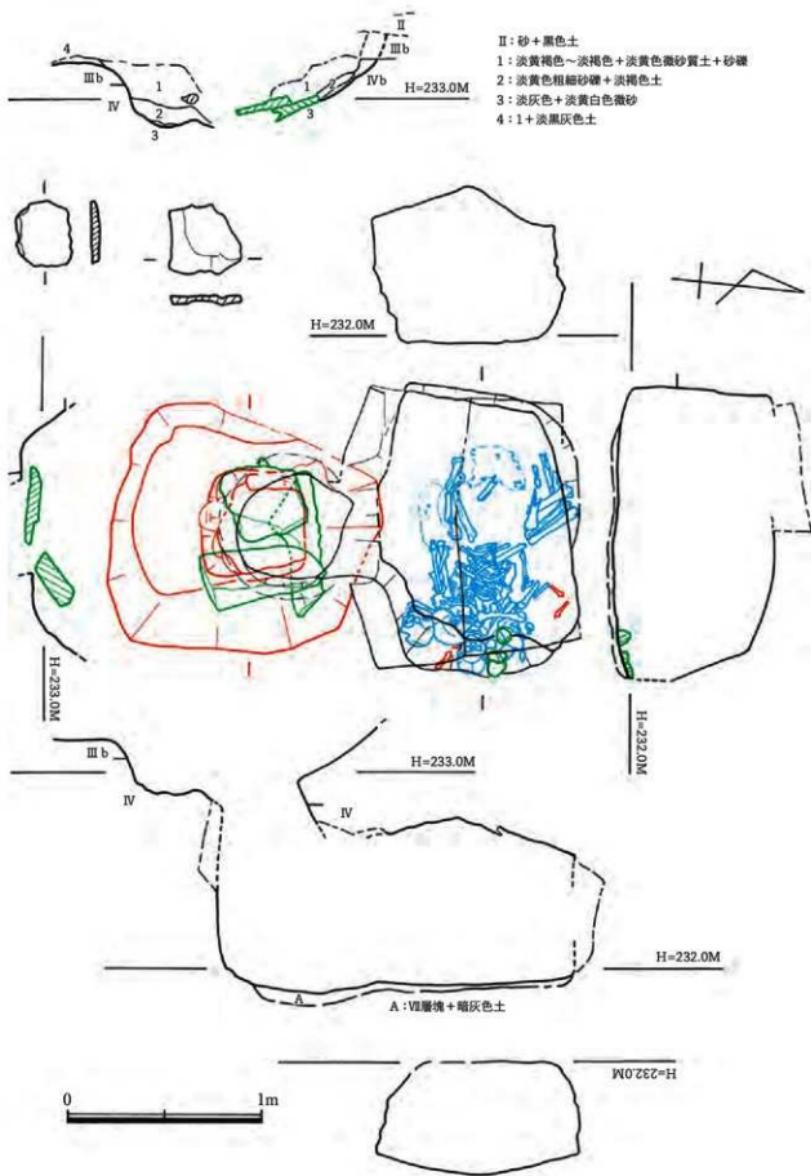
検出面での堅坑1段目は、東西1.24m・南北1.38mの隅円五角形を呈し、最深部は0.32mを測る。12cm上のⅢb層上面が本来の遺構面である。埋土は4層に分けられ、少なくとも2回の追葬を予測した。閉塞石は5枚である。堅坑覆土にはIV~VII層をほとんど含まず、上位階層の墳丘盛土として運ばれたと推定される。堅坑2段目の西壁は、農機の加圧によって17cmズリ落ちているものの、33×35cmで南辺が胴張る方形を呈する。深さは1.04mでかなり浅い。底面と羨道は一体化する。

玄室は平入り両据の隅円長方形を呈し、天井は切妻タイプの家型である。幅1.1~1.44m・奥行き0.70~0.84mで、東側が広く、高さは0.85mを測る。天井の左中央部と奥壁の東半分の下半は崩落していた。砂礫層上層の砂層が非常に脆いためである。堅坑底面~玄室床面全面に、厚さ1~7cmの貼床がある。



第29図 ST-171 出土遺物実測図

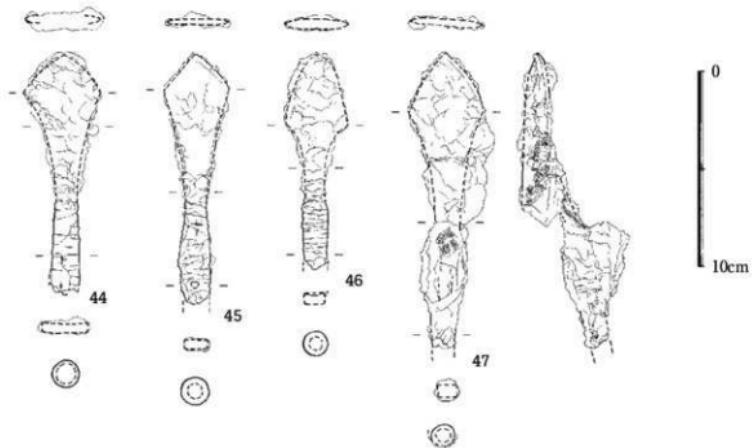
被葬者は4で上半身の遺存度は良いが、追葬者のスペース確保のために押されている。1号人骨は熟年の女性で、圭頭鎌2が副葬されている。壁崩落によって位置・方向が異動している可能性が高く、切先東で置かれたと推定される。顔面右には円礫が落ち込み、その上に塗布されている赤色顔料は2号人骨顔面塗布時に塗布された可能性が高い。2号人骨は熟年の男性で、頭部右側に枕石2が置かれ、頭骨に丁寧に赤色顔料が塗布されている。3号人骨は壮年の男性で、頭頂下に赤色顔料がある。頸関節の下から出土した圭頭鎌1(46)は、受傷武器か、2号人骨の副葬品なのか判断しづらい。4号人骨は壮年男性で、大腿骨は折れてはいたが潰れてはいない状態で天井崩落塊の上に乗ったり立て掛けられたような状態であったので、天井崩落後に埋葬された可能性が高い。頭の下には淡赤褐色の赤色顔料が大量に撒かれ、その外方には鐵鎌1(47)がある。この鐵鎌は切先を北に向けており、平絹を巻かれていたようで、スペース的には矢を立てかけていた可能性が高い。



第30図 ST-172 遺構実測図



第31図 ST-172 玄室内 実測図



第32図 ST-172 出土遺物実測図

表6 ST-172 出土遺物観察表

No.	種類	法量(mm) ()は現存			備 考
		全長	刃部長	刃部幅	
44	鉄鎌	98	16	32	刃部～体部誇張
45	鉄鎌	103	15	26	
46	鉄鎌	88	29	26	下半に赤色顔料

No.	種類	法量(mm) ()は現存			備 考
		全長	刃部長	刃部幅	
47	鉄鎌	122	25	30	貝殻状誇張による鋸れ。上半に太さ 0.1 ~ 0.4 mm の歯毛か、中位・下位に平綱

13. ST-173 (第34図)

172号墓の北東10数mに位置し、耕耘機の深耕によって堅坑上部閉塞タイプの閉塞石が持ち上げられて発見された。従って、堅坑1段目は攪乱され、削平と損壊を被っている。検出時と埋土の断面観察から、2回の追葬を確認できた。II層から土師器片数点が出土したが、壺の底部片(48)のみ図化できた。

遺存する堅坑1段目の規模は、南北1.34m、東西1.60mで、D字形に近く、最深0.16mである。2段目は北寄りに、径0.54~0.58mで

穿たれ、板石の南側には厚さ3cmの淡黄白色粘質土の目貼りがあった。深さは1.30mで、最深部は検出面から1.52mである。袖部は玄室に向かって広がり、羨道中位あたりの底面が3cm高い。

玄室は、両袖の平入り楕円形を呈し、奥行き1.0mほど、幅1.54m・高さ0.78mの平天井である。壁は棟持と推定されるが、天井と共に大部分が崩落している。被葬者は6体で、6号人骨のみ西頭位である。1~3号人骨の上半身は遺存状態が悪い。奥壁寄りの1号人骨は壮年の男性で、前頭部は赤色顔料が塗布され、掘り込みがある。右横には切先東のヤリ(63)が、右腕横には切先東の鉄鎌4(57~60)が、膝右横には切先西の鉄鎌2(61・62)が副葬されている。2号人骨は壮女の女性で、膝の部分から骨角器1(56)が検出された。左足は、大腿骨から踵までが反転して置かれている。前頭部に赤色顔料。3号人骨は壮年の男性であるが副葬品は無い。ただ、向きの異なる鉄鎌2本(61・62)が2号か3号に伴う可能性がある。前頭部に赤色顔料が塗布されている。5号人骨は熟年の女性で頭部は4号の西隣に位置し、南西部にオオツタノハ製貝釧6片(5個体)と3片(2個体)の2群がある。西端には6号人骨(熟年の男性)と刃部を80度程に立てた小鉄劍1(64)が検出された。貝釧2群の帰属は不明である。

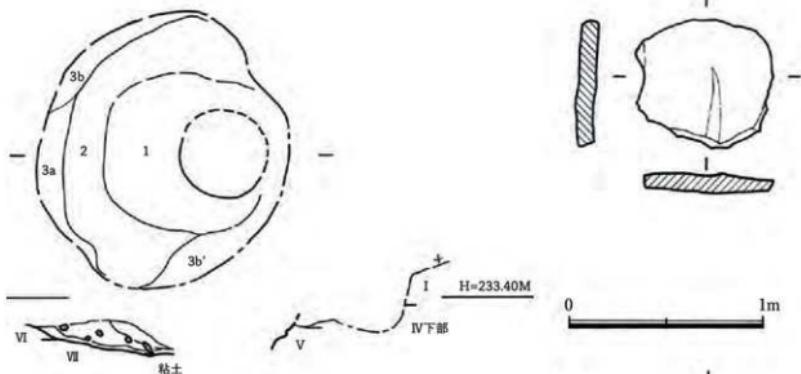
東群の鉄鎌は全て圭頭鎌であるが、西群は三角形と長三角形である。小鉄劍(ヤリ・63)のA面関部には纖維状の有機物が遺存し、刃部は布に巻かれていたと推定される。茎は樹皮巻きで、その下に糸巻きが見える。端部に目釘穴1を有する。B面に錐状を呈する部位が遺存する。

6号人骨に伴う小鉄劍(64)は63よりも刃部が少し長く、幅が一定である。A面中央寄りには平綱状の有機物が、B面の切先から1.3~2.8cmの所には黒色漆膜状のものが、B面中央付近には三重の革状有機物が、B面鞘口付近には、ハエの開蛹殻状有機物2個が銹着している。

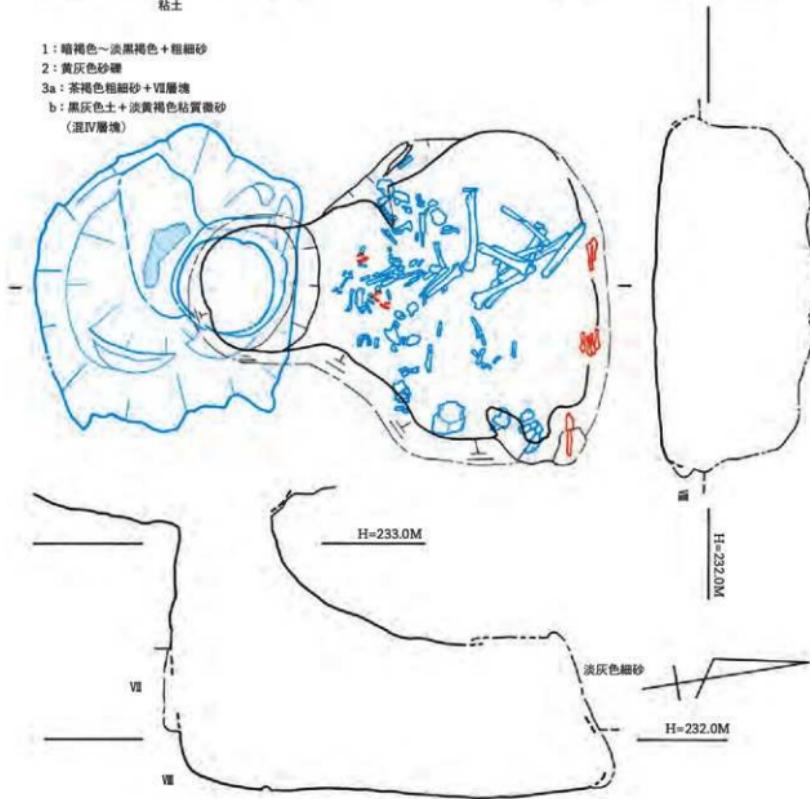
貝釧は全て半身で、床に接した半身は消失している。残存部も劣化が激しく、石灰分が吹き出し最大の釧(55)の下半には平綱が遺存する。骨角器は、直径13~14mmの用途不明品で、髓腔は無い。取上時に崩壊し、実測図と写真は参考程度のものである。



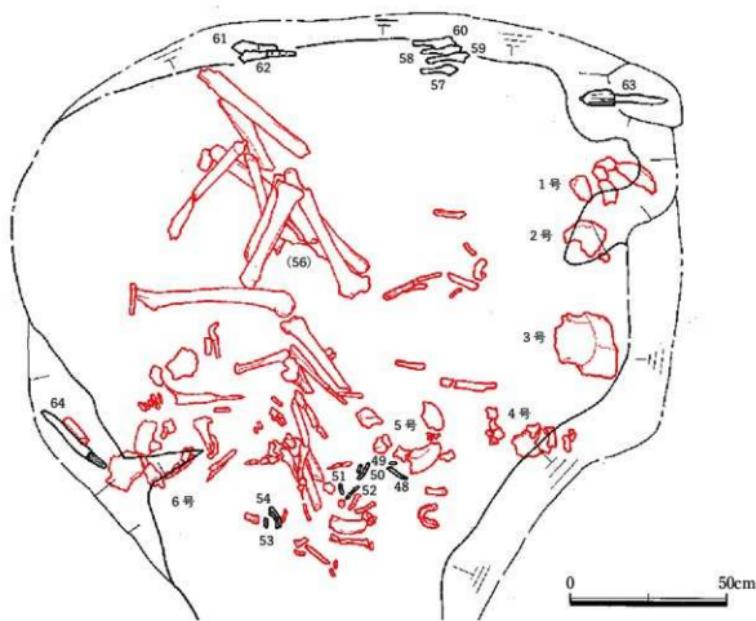
第33図 II層出土遺物実測図(1:3)



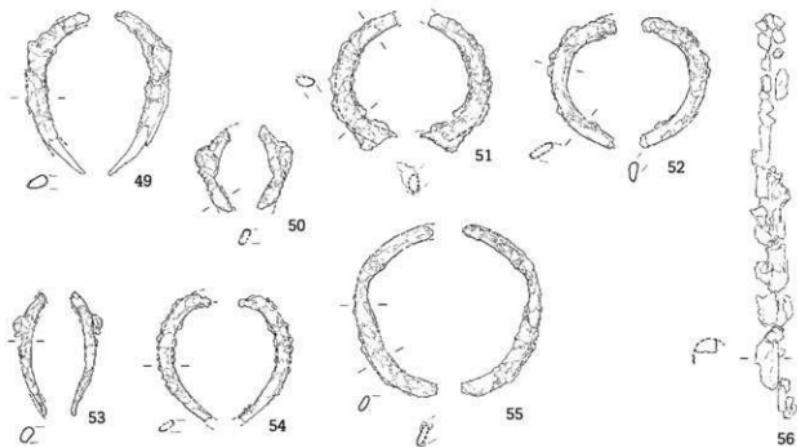
1: 暗褐色～淡黑褐色+粗細砂
2: 黃灰色砂礫
3a: 茶褐色粗細砂 + VII層塊
b: 黑灰色土 + 淡黃褐色粘質微砂
(混IV層塊)



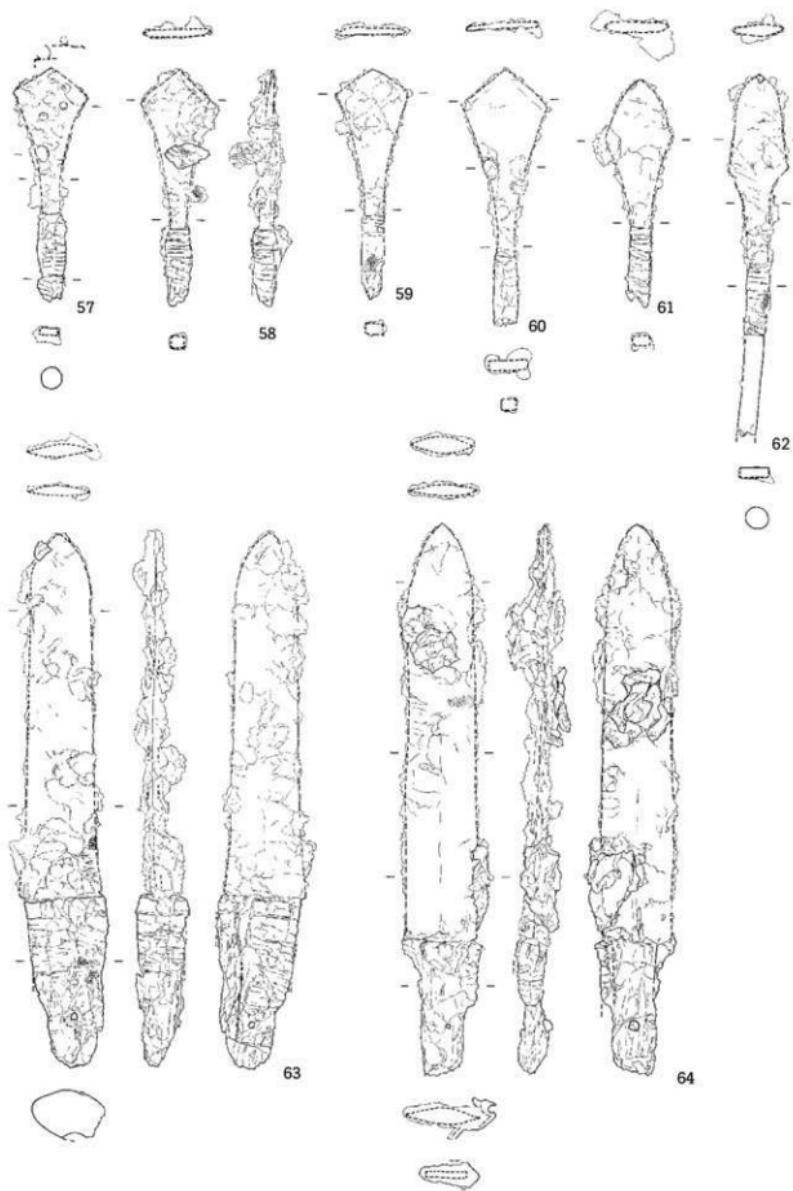
第34図 ST-173 遺構実測図



第35図 ST-173 玄室内 実測図



第36図 ST-173 出土遺物実測図（1）



第37図 ST-173 出土遺物実測図（2）

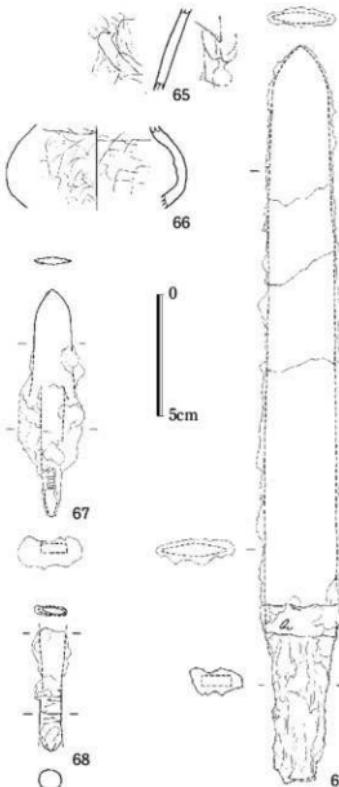
表7 ST-173出土 貝剣観察表

No	法量(mm)			素材	備考
	長さ	幅	厚さ		
49 (66)	7~9	5		オオツリハ	表面に石灰分と布痕
50 (34)	5~6	3		オオツリハ	石灰分の塊
51 (55)	7~9	3~4		オオツリハ	2片接合、石灰分多量

表8 ST-173出土 鉄器観察表

No	種類	法量(mm)			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
57	鉄鎌	96	12	21	頭部に卵状膨らみ
58	鉄鎌	97	13	28	鋸歯部に布痕
59	鉄鎌	94	10	29	口巻き下端に布痕
60	鉄鎌	105	15	(33)	頭部中央側縁に卵状膨らみ

52	54	7~9	3~4	オオツリハ	石灰分多い
53	51	6~7	3~4	オオツリハ	石灰分多い
54	54	4~7	2~3	オオツリハ	石灰分多い
55	71	7~9	2~3	オオツリハ	2片接合、両面下に布痕



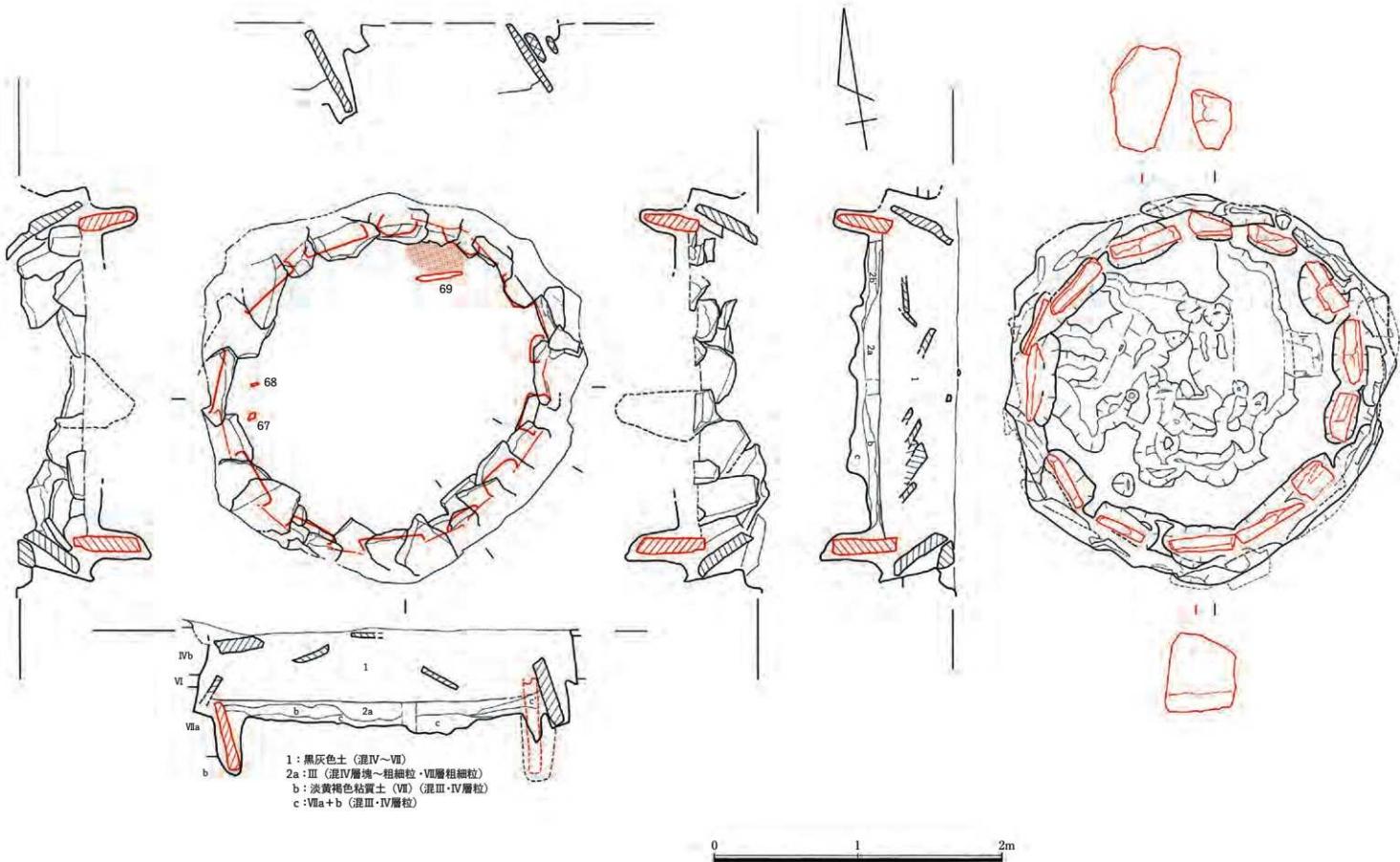
第38図 SI-05 出土遺物実測図

14. SI-05 (第39図)

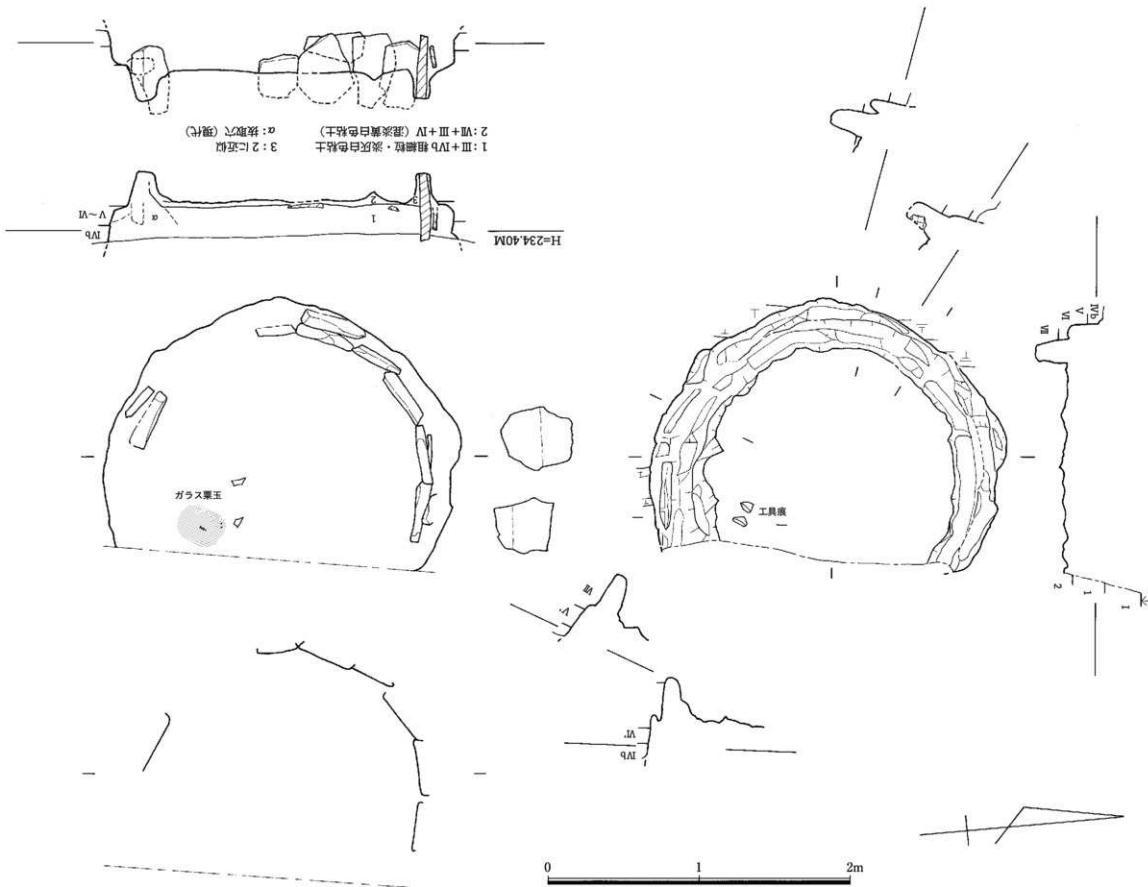
分布域の北西部に位置する。大型農機の耕耘によって板石3枚が出土・損壊したことによって通報を受け、遺構検出をすると、板石積石棺墓であった。

掘形は直径2.7mの不整形で、天蓋1・2段目の板石の一部が原位置で填压された状態で、内部は小さめの板石が投げ込まれた様な状態で検出された。覆土(第1層)は黒色土で、検出面から0.5mで明瞭な床面になる。床面は、長径2.12m・短径1.96mの楕円形を呈する大型で、西に鉄鎌2(67・68)が、北に切先西の鉄剣1が副葬されている。人骨は痕跡すら無かったが鉄剣の北側30×40cmほどに赤色顔料が認められ、頭の位置と推定される。貼床は、10~25cmの厚さで大きく3枚に分層できる。貼床を剥ぐと工具による粗堀りの状況が現れ、側石1枚ずつを埋設した掘形を検出した。側石は2~20cmほどが貼床の上に頂部を露出させる程まで埋められ、天蓋1・2段目の個別掘形も全周し、天蓋の加重に耐えられるよう強固に造られている。なお、側石は、断面図にかかる東西南北4個と、北石の西隣1個のみ抜き取って調査し、他は現状保存とした。

第1層からは小型丸底壺や高壺・壺片など17片が出土したが、図化に耐える資料は2点(65・66)の小型丸底壺である。65は、最大径73mm、内外工具ナデ、胎土は黒褐色粒がやや多く、焼成は良、外面は淡橙色



第39図 SI-05 造構実測図



第40図 SI-06 造構実測図

～黄褐色、内面は淡黄褐色を呈する。66は、頭部径40～50mm、内外工具ナデ、胎土は黒褐色粒が微量、焼成はややあまい、外面は淡黄褐色・灰色、内面は淡褐色～淡灰褐色を呈する。副葬品の鉄鎌67は、長さ93mmの脇抉柳葉鎌か。刃部長等詳細は不明である。68は、長さ50mmで、刃部は消失している。鉄剣(69)は、長さ300mm・刃部長227mm・幅23～29mm・茎長58mmを測り、鞘口部にハエ開蛹殻3～4個、木把関付近に鞘の木質小片が遺存する。

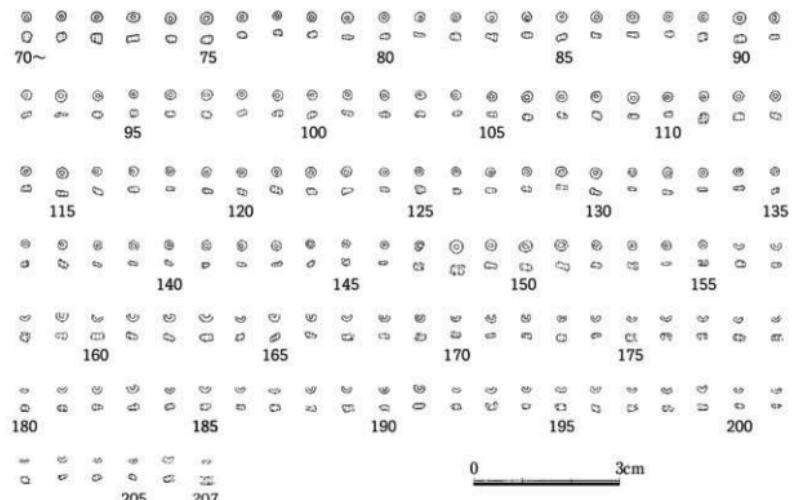
15. SI-06 (第40図)

分布域の西部、既報告04号板石積石棺墓の東に位置している。烟の畝間に基底側石が露出し、2～3個抜かれている状況であったが、さらに1個がどうしても農作業の障害になるので除去したいという相談を受け、やむなく発掘調査を実施した。

対象地の畠内において全体を検出することができなかつたが、あえて隣接地へ拡幅することは控えた。検出した遺構はすでに開墾によって上部30～40cmが削失し、経年の畠耕耘によって5個の側石が抜かれていった。検出面での掘形は直径2.2～2.3mの円形を呈し、深さ0.20mで貼床の床面に達する。内径は1.7～1.8mを測り、高さは不明である。人骨およびその痕跡も検出できなかつたが、南東部においてガラス栗玉を検出した。肉眼では10個程度を確認したが、包蔵している可能性がある覆土は持ち帰って選別した。この他、覆土から土師器片6が出土したが全て壺甕類で、スヌも付着している。

厚さ2～4cmの貼床を剥ぐと、やや硬質の粘質土に粗い工具痕を残す底面と基底側石を据える為の堀込を検出した。

ガラス栗玉は、直径2～3mm・厚さ1mmで、138個が図化できた。最小径は119の1.7mm、最大径



第41図 SI-06 出土遺物実測図

は149の2.8mmで、厚さ0.8～2.2mmのバラツキがあり、79・80が淡緑青色を呈するほかは青～水色を呈する。移植ゴテの土圧で割れてしまうほど劣化しており、およそ100～150個分が微細な屑状態である。さらには、半身のものが50個ほどあるので本来の総数は200～250個と推定される。

表9 S I-06 出土ガラス粟玉観察表

No	法量(mm)		No	法量(mm)		No	法量(mm)		No	法量(mm)	
	外径	長さ		外径	長さ		外径	長さ		外径	長さ
70	2.1	2.1	74	2.2	1.5	78	2.1	1.3	82	2.3	1.7
71	2.2	2.2	75	2.6	1.6	79	2.4	0.9	83	2.5	1.7
72	2.0	1.9	76	2.1	1.4	80	2.2	1.3	84	2.2	1.3
73	2.4	1.4	77	1.8	1.3	81	2.0	1.2	85	2.0	1.2
									89	2.0	2.1
									151	1.8	0.8

表10 163～173号地下式横穴墓 被葬者一覧

号墓	閉塞	主軸	被葬者	埋葬順	年齢	性別	遺存状態	頭位	赤色顔料			副葬品・備考
									頭	上半身	下半身	
163	堅坑 上部	北	1号	1	若年(13～15歳)	不明	△	東	○			
			2号	2	壯年後期	女	○	東				
			3号	3	壯年	女	△	東		○	鉄劍1	
			4号	4	壯年	男	×	東				
164	堅坑 上部	北	1号	1	熟年	男	△	東	○			弓1、鉄劍1、鉄鏃3
			2号	2	熟年	女	△	東				貝銅6
			3号	3	壯年	女	○	東				
165	堅坑 上部	北	1号	1	熟年	不明	×	東	○			
			2号	2	熟年	女	×	東	○			右前腕に貝銅8
			3号	3	若年(12～15歳)	不明	×	東	○			
166	澳門 土塊	北東	1号	1?	成人	不明	×	南西				鉄鏃5
			2号	2?	幼児(3～4歳)	不明	×	南西				鉄鏃1、刀子1
			3号	3?	熟年	不明	×	南西				跨付鉄劍1、小刀1
167	堅坑 上部	北	1号	1	熟年	不明	×	東	○			厚さ10～23cmの貼床
168	堅坑 上部	北	1号	1	不明	不明	△	東	○			
			2号	2	不明	不明	△	東				
169	堅坑 上部	北	1号	1	壯年	男	△	東	○	○	○	西壁に中手骨
			2号	2	壯年	女	○	東	○			天井に棟木隔刻・壁面丹塗り
170	堅坑 上部	北東	1号	1	熟年	男	△	南東	○			鉄鏃4、鉢1
			2号	2	壯年	男	△	東				
171	澳門 板石	北西	1号	1	壯年	女	△	北東	○			刀子1、頭の上方に足の骨
			2号	2	小児(6～7歳)	不明	×	北東				ミニチュア刀子1、貼床
			3号	3	熟年	男	△	北東				鉄鏃4、鉢1、腰椎動置
172	堅坑 上部	北	1号	1	熟年	女	△	東	○			鉄鏃2
			2号	2	熟年	男	○	東	○			鉄鏃1
			3号	3	壯年	男	○	東				
			4号	4	壯年	男	△	東				鉄鏃1
173	堅坑 上部	北	1号	1	壯年	男	△	東	○			ヤリ、鉄鏃4+2
			2号	2	壯年	女	△	東	○			骨角器1
			3号	3	壯年	男	△	東	○			
			4号	4	不明	不明	×	東	○			
			5号	5	熟年	女	×	東				
			6号	6	熟年	男	×	西				鉄劍1

灰塚地下式横穴墓群

第4章 灰塚地下式横穴墓群

1.はじめに

1973年、県文化課（現文化財課）は、九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査を分布域の東部で実施、地下式横穴墓17基（1～17号）と板石積石棺墓3基のほか、縄文早期～晩期・弥生中期～古墳前期の土器や石器が出土している。⁽¹⁾さらには、1974年12月陥没の2基を18・19号として、報告している。⁽²⁾20～23号墓については報告済み⁽³⁾であり、本書では24号墓について報告する。

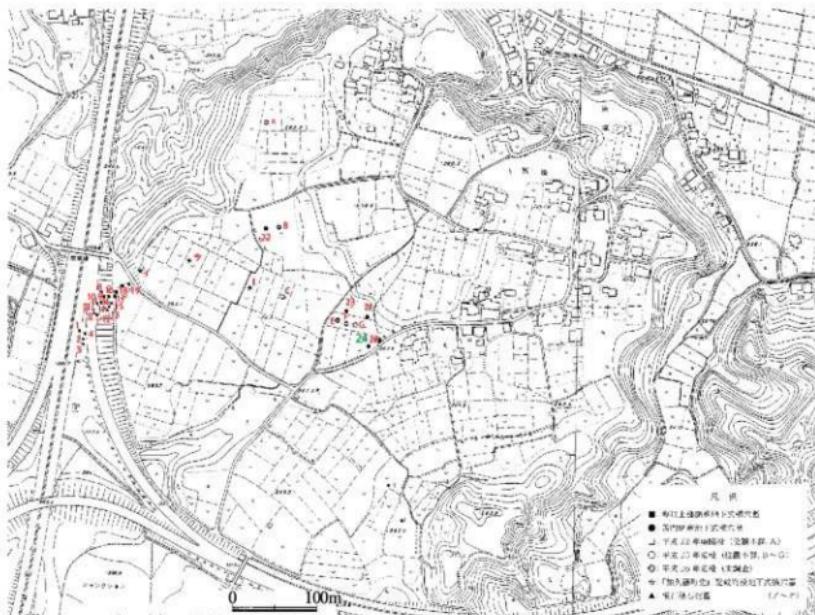
2. 基本的層序

層序は、前章遺跡に準ずる。

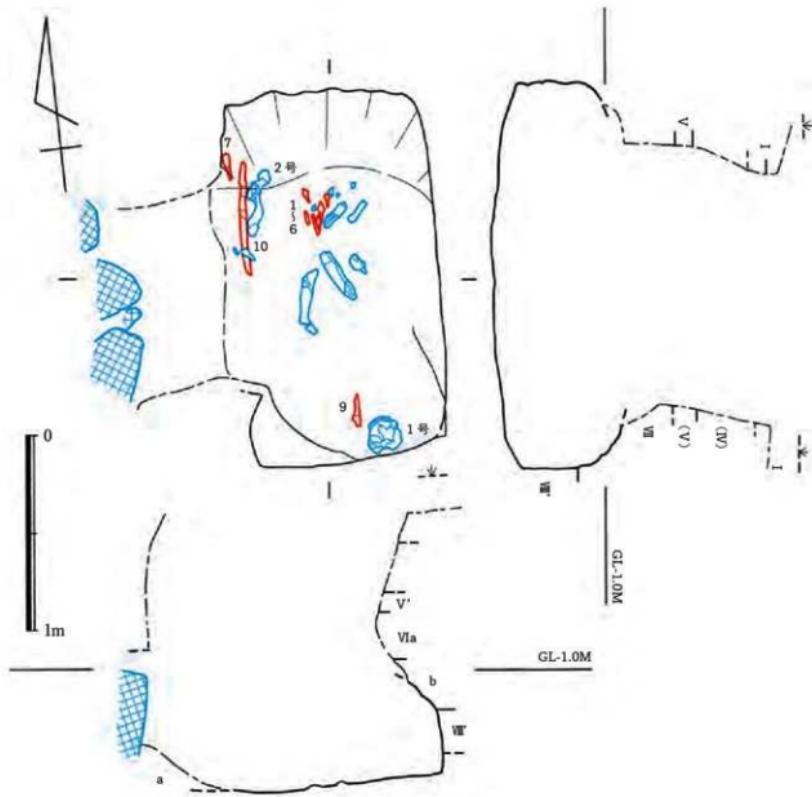
3. ST-24（第2図）

分布域の中央部に位置する。（第1図）過去にトレッチャ（ゴボウ作付のための深耕掘削溝）が入っており、玄室天井が陥ちやすくなっていた。主軸を東にとる羨門土塊閉塞タイプであるが、堅坑は未調査である。羨道の高さは0.7mである。

玄室は平入り両据長方形タイプ、幅1.75～1.94mで、奥行きは0.94～1.04mを測り、奥壁側がやや狭い。天井は、寄せ棟の家型であるが、全て陥没、高さは0.8m内外と推定される。



第1図 灰塚地下式横穴墓群 分布図

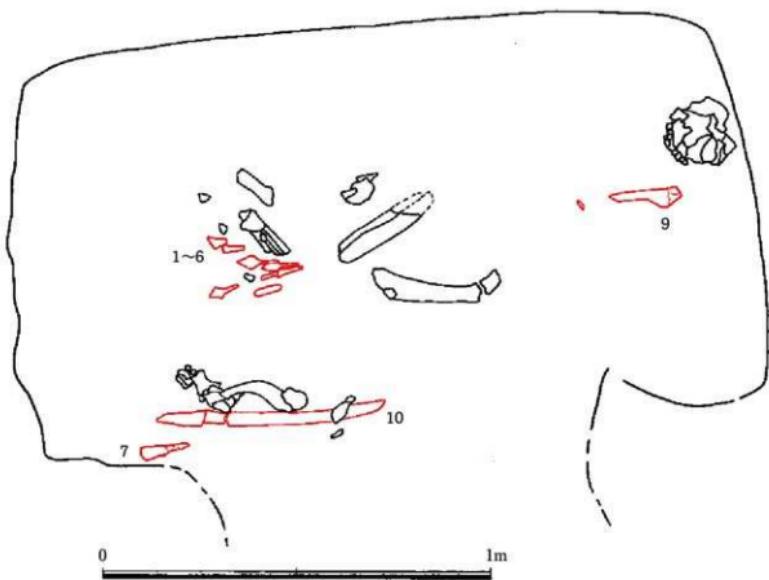


第2図 ST-24 遺構実測図

被葬者は2で、南頭位の1号人骨は性別不明の熟年で、上顎左右第1大臼歯の近心舌側に咬耗および中切歯にLSAMATの痕跡がある。頭の左側には切先北の刀子(9)が、下肢左側には鉄鎌6(1~6)が副葬される。その北西部には2号人骨(性別不明・成人)の頭と切先北の鉄鎌1(7)と切先南の大刀1(10)と把部の下に鉄鎌1(8)が置かれていた。

8は片刃鎌と推定されるが、劣化が著しい。鉄鎌6の束は、主頭鎌3と三角形1、方頭鎌2からなる短茎鎌である。木柄刀子の目釘穴には鉄製遊環(D字型か)が貫通している。木柄小刀の刃部には鞘片と平綱片が散在し、刃部中央付近には黒色塗膜が長さ3cmほど残存する。黒塗塗鞘の上から平綱に包まれて副葬されていた可能性がある。

本墳墓は土塊閉塞であり、墳丘に寄生した主軸を東にとるもので奥行きが短いが、初葬の頭位を

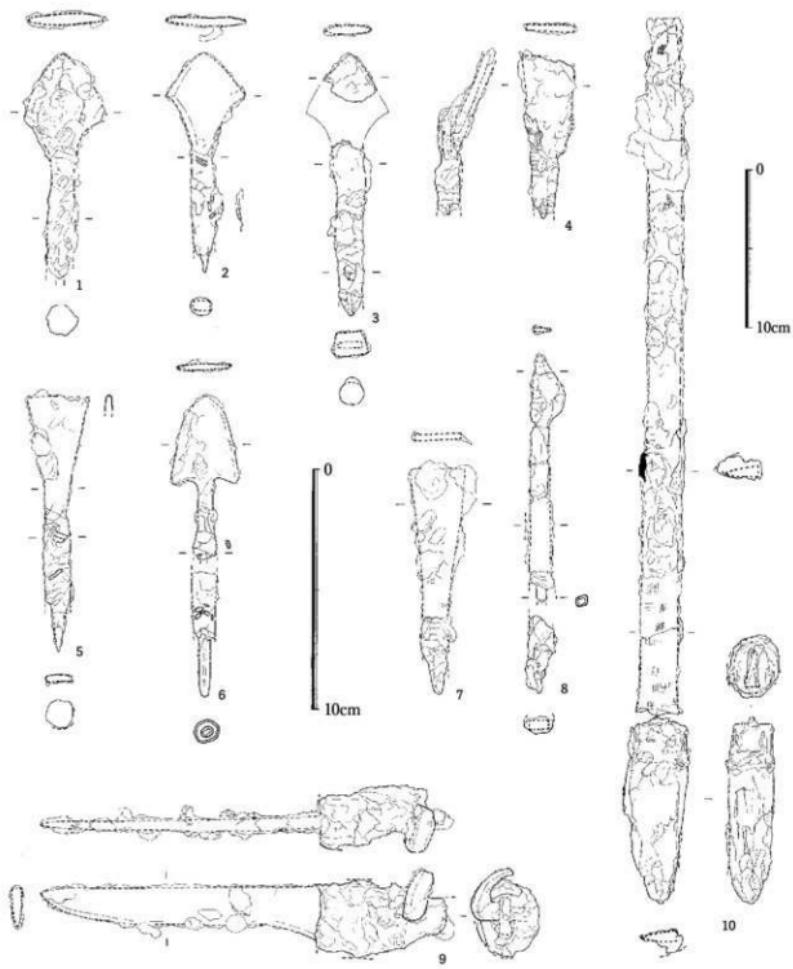


第3図 ST-24 玄室内 実測図

南に配置できたことで良しとされたものと思われる。

表1 ST-24 出土遺物観察表

種類	法量 (mm) () は現存			備 考
	全長	刃部長	刃部幅	
1 鉄鎌	94	28	(33)	全面に平綱断片
2 鉄鎌	91	18	32	口巻きにハエ開鎔戸 4・平綱断片
3 鉄鎌	(20+73)	(13)	(14)	錆惚れ頗著
4 鉄鎌	68	—	(21)	錆惚れ振れ
5 鉄鎌	106	—	25	口巻きにハエ開鎔戸 3
6 鉄鎌	(69) + (52)	37	28	口巻きにハエ開鎔戸 7
7 鉄鎌	89	—	22	口巻き部で錆惚れ段ズレ
8 鉄鎌	(103+33)	(16)	(14)	切先から 46 mm以下に木質
9 刀子	168	114	23	木柄、目釘穴に遊環
10 大刀	(428+118)	(425)	27	木柄、鞘片少量、刃身に平綱断片



第4図 ST-24 出土遺物実測図

註

- (1)『九州縦貫自動車道埋文化財調査報告』(2)『灰塚遺跡』宮崎県教育委員会 1973
- (2)岩永哲夫「えびの市灰塚遺跡調査報告」『宮崎県文化財調査報告書第18集』宮崎県教育委員会 1976
- (3)えびの市教育委員会『島内地下式横穴墓群V・灰塚地下式横穴墓群』2017

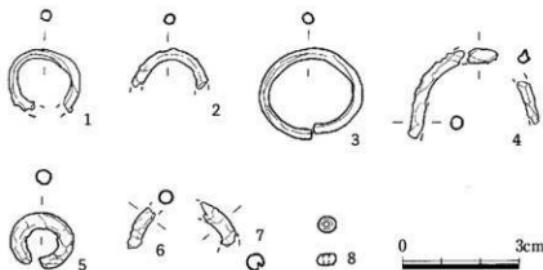
補 遺

第5章 補遺

1. 錫製耳環とガラス小玉

既報告Vにおける島内131号墓の3号人骨に帰属する錫製耳環1対(1・2)、同4号人骨に帰属する錫製耳環1対(3・4)、灰塚23号墓の1号人骨に帰属する錫製耳環1点(5)、2号人骨に帰属する錫製耳環1対(6・7)および灰塚20号墓に帰属するガラス小玉(8)の実測図を掲載する(データについては表参照)。

3の耳環は唯一劣化せず旧状を保っており、5は膨張して亀裂が入っている。4は、劣化により(?)外方に開いている。



第1図 錫製耳環・ガラス小玉実測図

表1 島内地下式横穴墓出土 錫製耳環 観察表

出土遺構	出土人骨 ・部位	法量(mm)			()は現存	色調	備 考
		外径	内径	太さ			
1	ST-131 3号頭	19×18	14×12	2.5内外	濁銀	少し光沢 両端劣化消失	
2	ST-131 3号頭	19	13	3.0内外	乳白・灰褐色斑状	全面風化 両端消失	
3	ST-131 4号頭	27×24	21×18	3.0内外	濁銀	完形、光沢あり 2/3はやや扁平、両端イキ	
4	ST-131 4号頭	33×(20)	26×(18)	3.5内外	濁白・暗灰	劣化進行、3片接点無し	

表2 灰塚地下式横穴墓出土 錫製耳環 観察表

出土遺構	出土人骨 ・部位	法量(mm)			()は現存	色調	備 考
		外径	内径	太さ			
5	ST-23 1号下顎	17×14	8×7	3.6~4.5	銀、濁白	光沢あり 表面劣化	
6	ST-23 2号頭	—	—	3.7内外	濁白	全面風化	
7	ST-23 2号頭	—	—	4.4	濁白	全面風化	

表3 灰塚地下式横穴墓出土 ガラス小玉 観察表

出土遺構	出土人骨 ・部位	外径(mm)	内径	太さ	色調	備 考
8	ST-20 2号頭	4.3×4.7	1.5	3.1~3.4	紫青	

2. 22号墓出土 刀子（重要文化財 No785）

第2図-1は、既報告『島内地下式横穴墓』（2001）の第41図-173で、保存処理前の実測であり、鹿角柄の樹皮巻きの状態が全く明瞭でないことから、保存処理時のX線撮影フィルムも参考に実測した。

刃部の切先部の棟は、処理前（本来）はゆるやかに反っていたが、処理の際に直線的に強制されている。また、現状の刃部関部は突出しているが、錆膨れと思われる。刃縁は全て錆膨れし、極薄の鉄製鍔は錆膨れにより半分ほどが1cmほどずれている。全長229mm・刃部長102mmである。

3. 77号墓出土 木装鉄劍（重要文化財 No43）

第2図-2は、既報告書IV（2012）の第21図-34で、平成29年度保存処理において、切先から10cmほどの部分が上下逆に接着されていたことが判明したので、正位置に修正・処理した。よって再実測して修正報告する。

全長472mmで、刃部長332mmを測る。刃部は、幅20mmから関部（幅30mm）に向かって徐々に広くなる。鍔の有無は不明である。鞘片が全面的に少量遺存し、切先から3～4cmの所にのみ樹皮巻きが遺存する。鞘口部（幅10～13mm）には木質は無く、把縁には木質が残る。目釘穴は2孔で、1孔のみ目釘が遺存する。

4. 91号墓出土 大刀（重要文化財 No71）

第2図-3は、既報告IV（2012）の第52図-28で、保存処理後の状態がかなり異なることから再実測した。全長は795mmで、刃部長628mm、関部幅32mm、茎部長156mmを測り、切先から25cmほどは錆膨れによって棟1重分の空隙と振れがある。刀身には鞘が遺存し、切先から24～25cmの所には樹皮巻きが僅かに残る。茎部には糸巻き痕が佩表上部と左側面にあり、末端には木製把頭の痕跡が遺存する。

5. 91号墓出土 鉄斧（重要文化財 No764）

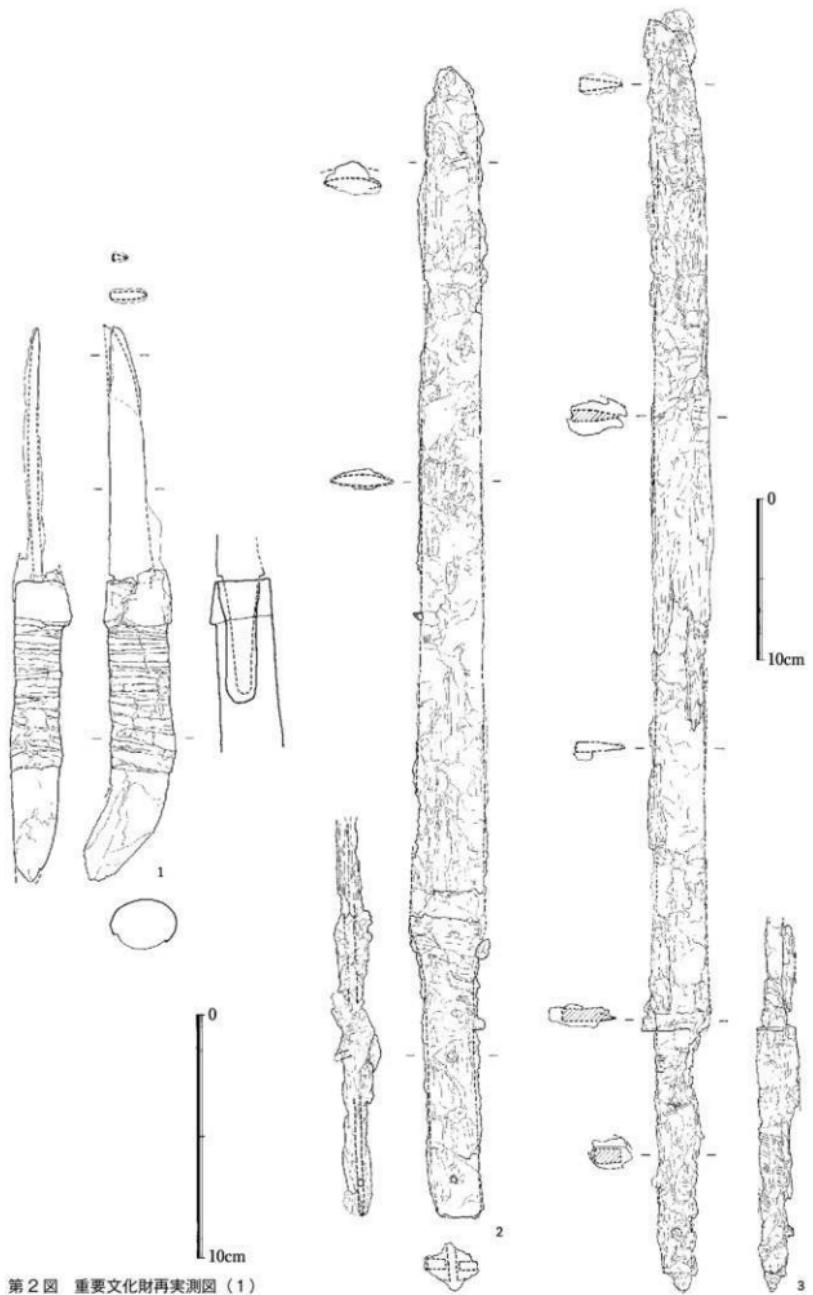
第3図-4は、既報告IVの第52図-26であり。保存処理の際に刃部角断片の正しい位置が確定した。袋部外面には明瞭な布片が錆着している。この部分と刃部側面下半以外は旧面を遺さない。現存長89mm、最大幅38mm（推定40mm）、袋部外径27×22mm、内径24×18mm、深さ34mmを測る。

6. 91号墓出土 大刀（重要文化財 No72）

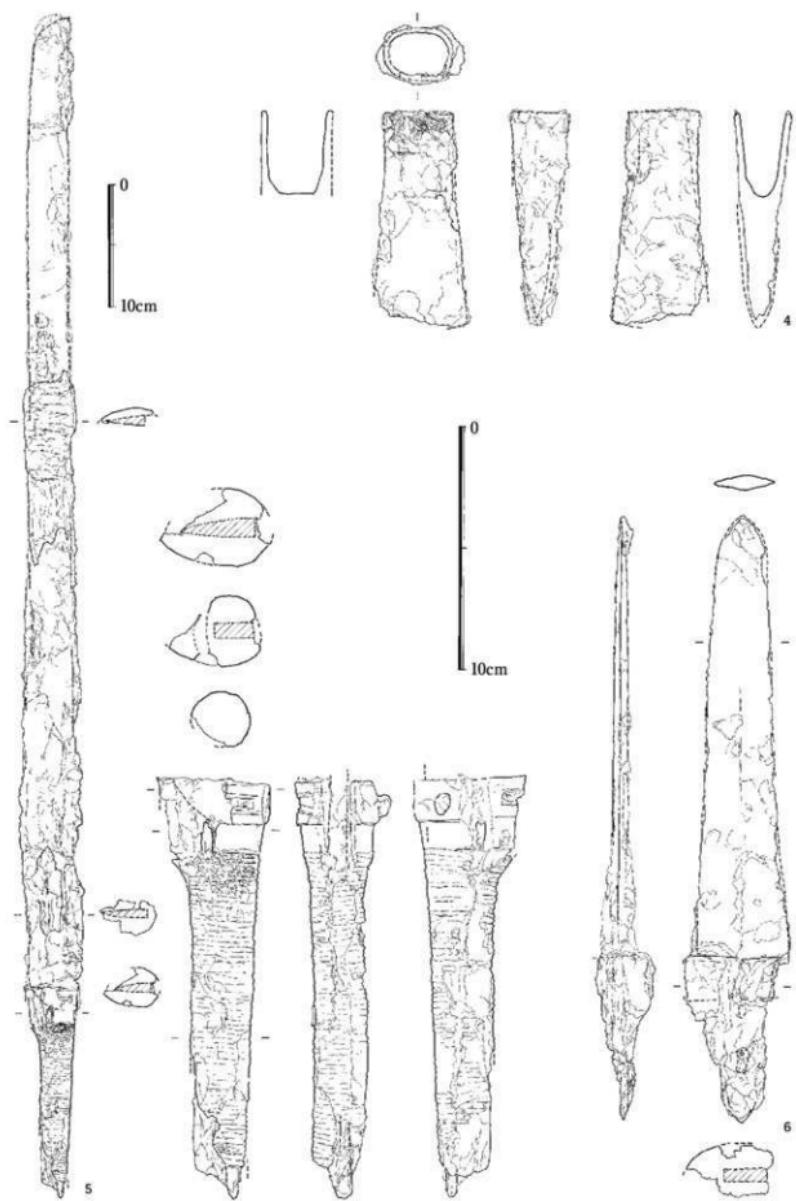
第3図-5は、既報告IVの第52図-27が接合した状態で、切先は遺存する。切先から30～38cmの部分には、樹皮巻きの鞘が遺存する。勾金固定孔も遺存し、把縁には直弧文が遺存する。全長969mm、刃部長793mmを測る。

7. 56号墓出土 ヤリ（重要文化財 No96）

第3図-6は、既報告『島内地下式横穴墓群』の第93図-567である。切先と刃縁が少し消失し



第2図 重要文化財再実測図(1)

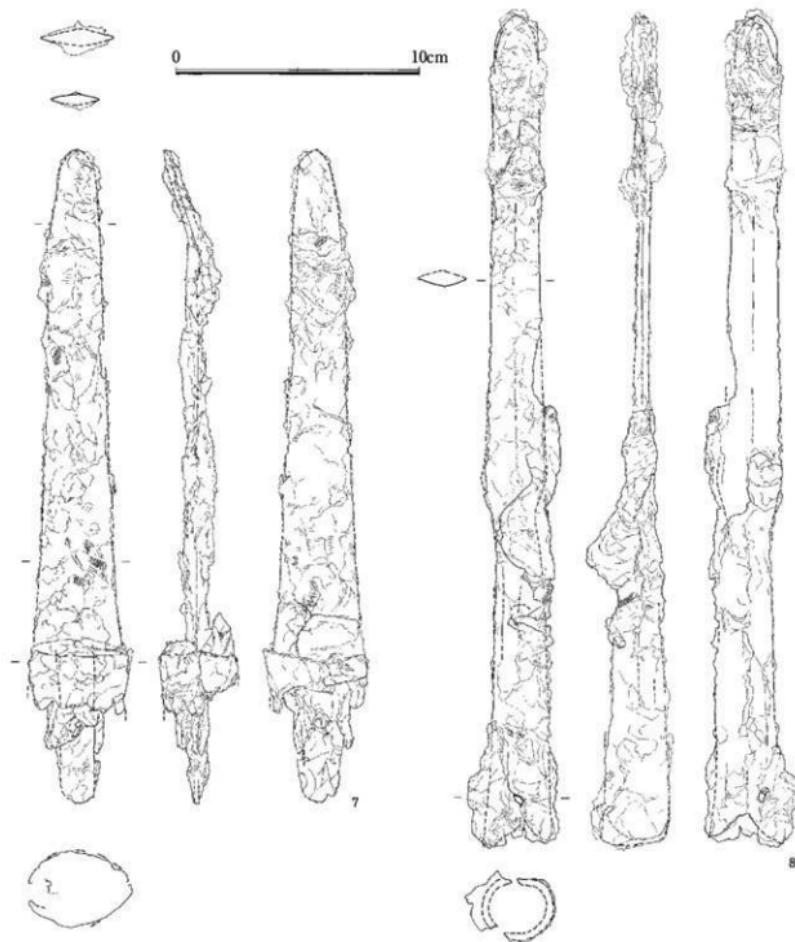


第3図 重要文化財再実測図（2）

ている。関部は幅17mmの極薄の鉄製鍔と重なり、目釘穴は2か所ある。全長248mm、刃部長178mm(推定180mm)、最大幅37mmである。

8. 91号墓出土 ヤリ (重要文化財No97)

第4図-7は、既報告IVの第51図-24であり、重要文化財台帳作成時には極薄鉄製鍔が接合してゐる。保存処理時に目釘穴の形状が判明した。切先から4cmほどの所は鎌彫れによる屈曲があり、刃部両面には、平継断片が遺存する。全長268mm、刃部長189mmを測る。



第4図 重要文化財再実測図 (3)

9. 91号墓出土 鉄鉢（重要文化財 No95）

第4図-8は、既報告IVの第51図-25であり、台帳作成と保存処理の過程において、切先と基部に小片が接合し、ほぼ完形になった。全長は343mm、刃部長190mmで、D字型（7×4mmと5×3.5mm）の目釘穴がある。袋部外面には稜があり、断面8角形と推定される。袋部内に木質は無く、片面に平綱が遺存することから、抜き身で副葬されたと言える。

10. 77号地下式横穴墓の胡籠（重要文化財 No747・748）

胡籠の観察（第5図） 吊手金具2点、帯形金具1点が出土している。吊手金具は長さに違いがある。吊手金具1は長さ12.4cm、幅2.0cmで、2は長さ11.8cm、幅2.1cmである。帯形金具は山形突起を有し、最大幅2.7cm、最小幅1.5cmである。吊手金具の厚さは1.5mm、帯形金具の厚さは0.8～1.0mmである。鉢は径6mm、高さ2～3mm程度で、鉢頭は円形を基本としているがややいびつになり、高さにも多少の差が生じている。鉢は一方の短辺に沿って2本打ち、ほか金具中央縦位に3鉢打っている。短辺の2鉢は胡籠本体を構成する革とは異なる厚さ1.2mmほどの革帶を留めており、この革帶を介して腰帶に提げる構造になるものと考えられる。鉢具は伴わない。すべての鉢は胡籠本体となる厚さ3mm以上の革を留める。

胡籠本体の革は吊手金具の長側辺の1辺に沿って端部が確認できる。そのことから、吊手金具1が本体の向かって左側で右腰に提げた場合の後ろ側、吊手金具2が右側で腰に提げたときの前側になることが確認できる。また吊手金具2は下端部に沿って革端部があり、本体から金具は外側に飛び出た形状であることが推定される。また吊手金具の長さに差があることは吊手金具の下端部を結ぶライン、すなわち方立部の上端が斜めになっていたことを推定させる。矢を背側に傾斜させて携帯することに関わるものと考えておきたい（第6図）。

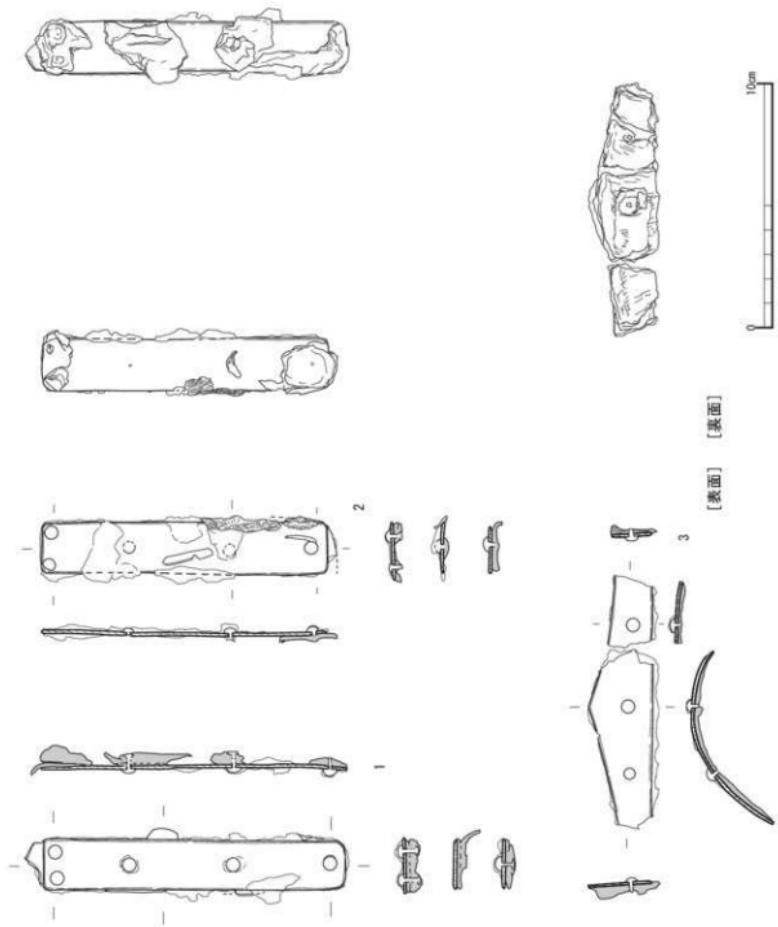
吊手金具2には表面から右側面を経て裏面に巻き付く状態で平綱が2種付着する。裏面の平綱は表～側面の平綱よりわずかに纖維が太い。裏面の平綱上に側面の平綱が乗る上下関係がみられる。残存がわずかであるので、革とあわせて胡籠本体を構成したものではなく、胡籠とは別の付着物の可能性が考えられる。なお、本胡籠には主頭鎌1、腸抉片刀長頭鎌17本（基部で換算）が伴う。

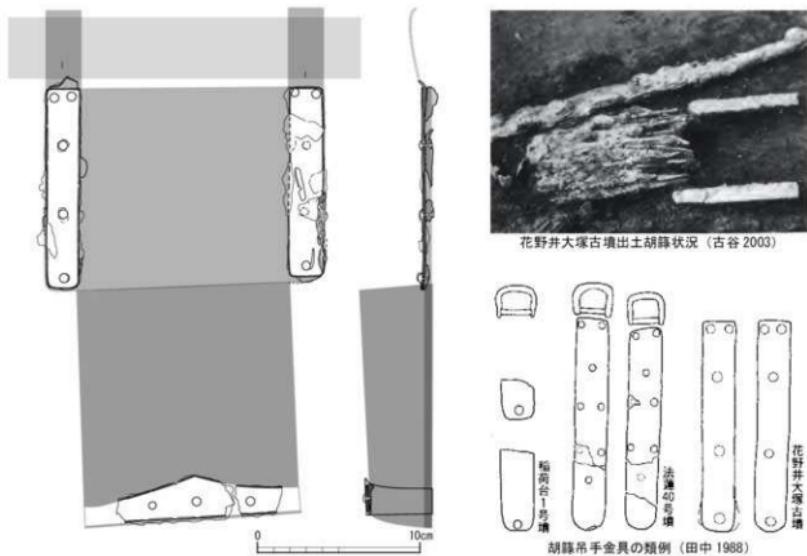
胡籠の評価 本胡籠は田中新史がB II b式（田中1988）、土屋隆史が短冊形B2類（土屋2011）とする鉄製の短冊形吊手金具を特徴とし、類例には千葉県稻荷台1号墳、同県花野井大塚古墳、岡山県法蓮40号墳の出土資料がある（第6図右下）。いずれも古墳時代中期後葉（TK208～23型式段階）、5世紀後葉に位置づけられ、横矧板鉢留短甲を共伴することも特徴である。なお、鹿児島県祓川29号地下式横穴墓出土の胡籠片も同型式に位置づけられる可能性が高い。

島内77号墓例は形状、鉢配置、鉢具の不備などとくに花野井大塚古墳例との共通性が高い。本古墳は直径約20mの円墳で、木棺直葬から横矧板鉢留短甲、大刀2、剣1、鎌群3が出土し、鎌群の1つに胡籠金具がともなう（古谷2003）。出土状態から方立部は幅13cmで、下端部に山形横帶金具を伴う。吊手金具は長さ12.7cmと12.9cm、幅2.1cmで、帯形金具は幅1.5～2.3cmで山形突起をもち、77号墓例とよく似た形状をとる。なお、本例では勾玉形金具が1点出土し、鉄鎌は62本収納されていた点などは異なる様相である。

稻荷台1号墳の「王賜」銘鉄劍や横矧板鉢留短甲との共伴率が高さなどから古墳時代中期後葉に

第5図 ST-77出土胡鍔実測図





第6図 胡籜の復原案とその類例

近畿中央政権と強い政治関係をもった中小首長層の所有品とみなされる。ただし、77号墓では短甲は出土していない。近在の76号地下式横穴墓では短甲が出土しているので、島内地下式横穴墓群では近畿中央政権と関わる一連の活動を行った被葬者達が稀少財を分有していた可能性も考えられるであろう。

引用文献

- 田中新史 1988 「古墳出土の胡籜・鞆金具」『井上コレクション 弥生・古墳時代資料図録』言叢社 pp.173-214
 土屋隆史 2011 「古墳時代における胡籜金具の変遷とその特質」『古文化談叢』第66集 九州古文化研究会 pp.29-60
 古谷 翼 2003 「花野井大塚古墳」『千葉県の歴史 資料編2 考古2 (弥生・古墳時代)』千葉県 pp.856-859

11. 島内 164 号～173 号地下式横穴墓の三次元計測

島内地下式横穴墓群における三次元計測 島内地下式横穴墓群では、2014 年度に発掘調査を行った 139 号墓調査できわめて遺存状態の良好な副葬品を大量に検出し、とても手計りで実測できる状態ではないことからその記録をいかに進めるかが大きな問題となった。そこで、奈良文化財研究所の金田明大氏にご協力いただくことによって、当時まだ試行段階であった Agisoft 社 Photoscan（現 Metashape）を利用した三次元計測を実施し、調査を円滑に進めることができた。この成果についてはすでに報告を行っている（えびの市教育委員会 2018『島内 139 号地下式横穴墓 I』）。

この調査によって地下式横穴墓調査における三次元計測の有効性を確認できることから、2015 年度の島内 164 号地下式横穴墓以降は、橋本達也が通常の写真撮影に加えて、フォトグラメトリによる三次元データ作成を意識した撮影を行ってきた。本稿はその成果である。

島内地下式横穴墓群では、大きく堅坑上部閉塞の地下式横穴墓と羨門閉塞とするものの二者があるが、とくに上部閉塞の地下式横穴墓は小型のものが多い。そのため内部に人骨や副葬品が良好に残る場合、撮影位置・姿勢が限定され、多角度からの撮影が困難な場合がある。164 号墓、169 号墓の一部にデータの欠失（塗りつぶし部）があるのはそのためである。また 165 号墓は小さすぎて堅坑内の撮影も困難であった。ただ、後から思えば再度撮影するなど工夫のしようがなかったわけではない点は反省点として残る。164 号墓・165 号墓の調査段階では、写真撮影方法についても工夫が足りなかつた。また三次元データへの落とし込みを意識した座標計測がうまくできおらず数値は実測図や現地での計測値と照合してあわせている。この点も試行的段階といえ十分意識できていなかつた。今後、さまざまな改善が必要である。

地下式横穴墓における三次元計測の有効性 発掘調査において資料の観察に基づく記録法として実測は必須であると考えるが、とはいへ実測図では作者の認識に固定され、得られる情報に限定性と不可逆性という特性を有しており、複雑な構造を持つ遺構の場合、分析・再検証の有効範囲も相対的に限定的である。

地下式横穴墓は土中の構築物であり、安全性・安定性の点から保存するには通常は埋め戻すしかなく調査時以外に公開は困難であるという特性がある。調査時であっても、耕作中の畠での陥没などでは一般公開も難しい。そのため文化財としてあるいは考古資料としての地下式横穴墓に関する理解を深めることはこれまでかなりの困難をともなつたが、三次元データ・画像は見たい角度に動かして観察できるなど非常に可視的であり、またデータ加工分析方法の進歩によって将来的にもさまざまな検証の可能性が広がる。現状でも三次元データは VR を利用した観察や体験的な学習などにも応用可能であり、WEB 上での公開などを通じてより効果的な普及活用の方法も展開できる状況となつてきている。

この 5 年でもコンピューター・ソフトの機能も著しく向上していることを踏まえると、今後、とくに地下式横穴墓の発掘調査では三次元データの取得、活用は重要な課題となってくるであろう。



164号
竖坑上部閉塞



169号
竖坑上部閉塞



165号
竖坑上部閉塞



170号
竖坑上部閉塞



166号
義門土塊閉塞



171号
義門板石閉塞



167号
竖坑上部閉塞



172号
竖坑上部閉塞



168号
竖坑上部閉塞



173号
竖坑上部閉塞

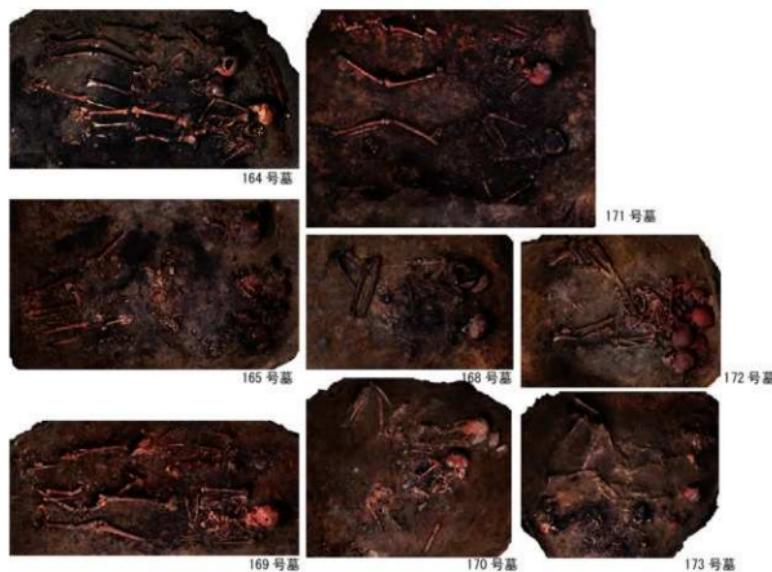
第7図 164号～173号墓一覧



第8図 164号墓三次元展開図



第9図 165号墓三次元展開図



第10図 164号墓～173号墓埋葬姿勢一覧



第 11 図 166 号墓三次元展開図



第12図 167号墓三次元展開図



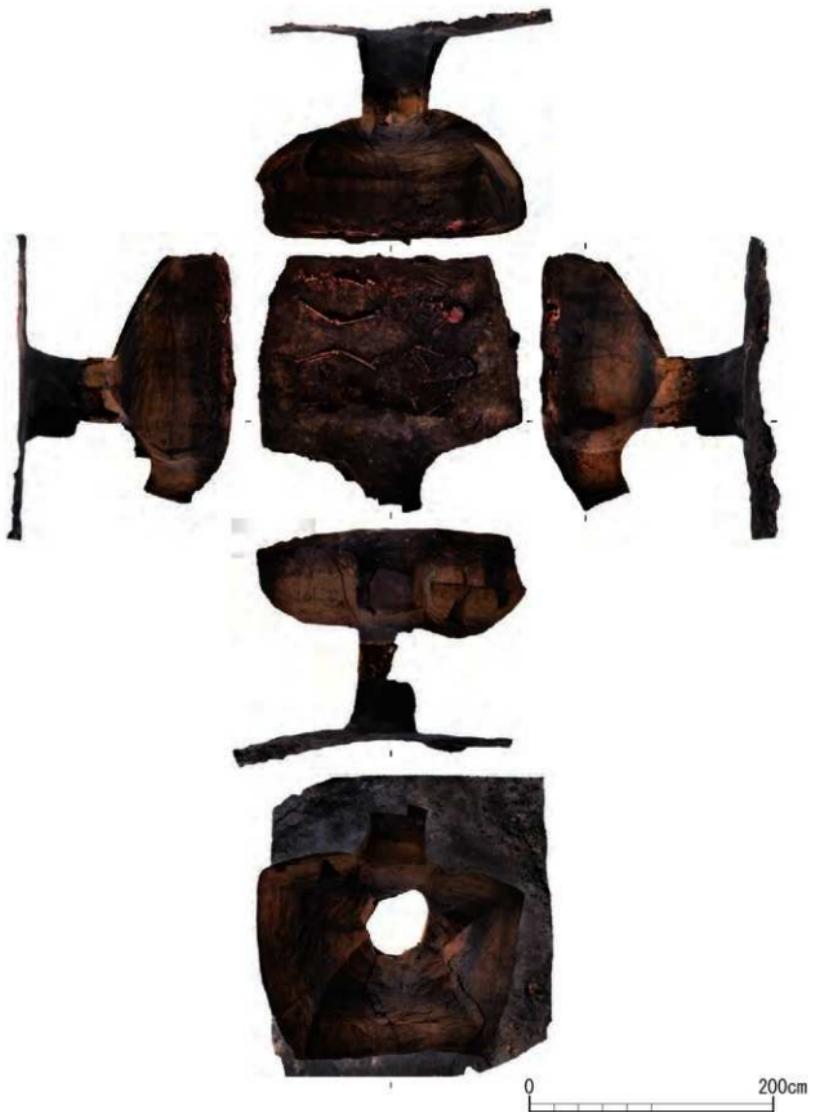
第13図 168号墓三次元展開図



第 14 図 169 号墓三次元展開図



第15図 170号墓三次元展開図



第 16 図 171 号墓三次元展開図



第 17 図 172 号墓三次元展開図



第18図 173号墓三次元展開図

島内地下式横穴墓群
写 真 図 版

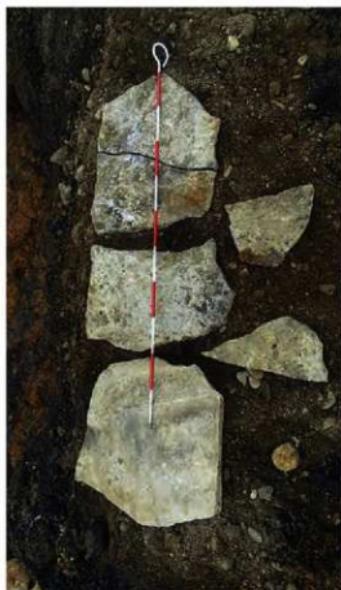


ST-171・172 遠景（西から）

図版2



同 堆積半裁（東から）





ST-163 深坑完掘（東から）



ST-163 玄室内（陥没坑から、南から）

図版4



ST-163 1～3号人骨の頭～膝部と4号人骨の頭（下端中央）（南から）



同上 上半身、右下に4号人骨の頭（南西から）



ST-163 1～4号人骨 下半身（南から）



同上（東から）

図版6



ST-164

1層・擾乱土除去
2段目竖坑検出状態
(南西から)



同上

竖坑
(南から)



掘り起された
竖坑上部閉塞板石



ST-164 玄室 全景



同上 1～3号人骨頭部周辺 左（奥壁）の弓赤漆と上（右側壁）の鉄刺・鉄錆

图版8



ST-164 3号人骨 上半身



同上 1~3号人骨 下肢



ST-164 3号人骨頭部右外方の鉄鎌3と矢入れ具



同上 2号人骨左腕の貝剣6

図版10



ST-164 人骨除去 弓の赤漆と鉄剣



同上 鉄剣の把部



ST-164 鉄旗莖部～矢柄と矢入れ具（発見直後）



同上 矢入れ具の一部

図版12



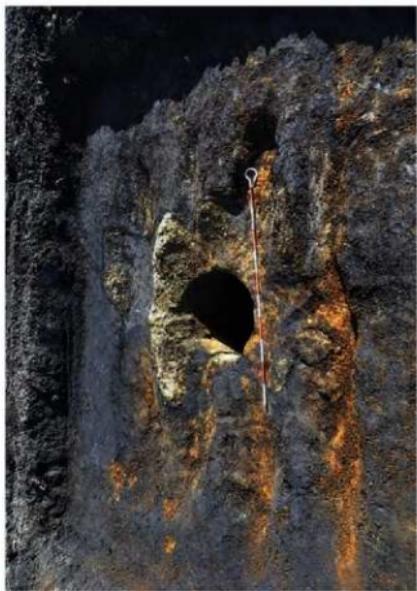
ST-164 人骨除去後 弓の赤漆（西側）



同上 中央付近



同上 東側と鉄剣の把部

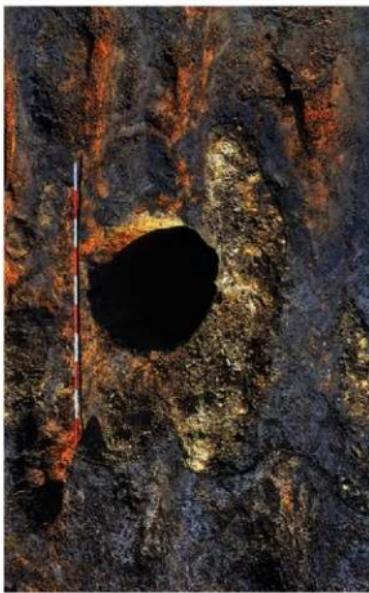


同左 (東から)

同 堅坑完掘 (南から)



ST-165 深耕耕耘による堅坑検出 (西から)



同 耕作土・搅乱土除去 堅坑検出 (西から)

图版14



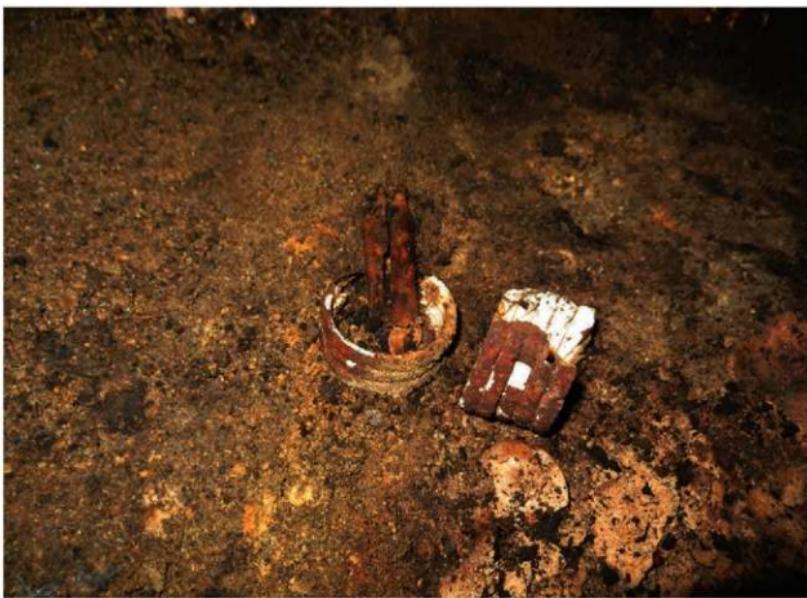
ST-165 玄室内 3体



同上 下肢

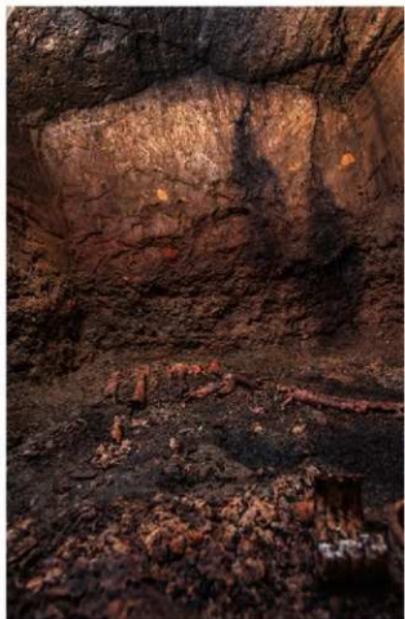


ST-165 2号人骨右腕の貝釧

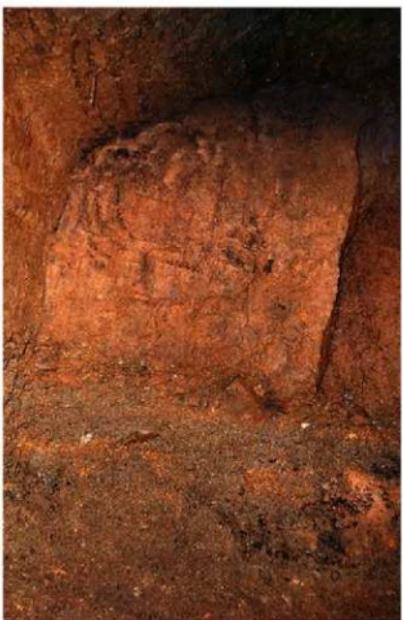


同上 接写

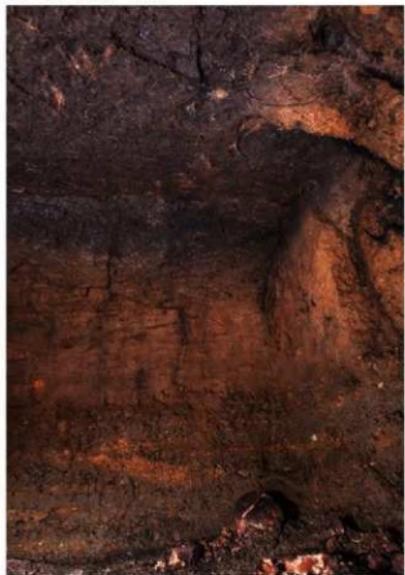
図版16



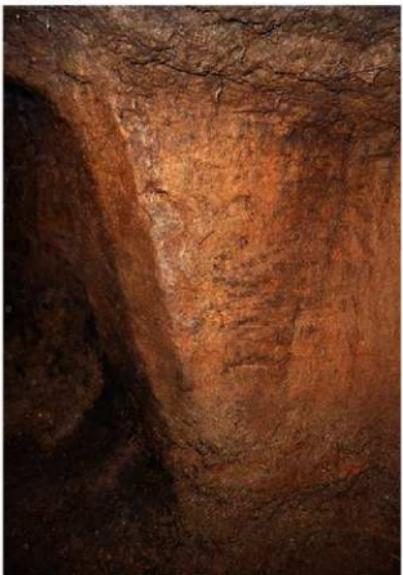
ST-165 玄室 西壁



同左 東壁



同上 天井東半～東壁



同 左天井部



ST-166 玄室 俯瞰（南西から）



同上 2・3号人骨と副葬品

図版18



ST-166 1号人骨と副葬品



同上 上半身と小刀



ST-166 1号人骨 下半身と銅付大刀



同上 3号人骨と副葬品（左寄りやや上に乳歯、左腕部に刀子、右腕部に鉄鏡）

图版20



ST-166 2・3号人骨 下肢～玄室天井



同上 美道 アカホヤ塊閉塞状況



同左 完掘全景（南から）



同 玄室全景（陥没坑側面、南から）



ST-167 堅坑換出 右奥は崩落していた閉塞板石（南から）



同 堅坑断面図序（東から）

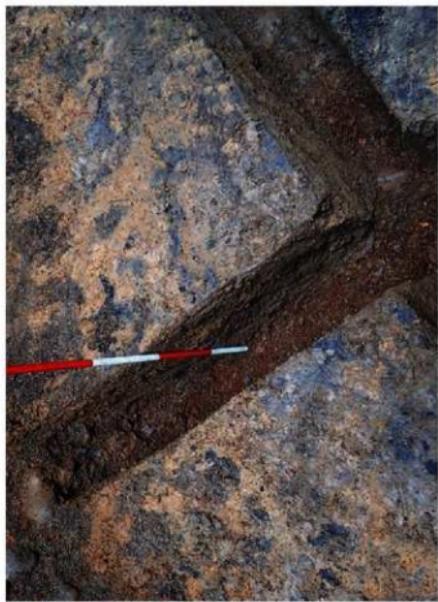
图版22



ST-167 玄室内 人骨 1



同上 頭骨 接写



同左 北中部の貼床断面



同 北西部の貼床断面



ST-167 貼床状況確認試掘 全景（北西から）



同 玄室中位から堅坑底面の貼床断面

図版24



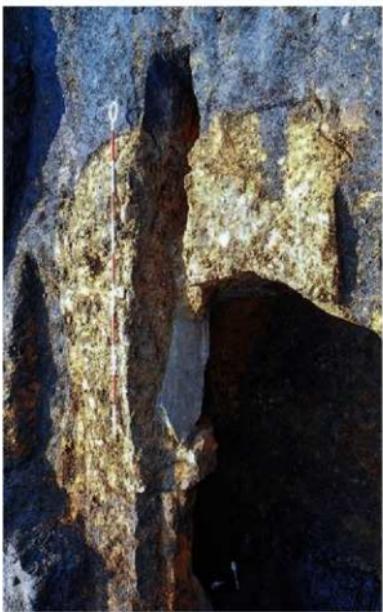
同左 堅坑上部板石閉塞状況（東から）



同上（北から）



ST-168 堅坑検出（南東から）



同 堅坑半軸、断面層序（西から）



ST-168 穂坑完掘（北西から、羨門～玄室天井は崩落）



同上 玄室内 人骨2

図版26



ST-168 1・2号人骨（南から）



同上 西から



ST-168 玄室 北壁



同上 竪坑東壁～東襖部壁面（北西から）



同上 崩落板石



同左 壁坑半截、断面圖（東から）



同 壁坑完掘全景（南から）



ST-169 壁坑換出状態（南から）



同 壁坑～養門の赤色塗彩



同 前常附壁板石



ST-169 玄室内 人骨2



同上 1・2号人骨 上半身（西から）

図版30



ST-169 1号人骨 頭部 自然崩壊



同上 2号人骨 上半身 頭頂部の穿孔は現代昆虫によるもの



ST-169 1・2号人骨 下肢



同上 足先～西壁に肋骨と中手骨を動かし置く状況

図版32



ST-169 右羨道～玄室天井の赤色顔料塗布



同 左羨門部



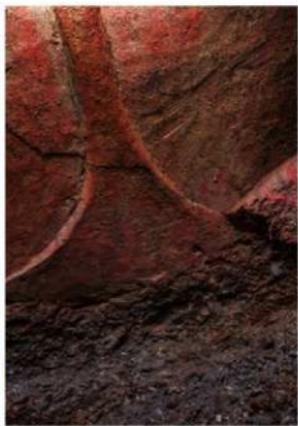
同 竪坑～羨道西側天井



同 竪坑 南壁下半



同 天井の削り出し棟木と赤色顔料塗布





同左 堪坑から吹き出る風と上部閉塞板石（裏返っている）



同 板石中位に壁坑内面の縁がプリントされている



ST-170 耕板・歫立時の発見状況（東から）



同 壁坑検出状態（南から）

図版34



同左下 接写、追跡確認



同玄室内 東壁砂礫層崩落状況（南西から）



ST-170 垂坑換出状態（西から）



同 垂坑半軸、断面崩落（東から）



ST-170 玄室内 全景

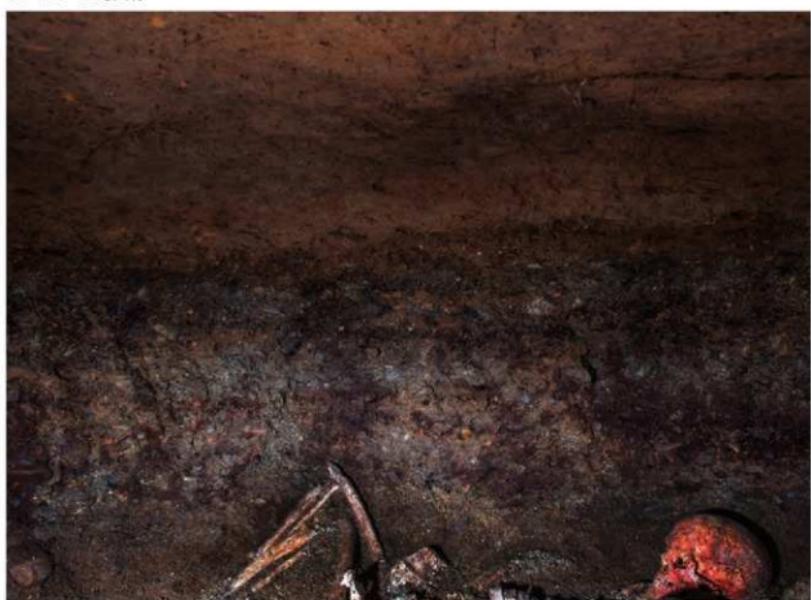


同上 1号人骨と石枕・鉄鎖5

图版36



ST-170 2号人骨



同上 1·2号人骨下肢、西~奥壁



ST-170 1号人骨副葬品 鉄鎌



同上 右裾部付近の鉄鎌

図版38



ST-171 1~3号人骨



同上 頭部～胸部と副葬品・動き置かれた骨



ST-171 1号人骨と奥～東壁の庇



同上 下肢 右大腿骨右に動き置かれた骨

図版40



ST-171 1号人骨



同上 胸部～膝部 右脇下・胸部・大腿骨間中央部に動き置かれた骨



ST-171 1号人骨頭部と副葬品・動き置かれた骨



同上 鉄錆 4と施

図版4-2



同 貼床断ち割り 中央から東南方向



同 薩摩川島大学 横本達也教授による写真撮影風景



ST-171 西壁～北壁と1号人骨下肢



同上 義門板石閉塞状態(北から)



同左 竪坑半載・西壁 断面層序（東から）



同左 南半部 接写（東から）



ST-172 竪坑 検出状態（東から）



同上 断面層序（東から）

図版44



同左 板石除去 完掘(南から)



同右 前密板石



ST-172 堅坑 上部板石開塞状態



同右上 東から 北西部は農耕加重によるズレ落ち



ST-172 玄室内 被葬者 4



同上 1～4号人骨 上半身（西から）

図版46



ST-172 1～4号人骨（南から）



同上 下半身・西壁～北壁



ST-172 1～3号人骨 集骨状況



同上 3号頭骨東側の鉄錆

図版48



ST-172 1号人骨右側の圭頭旗



同上 人骨除去 1-2号間の枕石と赤色顔料・鉄錆



同左 墓土半載 断面順序(東から)



同 振り起された上部防塞板石



ST-173 診断検出状態(南から)天地逆



同上 完掘全景(東から)天地逆

図版50



ST-173 玄室内 被葬者 6



同上 1~5号人骨の頭部



ST-173 5—6号人骨間の貝釧



同上 6号人骨頭と1～5号人骨下肢

図版52



ST-173 1・2号人骨 下肢



同上 1号人骨右側の鉄鎌



同上
6号人骨西の鉄剣
刃を立てている



ST-173 1～3号人骨上半身と北壁



同上 6号人骨頭部と西壁

図版54



右：同
板石検出状態
(南から)



左：同
埋土振り下げ
(西から)

右：同
(東から)



左：SI-05
板石検出状態
(南から)





SI-05 床面（西から）



同左 鉄剣出土状態（南から）



同上 北西、鉄剣出土状態

同 同 鉄剣2（東から）

図版56



SI-05 床面（南西から）



同上 北から



SI-05 貼床断面層序（南から） 下：西から



同上 貼床除去（北から）

図版58

SI-05
貼床除去
(東から)



同上 基底側石 東側 堀形



同左 南側 堀形





同左 床面、貼床確認（西から）





SI-06 遺物出土状態（西から）南東部中央寄りにガラス粟玉



同上 接写

図版62



SI-06 貼床除去、側石堀形検出状態（南から）



同上 完壠（西から）



SI-06 北東部 堀形（西から）



同左 南東部（西から）



同上 西部（北から）



同上 南西部（北から）

図版64

ST-163 出土遺物

刀子



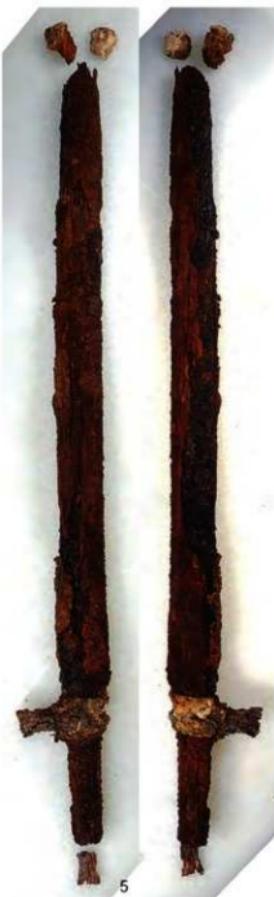
上：刀身間部寄りのハ工圓錐殻

中：中央部様の纖維とハ工の圓錐殼

下：間部寄りの纖維



右：同
(2)



ST-164 出土遺物 (1)



同 鉄剣の柄と組紐巻き



同 左

図版66



ST-164 出土遺物 (3) 貝釧



上：No11 中央付近の刻み（外面～側面） 下・内面

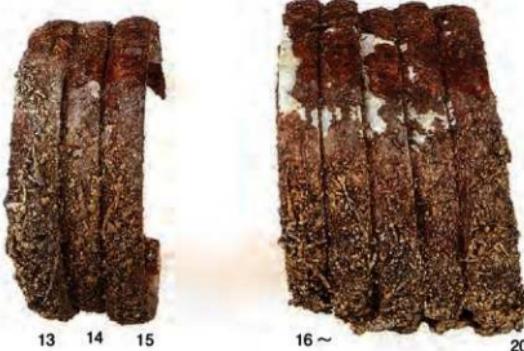


No12 の左片

ST-165

出土遺物

貝銅



図版68



ST-166 出土遺物（1）鉄嵌

同左 : No24

裏 布痕・

八工圓頭殼



同 No21 八工圓頭殼



同 No23裏 八工圓頭殼



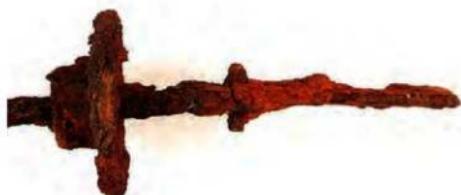
出土遺物（2）



ST-166 出土遺物（3）銹付大刀



同上 刀身のハ工圓頭鎧



同上 鎧と目釘・把



同上 無窓鎧

同上



27

ST-166 出土遺物（4）刀子 中央棟にハ工開頭殻



28



同上 （5）刀子



30



同上 （6）小刀



ST-170 出土遺物（1）鉄錆

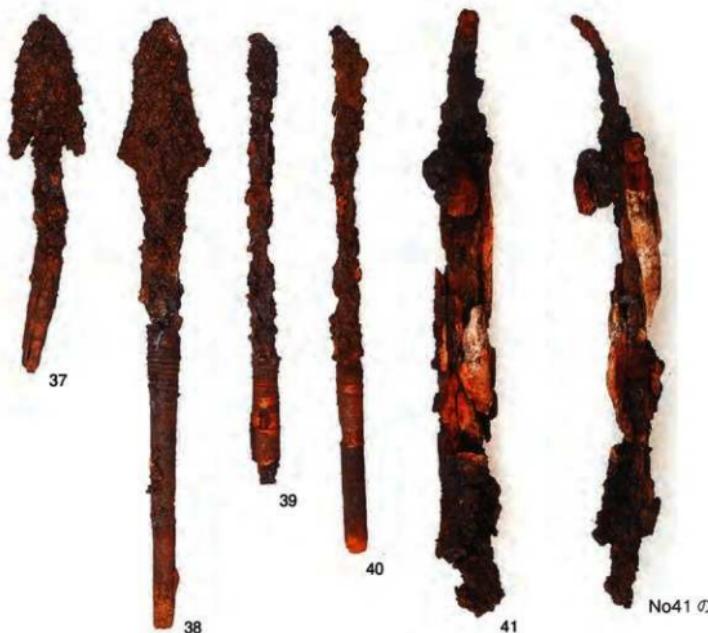
同左（2）鉄鋤



同 鉄鋤の袋部



同左 側面



No41 の側面

ST-171 出土遺物（1）鉄鎌・鎗



同上
茎部の紐



43

同上
出土遺物（2）
刀子



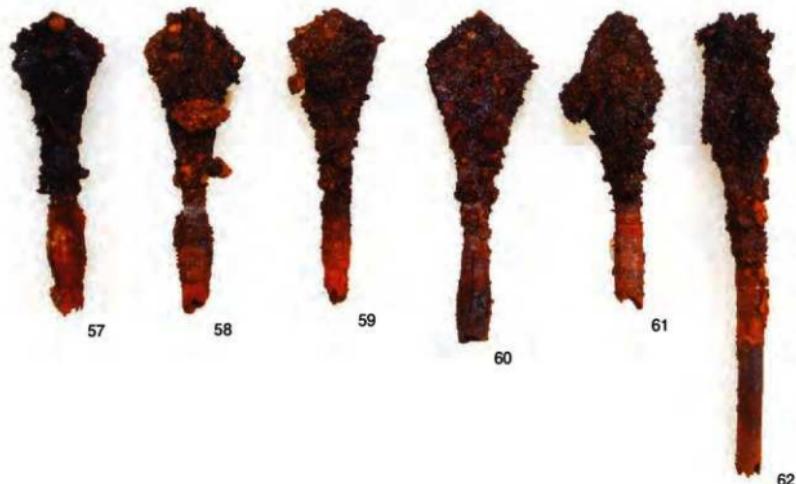
42

同
(3) 刀子



ST-172 出土遺物

図版74



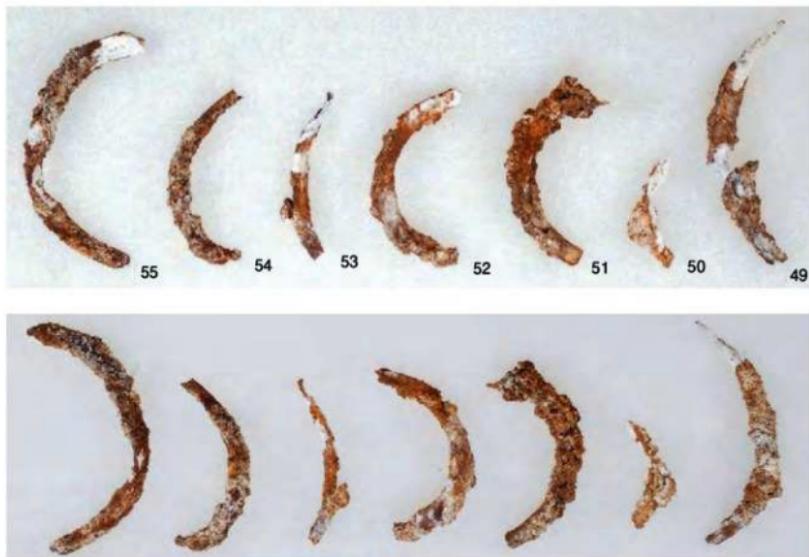
ST-173 出土遺物（1）鉄鎌



同（2）ヤリ

同左 側面

同（3）鉄剣



ST-173 出土遺物（4）貝鉗



同（5）骨角器



同 竪坑北側 捜乱層出土 土師器



SI-05 出土遺物 (1) 鉄剣、把部拡大

同左 (2) 鉄鎌



SI-06 出土遺物 ガラス粟玉

灰塚地下式横穴墓群
写 真 図 版



ST-24 俯瞰（西から）



同 人骨と副葬品

図版2



同 後頭部と大刀



同 義門土塙附着状態(裏から)



ST-24 旗面・頭と刀子(西から)



同 雜骨と鉄錆6



ST-24 玄室北壁～南壁（右侧壁）



同上 左側壁

図版4



ST-24 出土遺物（1）鉄鎌・大刀



同上 No 9 の鋸

同上 No 10 の把締

同上 No 2 の茎部 ハエ回頭般

補 遺



ST-77 出土 鉄剣 重要文化財 No43



ST-91 出土 大刀 重要文化財 No71



ST-91 号墓出土 大刀
重要文化財 No72



ST-22 出土
刀子
重要文化財 No785



ST- 91 出土
鉄鋒
重要文化財 No95

図版2



ST- 91 出土
ヤリ
重要文化財 No97



ST- 56 出土
ヤリ
重要文化財 No96



ST- 91 出土
鉄斧
重要文化財 No764



ST- 77 出土 胡簫 重要文化財 No747・748

付 篇

島内 163 ~ 173 号墓出土人骨分析編

宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土の人骨

— 163 号墓～173 号墓から出土した人骨 —

鹿児島女子短期大学・竹中正巳

はじめに

宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群では、大型農業機械による畑の耕作の際、玄室が陥没し、地下式横穴墓が発見されている。これらの不時発見に対応する緊急発掘はえびの市教育委員会により、その都度、しっかりと行われている。本稿では、2015 年から 2018 年にかけて緊急調査された島内地下式横穴墓群 163 号から 173 号墓で出土した古墳時代人骨について報告する。

出土人骨の所見

表 1 に示すとおり、島内地下式横穴墓群 163 ～ 173 号墓の 10 基から、31 体の古墳時代人骨が出土した。各人骨の個別の計測値、観察データは、表 1 ～ 12 に示す。頭蓋正面観を写真 1 ～ 3 に示す。

島内地下式横穴墓群を営んだ人々の形質

南九州の男性古墳時代人骨の研究から、山間部と宮崎平野部では形質に違いがあり、縄文人的特徴を残す南九州山間部に対し、宮崎平野部の古墳時代人には、渡来人の遺伝的影響が強く現れているとする。南九州山間部の古墳人は西北九州弥生人に極めて類似している（松下、1990）。西北九州弥生人は、頭蓋計測値、頭蓋形態小変異の分析のいずれもが縄文人に類似し、体质的にも文化的にも縄文人的色彩が遅くまで持続した集団と考えられている（内藤、1984；Saiki et. al, 2000）。

1994 年以降、南九州山間部、加久藤盆地に位置する島内地下式横穴墓群（えびの市）から 200 体を越える古墳時代人骨が出土した。「島内地下式横穴墓群」の成人骨は周辺の南九州山間部の古墳人と同様の特徴を多く持つ。しかし、個別にみていくと、非縄文人的特徴を持ち合わせている個体もかなり存在する。サイズの比較的大きな脳頭蓋、頭蓋長幅示数が中頭型、広鼻、前頭部の突出、鼻骨の湾曲、大腿骨の柱状性などが、周辺の南九州山間部の古墳人と同様の特徴である。島内の上顎高、眼窩高が高い点などは異なる特徴である。

島内は、頭蓋計測値の分析結果でも西北九州弥生人とやや異なり、頭蓋形態小変異の出現頻度の分析結果からも類似しない。この頭蓋計測と頭蓋形態小変異の分析結果は、島内の人々が、南九州の山間部の中で異なる存在であり、渡来系の遺伝子をある程度受け入れた集団であるとの解釈を可能にすると考えられる。2012 年段階の頭蓋計測と頭蓋形態小変異の分析結果から、島内の人々は、南九州の山間部の中で異なる存在であり、渡来系の遺伝子を一定程度受け入れた集団であるとの解釈を可能にすると考えた。

今回、2015 年から 2018 年までに出土した人骨を実見したところ、やはり顔が高い人骨が混じる傾向が見て取れる。ただ、顔面平坦度については、前頭骨の平坦性は低く、この点では明らかに渡来系と雰囲気が異なる。四肢骨は大腿骨の柱状性が高く、山野を動きまわる生活が推測される。また、南九州の山間部の地下式横穴から出土する古墳時代人骨に外耳道骨腫がよく認められる。今回報告の島内の人骨にも認められ、島内がやはり人と生活の地域ネットワークの中にいたことはやはり確かであると思われる。今回、得られたデータも加え、詳細な分析を行い、島内を営んだ人々の成り立ちを検証

したい。

古病理学的特記所見

・歯の萌出異常と第三後頭頸

島内 163 号墓 1 号人骨（性別不明・若年）に上顎左犬歯と左第一小白歯の萌出位置の逆転が認められた（写真 1）。また、この人骨には、第三後頭頸が認められた。

頭蓋と脊椎との関節は、頭蓋側では後頭骨の左右の後頭頸が関節を構成する。しかし左右の後頭頸に加え、ごく稀に大後頭孔の前縁中央に頭椎との関節面を生じることがある。この新たな関節面は第三後頭頸（third occipital condyle）と呼ばれており、Meckel (1815) によって初めて報告された。

第三後頭頸は日本列島では北海道のアイヌに多いことが知られており、小金井（1890）によれば北海道アイヌ男女頭蓋 163 例中 9 例に観察されたという。しかし、百々ら（1991）によれば、古墳時代から現代までのアイヌを含まない日本人男女では、694 例中わずか 1 例（0.14%）しか見い出していない。

・骨折治癒痕

島内 170 号墓 2 号人骨（男性・壮年）の左橈骨の骨頭から約 5cm 下に骨折の治癒痕が認められる。尺骨には骨折痕は認められない。

今後、南九州古墳時代人の生活誌や系統を考える上で、南九州の地域内の古病理学的所見の出現頻度を調べ、日本列島内の各地域・各時代集団の出現頻度と比較する研究が必要であり、行っていきたい。

埋葬後の骨移動

また、近年の地下式横穴墓の骨考古学的発掘成果としては、最終埋葬のあとに集骨・骨移動があげられる。2002 年の 8 月には、宮崎県西都市常心原地下式横穴墓群 5 号墓の発掘調査が行われ、ここでも最終埋葬後、再度、玄室を開けて 3 体が玄室中央に集骨されていた。また、宮崎県国富町義門寺地下式横穴墓群 1 号墓の発掘調査で、最終埋葬後に再び玄室を開け、埋葬してあった 2 体の人骨を 1 箇所に集骨した例を明らかにできた。さらに、南九州の内陸部に所在する宮崎県都城市築池地下式横穴墓群 2003-2 号墓からも、墓使用の最終的な儀礼行為として、白骨化した人骨と副葬された平瓶とを動かすという行為が行われた可能性が考えられた。加えて、えびの市島内地下式横穴墓群や都城市築子野横穴墓群でも、同様の遺体が白骨化した後の骨移動が行われたことがこれまでに確認されている。

今回報告した墓の中でも、島内 169 号墓、171 号墓および 172 号墓の人骨の中には、解剖学的位置関係の保たれていない骨がある。特に、島内 172 号墓は、多くの人骨が動かされ、関節していない。172 号墓には、4 体分の人骨が遺存している（奥壁から玄門側へ頭蓋が並んでおり、この順に 1 ~ 4 号人骨と呼ぶ）。1 号頭蓋と 2 号頭蓋には赤色顔料が多く付着する。赤色顔料が、埋葬時に、この 2 体の顔面に施されたと考えられる。3 号と 4 号頭蓋は、埋葬時に顔料は施されていない。最後に埋葬された 4 号人骨の体幹・体肢骨のほとんどは、解剖学的位置関係を保っておらず、動いている。これは明らかに遺体が白骨化した頃、墓に入り、人骨を動かしたことがわかる事例である。遺体が白骨化した後、人骨を動かしたり集骨したりするという行為は、使用墓の最終儀礼とも考えられる。島内地下式横穴墓群に、明らかに最終埋葬後の遺体白骨化後の骨移動・集骨が行われていたことがわかる。

表1. 島内地下式横穴墓群 163～173号墓出土人骨

墓番号	人骨番号	性別	年齢	保存状態	赤色顔料 頭部	赤色顔料 上半身	赤色顔料 下半身	特記事項
163号墓	1号人骨	不明	若年(13～15歳)	△	○	○	×	・第三後頭頸あり ・上頸左乳大歯残存
	2号人骨	女性	壮年後期	△	×	×	×	
	3号人骨	女性	壮年	△	○	×	×	
	4号人骨	男性	壮年	△	○	×	×	
164号墓	1号人骨	男性	熟年	○	○	○	○	
	2号人骨	女性	熟年	○	○			
	3号人骨	女性	壮年	○	×	不明	不明	
165号墓	1号人骨	不明	熟年	○	○	○	○	
	2号人骨	女性	熟年	○	○			
	3号人骨	不明	若年(12～15歳)	○	×	不明	不明	
166号墓	1号人骨	不明	成人	○	○	○	○	
	2号人骨	不明	幼児(3～4歳)	○	○			
	3号人骨	不明	熟年	○	×	不明	不明	
167号墓	1号人骨	不明	熟年	×	○	不明	不明	
169号墓	1号人骨	男性	壮年	○	○	○	×	
	2号人骨	女性	壮年	△	○	×	×	
170号墓	1号人骨	男性	熟年	△	○	×	×	
	2号人骨	男性	壮年	△	×	×	×	・左橈骨に骨折治療痕
171号墓	1号人骨	女性	壮年	△	○	○	○	
	2号人骨	不明	小児(6～7歳)	×	×	不明	不明	
	3号人骨	男性	熟年	△	×	×	×	
172号墓	1号人骨	女性	熟年	△	○			
	2号人骨	男性	熟年	△	○			
	3号人骨	男性	壮年	△	?			
	4号人骨	男性	壮年	△	×			
173号墓	1号人骨	男性	壮年	×	○			
	2号人骨	女性	壮年	×	○		×	
	3号人骨	男性	壮年	×	○			
	4号人骨	不明	不明	×				
	5号人骨	女性	熟年	×	×			
	6号人骨	男性	熟年	×	×	不明	不明	

表 2.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の脳頭蓋計測値 (mm) 及び示数

M No.	人骨番号	島内 163-2	島内 164-1	島内 170-1	島内 170-2	島内 171-3	島内 172-2
	性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性
	年齢	壮年 後期	熟年	熟年	壮年	熟年	熟年
1	頭蓋最大長	173	192	188	176		
8	頭蓋最大幅	140	143	148	140		156
17	バジオン・ブレグマ高	139	138	136	132		130
3	グラベラムダ長	169	183	180	169		176
20	耳ブレグマ高						
5	頭蓋底長	103	106	104	98		
9	最小前頭幅	89	101	95	96		99
10	最大前頭幅	111		118	117		121
11	両耳幅	125		125	123		141
12	最大後頭幅		108	118	114		
13	乳突幅			95	107		
7	大後頭孔長		34	36	36		
16	大後頭孔幅		30	29	31		
23	頭蓋水平周			537	504		
24	横弧長	314		321	307		308
25	正中矢状弧長		393	377	358	354	
26	正中矢状前頭弧長	122	127	137	119	117	122
27	正中矢状頭頂弧長	124	142	114	126	124	117
28	正中矢状後頭弧長		124	126	113	113	
29	正中矢状前頭弦長	110	111	118	106	104	111
30	正中矢状頭頂弦長	109	126	107	115	109	105
31	正中矢状後頭弦長		100	101	96	101	
8/1	頭蓋長幅示数	80.9	74.5	78.7	79.5		
17/1	頭蓋長高示数	80.3	71.9	72.3	75.0		
17/8	頭蓋幅高示数	99.3	96.5	91.9	94.3		83.3
20/1	頭長耳ブレグマ高示数						
20/8	頭幅耳ブレグマ高示数						
9/10	横前頭示数	80.2		80.5	82.1		81.8
9/8	横前頭頭頂示数	63.6	70.6	64.2	68.6		63.5
16/7	大後頭孔示数		88.2	80.6	86.1		
1+8+17/3	頭蓋モルス	150.7	157.7	157.3	149.3		
26/25	前頭矢状弧示数		32.3	36.3	33.2	33.1	
27/25	頭頂矢状弧示数		36.1	30.2	35.2	35.0	
28/25	後頭矢状弧示数		31.6	33.4	31.6	31.9	
27/26	矢状前頭頭頂示数	101.6	111.8	83.2	105.9	106.0	95.9
28/26	矢状前頭後頭示数		97.6	92.0	95.0	96.6	
28/27	矢状頭頂後頭示数		87.3	110.5	89.7	91.1	
29/26	矢状前頭示数	90.2	87.4	86.1	89.1	88.9	91.0
30/27	矢状頭頂示数	87.9	88.7	93.9	91.3	87.9	89.7
31/28	矢状後頭示数		80.6	80.2	85.0	89.4	

表 2.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨および未成人骨の脳頭蓋計測値 (mm) 及び示数

M No.	人骨番号	島内 163-3	島内 164-2	島内 164-3	島内 169-2	島内 171-1	島内 163-1 ?若年 (13~15歳)
	性別	女性	女性	女性	女性	女性	
	年齢	壮年	熟年	壮年	壮年	壮年	
1	頭蓋最大長		174	181	178	179	
8	頭蓋最大幅		138	140	134	136	
17	バジオン・ブレグマ高		136	133	128	129	129
3	グラベロラムダ長		170	177	173	175	
20	耳ブレグマ高						
5	頭蓋底長		95	101		96	90
9	最小前頭幅	94		92		92	91
10	最大前頭幅			111	114	113	
11	両耳幅			123	118		
12	最大後頭幅			108		99	114
13	乳突幅			107			
7	大後頭孔長			36		32	
16	大後頭孔幅			29		25	
23	頭蓋水平周						
24	横弧長				299		
25	正中矢状弧長			369		366	
26	正中矢状前頭弧長	125		126		121	118
27	正中矢状頭頂弧長			130	122	133	
28	正中矢状後頭弧長			113		112	
29	正中矢状前頭弦長	111		111		106	103
30	正中矢状頭頂弦長			116	110	119	
31	正中矢状後頭弦長			96		94	
8/1	頭蓋長幅示数		79.3	77.3	75.3	76.0	
17/1	頭蓋長高示数		78.2	73.5	71.9	72.1	
17/8	頭蓋幅高示数		98.6	95.0	95.5	94.9	
20/1	頭長耳ブレグマ高示数						
20/8	頭幅耳ブレグマ高示数						
9/10	横前頭示数			82.9		81.4	
9/8	横前頭頭頂示数			65.7		67.6	
16/7	大後頭孔示数			25.0		78.1	
1+8+17/3	頭蓋モズルス		151.3	146.7	114.7		
26/25	前頭矢状弧示数		34.1		33.1		
27/25	頭頂矢状弧示数		35.2		36.3		
28/25	後頭矢状弧示数		30.6		30.6		
27/26	矢状前頭頭頂示数		103.2		109.9		
28/26	矢状前頭後頭示数		89.7		92.6		
28/27	矢状頭頂後頭示数		86.9		84.2		
29/26	矢状前頭示数	88.8		88.1		87.6	
30/27	矢状頭頂示数			89.2	90.2	89.5	
31/28	矢状後頭示数			85.0		83.9	87.3

表 2.3. 島内地下式横穴墓群出土未成人骨の脳頭蓋計測値 (mm) 及び示数

M No.	人骨番号	島内 163-1
	性別	?
	年齢	若年 (13~15歳)
1	頭蓋最大長	
8	頭蓋最大幅	
17	バジオン・ブレグマ高	129
3	グラベロラムダ長	
20	耳ブレグマ高	
5	頭蓋底長	90
9	最小前頭幅	91
10	最大前頭幅	
11	両耳幅	114
12	最大後頭幅	
13	乳突幅	
7	大後頭孔長	
16	大後頭孔幅	
23	頭蓋水平周	
24	横弧長	
25	正中矢状弧長	
26	正中矢状前頭弧長	118
27	正中矢状頭頂弧長	
28	正中矢状後頭弧長	
29	正中矢状前頭弦長	103
30	正中矢状頭弦長	
31	正中矢状後頭弦長	
8/1	頭蓋長幅示数	
17/1	頭蓋長高示数	
17/8	頭蓋幅高示数	
20/1	頭長耳ブレグマ高示数	
20/8	頭幅耳ブレグマ高示数	
9/10	横前頭示数	
9/8	横前頭頭頂示数	
16/7	大後頭孔示数	
1+8+17/3	頭蓋モズルス	
26/25	前頭矢状弧示数	
27/25	頭頂矢状弧示数	
28/25	後頭矢状弧示数	
27/26	矢状前頭頭頂示数	
28/26	矢状前頭後頭示数	
28/27	矢状頭頂後頭示数	
29/26	矢状前頭示数	87.3
30/27	矢状頭頂示数	
31/28	矢状後頭示数	

表3.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の顔面頭蓋計測値 (mm) 及び示数

M No.	人骨番号	島内 163-2	島内 164-1	島内 170-1	島内 170-2	島内 171-3	島内 172-2
	性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性
	年齢	壮年 後期	熟年	壮年 後期	壮年	熟年	熟年
40	顎長	107	107	98	96	107	
45	頬骨弓幅	131	((138))	137	((136))	131	151
46	中顎幅	((104))	102	98	101	((104))	108
47	顎高	122	115	95	111	122	119
48	上顎高	72	69	58	64	72	71
51	眼窩幅 (左)	40	43	41		40	45
	眼窩幅 (右)		43	41			45
52	眼窩高 (左)	33	34	32	33	33	34
	眼窩高 (右)		33	31			35
54	鼻幅	25	31	29	26	25	54
55	鼻高	51	51	48	49	51	27
H.	NLH 鼻高	51	51.5	49	49	51	54
43	上顎幅	99	111	103	103	99	111
44	両眼窩間幅		103	98			104
50	前眼窩間幅	17	22	20	23	17	22
F.	鼻根横弧長	21	28	26	27	21	27
57	鼻骨最小幅	10	12	10	11	10	8
60	上顎歯槽長						
61	上顎歯槽幅						
62	口蓋長						
63	口蓋幅						
47/45	Kollmann 顎示数	93.1	((83.3))	69.3	((81.6))	93.1	78.8
47/46	Virchow 顎示数	((117.3))	112.7	96.9	109.9	((117.3))	110.2
48/45	Kollmann 上顎示数	55.0	((50.0))	42.3	((47.1))	55.0	47.0
48/46	Virchow 上顎示数	((69.2))	67.6	59.2	63.4	((69.2))	65.7
52/51	眼窓示数 (左)	82.5	79.1	78.0		82.5	75.6
	眼窓示数 (右)			76.7	75.6		77.8
54/55	鼻示数	49.0	60.8	60.4	53.1	49.0	50.0
40+45+47/3	顎面モルス	120.0	((120.0))	110.0	((114.3))	120.0	
61/60	上顎歯槽示数						
63/62	口蓋示数						
64/63	口蓋高示数						
40/5	顎示数	103.9	100.9	94.2	98.0	103.9	
50/44	眼窓間示数		21.4	20.4			21.2
50/F.	鼻根湾曲示数	81.0	78.6	76.9	85.2	81.0	81.5
65	下顎閉節突起幅			129	131		
65 (1)	下顎筋突起幅		118	99	96		106
66	下顎角幅			105			
69	オトガイ高	35		27	30	35	33
69 (1)	下顎体高 (左)	33		27		33	33
	下顎体高 (右)	32	30	27	31	32	33
69 (3)	下顎体厚 (左)	13	14	13		13	12
	下顎体厚 (右)		15	13	14		13
70a	下顎頭高 (左)			55	48		
	下顎頭高 (右)		50	55	55		
70	下顎枝高 (左)			63			
	下顎枝高 (右)		61	62	59		
71	下顎枝幅 (左)			33			
	下顎枝幅 (右)		32	33	34		
71a	最小下顎枝幅 (左)			33	34		
	最小下顎枝幅 (右)		31	33	34		
68	下顎 (体) 長	71	75	73			
68 (1)	下顎長	104	103	105			
79	下顎枝角 (左)			123	125		
	下顎枝角 (右)		128	123	122		
71/70	下顎枝示数 (左)			52.4			
	下顎枝示数 (右)		52.5	53.2	57.6		

表3.2 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨および未成人骨の顔面頭蓋計測値 (mm) 及び示数

M No.	人骨番号	島内	島内	島内	島内	島内	島内
		163-3	164-2	164-3	169-2	171-2	163-1
	性別	女性	女性	女性	女性	女性	?
	年齢	壯年	熟年	壯年	壯年	壯年	若年 (13~15歳)
40	顎長		102	102		94	93
45	頬骨弓幅		127	((135))	131	125	125
46	中顎幅		95	103	104	98	97
47	顎高		113	117		102	
48	上顎高		67	71		62	59
51	眼窩幅 (左)		41	42		37	38
	眼窩幅 (右)	41	41	43		37	38
52	眼窩高 (左)		33	35		34	31
	眼窩高 (右)	33	33	35		34	33
54	鼻幅		28	30		26	25
55	鼻高		46	51		47	39
H.	NLH 鼻高		46.5	51		47.5	39
43	上顎幅		103	107		99	102
44	両眼窩間幅		95	99		92	93
50	前眼窩間幅		20	17		21	21
F.	鼻根横弧長		22	21		25	
57	鼻骨最小幅		9	9		11	6
60	上顎歯槽長						
61	上顎歯槽幅						
62	口蓋長						
63	口蓋幅						
47/45	Kollmann 顔示数		89.0	((86.7))		81.6	
47/46	Virchow 顔示数		115.8	113.6		104.1	
48/45	Kollmann 上顎示数		52.8	((52.6))		49.6	47.2
48/46	Virchow 上顎示数		70.5	68.9		63.3	60.8
52/51	眼窩示数 (左)		80.5	83.3		91.9	81.6
	眼窩示数 (右)	80.5	78.6	81.4		91.9	86.8
54/55	鼻示数		60.9	58.8		55.3	64.1
40+45+47/3	顔面モルタルス		114.0	((118.0))		107.0	
61/60	上顎歯槽示数						
63/62	口蓋示数						
64/63	口蓋高示数						
40/5	顎示数		107.4	101.0		97.9	103.3
50/44	眼窩間示数		21.1	17.2		22.8	22.6
50/F.	鼻根溝曲示数		90.1	81.0		84.0	
65	下顎閉節突起幅			129			
65 (1)	下顎筋突起幅			105		101	90
66	下顎角幅			100			
69	オトガイ高		33	33		25	29
69 (1)	下顎体高 (左)		34	32		30	26
	下顎体高 (右)		33	32		27	27
69 (3)	下顎体厚 (左)		13	15		15	14
	下顎体厚 (右)		14	15		16	13
70a	下顎頭高 (左)		54	50			
	下顎頭高 (右)			53			
70	下顎技高 (左)		61	57			
	下顎技高 (右)			61			
71	下顎技幅 (左)		36	36			
	下顎技幅 (右)			34		35	36
71a	最小下顎技幅 (左)		36	36			
	最小下顎技幅 (右)			33		35	36
68	下顎 (体) 長			73			
68 (1)	下顎長			100			
79	下顎技角 (左)		121	121			
	下顎技角 (右)			122			
71/70	下顎技示数 (左)		59.0	63.2			
	下顎技示数 (右)			55.7			

表 3.3. 島内地下式横穴墓群出土未成人骨の顔面頭蓋計測値 (mm) 及び示数

	人骨番号	島内 163-1
	性別	?
	年齢	(13~15歳)
40	顎長	93
45	類骨弓幅	125
46	中頬幅	97
47	顎高	
48	上顎高	59
51	眼窩幅 (左)	38
	眼窩幅 (右)	38
52	眼窩高 (左)	31
	眼窩高 (右)	33
54	鼻幅	25
55	鼻高	39
H.	NLH 鼻高	39
43	上顎幅	102
44	両眼窩間幅	93
50	前眼窩間幅	21
F.	鼻根横弧長	
57	鼻骨最小幅	6
60	上顎歛槽長	
61	上顎歛槽幅	
62	口蓋長	
63	口蓋幅	
47/45	Kollmann 顔示数	
47/46	Virchow 顔示数	
48/45	Kollmann 上顎示数	47.2
48/46	Virchow 上顎示数	60.8
52/51	眼高示数 (左)	81.6
	眼高示数 (右)	86.8
54/55	鼻示数	64.1
40+45+47/3	顔面モスクス	
61/60	上顎歛槽示数	
63/62	口蓋示数	
64/63	口蓋高示数	
40/5	顎示数	103.3
50/44	眼窩間示数	22.6
50/F.	鼻根湾曲示数	
65	下顎関節突起幅	
65 (1)	下顎筋突起幅	90
66	下顎角幅	
69	オトガイ高	29
69 (1)	下顎体高 (左)	26
	下顎体高 (右)	27
69 (3)	下顎体厚 (左)	14
	下顎体厚 (右)	13
70a	下顎頭高 (左)	
	下顎頭高 (右)	
70	下顎枝高 (左)	
	下顎枝高 (右)	
71	下顎枝幅 (左)	
	下顎枝幅 (右)	36
71a	最小下顎枝幅 (左)	
	最小下顎枝幅 (右)	36
68	下顎 (体) 長	
68 (1)	下顎長	
79	下顎枝角 (左)	
	下顎枝角 (右)	
71/70	下顎枝示数 (左)	
	下顎枝示数 (右)	

表 4.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の顔面平坦度計測値 (mm) 及び示数

人骨番号	島内 163-2	島内 164-1	島内 170-1	島内 170-1	島内 172-2
性別	男性	男性	男性	男性	男性
年齢	壮年 後期	熟年	熟年	壮年	熟年
前頭骨弦	91.7	102.7	97.3		105.6
前頭骨垂線	12.0	16.7	15.5		20.9
前頭骨平坦示数	13.1	16.3	15.9		19.8
鼻骨弦	9.6	11.7	10.4	10.8	11.7
鼻骨垂線	2.8	5.0	4.6	2.0	5.0
鼻骨平坦示数	28.7	42.6	44.5	18.3	42.6
頬上顎骨弦		101.7	91.6	98.8	101.7
頬上顎骨垂線		24.6	16.1	18.4	24.6
頬上顎骨平坦示数		24.2	17.6	18.6	24.2

表 4.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の顔面平坦度計測値 (mm) 及び示数

人骨番号	島内 163-3	島内 164-2	島内 164-3	島内 171-1
性別	女性	女性	女性	女性
年齢	壮年	熟年	壮年	壮年
前頭骨弦	94.9	95.1	98.3	91.4
前頭骨垂線	12.0	16.2	16.8	13.1
前頭骨平坦示数	12.7	17.1	17.1	14.4
鼻骨弦		9.1	8.7	11.2
鼻骨垂線		3.3	3.0	2.9
鼻骨平坦示数		36.5	34.8	25.8
頬上顎骨弦		94.4	99.6	95.2
頬上顎骨垂線		22.9	22.5	19.0
頬上顎骨平坦示数		24.2	22.6	20.0

表 4.3. 島内地下式横穴墓群出土未成人骨の顔面平坦度計測値 (mm) 及び示数

人骨番号	島内 163-1
性別	?
年齢	若年 (13~15歳)
前頭骨弦	92.5
前頭骨垂線	13.2
前頭骨平坦示数	14.3
鼻骨弦	
鼻骨垂線	
鼻骨平坦示数	
頬上顎骨弦	96.6
頬上顎骨垂線	17.0
頬上顎骨平坦示数	17.6

表 5.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の頭蓋形態小変異の出現状況

人骨番号	島内						
	163-2	163-4	164-1	170-1	170-2	171-1	172-2
性別	男性						
年齢	壮年	壮年	壮年	熟年	壮年	熟年	熟年
	右	左	右	左	右	左	右
1 ラムダ小骨	-	-	-	-	-	-	-
2 ラムダ縫合骨	-	-	-	+	+	+	+
3 インカ骨	-	-	-	-	-	-	-
4 横後頭縫合痕跡	-	-	-	-	-	-	-
5 アステリオン小骨	-	-	-	-	-	-	-
6 後頭乳突縫合骨	-	-	-	-	-	-	+
7 頭頂切痕骨	-	-	-	-	-	+	-
8 頭頂孔	-	-	-	-	-	-	-
9 冠状縫合骨	-	-	-	-	-	-	-
10 前頭縫合残存	-	-	-	-	-	-	-
11 眼窓上神経溝	-	-	-	-	-	-	-
12 眼窓上孔	-	-	-	-	-	+	-
13 前頭孔	-	-	-	-	-	-	-
14 二分頸骨	-	-	-	-	-	-	-
15 横頸骨縫合痕跡	+	-	-	-	-	-	-
16 頬骨顔面孔欠如	-	-	-	-	-	-	-
17 口蓋隆起	-	-	+	+	-	-	-
18 内側口蓋管骨橋	-	+	-	-	-	-	-
19 外側口蓋管骨橋	-	-	-	-	-	-	-
20 衛槽口蓋管	-	-	-	-	-	-	-
21 頬管欠如	-	-	+	-	-	+	-
22 後頭頸前結節	-	-	-	+	-	-	-
23 第3後頭頸	-	-	-	-	-	-	-
24 後頭頸旁突起	+	-	-	-	-	-	-
25 舌下神経管二分	+	-	+	+	-	+	-
26 頸静脈孔二分	+	-	-	-	-	-	-
27 側頭靜脈孔優位	-	-	-	-	-	-	-
28 外耳道骨瘤	+	+	-	+	+	+	+
29 フシュケ孔	-	+	-	-	-	-	-
30 ベサリウス孔	-	+	+	+	-	+	-
31 卵円孔形成不全	+	-	-	-	-	-	-
32 線孔開裂	-	-	-	-	-	-	-
33 翼棘孔	-	-	-	-	-	-	-
34 床状突起間骨橋	-	-	-	-	-	-	-
35 左側横洞溝優位	-	-	R	R	-	-	L
36 鱗状縫合骨	-	-	-	-	-	-	-
37 矢状縫合骨	-	-	-	-	-	-	-
38 ブレグマ小骨	-	-	-	-	-	-	+
39 後頭頸二分	-	-	-	-	-	-	-
40 下頬隆起	-	-	-	-	-	-	-
41 頸舌骨筋神経管	-	-	-	-	-	-	-
42 副才トガイ孔	-	-	-	-	-	-	+
43 下頬隆起	+	-	-	+	+	+	+
44 頸舌骨筋神経管	-	-	-	-	-	-	-
45 副下頬管	-	-	-	-	-	-	-

表 5.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨および未成人骨の頭蓋形態小変異の出現状況

人骨番号	島内		島内									
	163-3		164-2		164-3		169-2		171-1		173-5	
	性別	女性	性別	不明								
年齢	壯年	熟年	壯年	壯年	壯年	壯年	壯年	壯年	壯年	壯年	(13~15歳)	
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
1 ラムダ小骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2 ラムダ縫合骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3 インカ骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4 横後頭縫合痕跡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5 アステリオン小骨	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-
6 後頭乳突縫合骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-
7 頭頂切痕骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8 頭頂孔	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9 冠状縫合骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
10 前頭縫合残存	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
11 眼窩上神経溝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12 眼窩上孔	-	-	+	+	+	-	+	-	+	-	-	-
13 前頭孔	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
14 二分類骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
15 横頸骨縫合痕跡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
16 頸骨顎面孔欠如	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
17 口蓋隆起	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-
18 内側口蓋管骨橋	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-
19 外側口蓋管骨橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
20 舌槽口蓋管	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21 顆管欠如	-	+	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-
22 後頭頸前結節	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
23 第3後頭頸	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
24 後頭頸旁突起	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-
25 舌下神経管二分	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26 頸静脈孔二分	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27 側側頸静脈孔優位	-	-	R	R	-	-	-	-	-	-	-	-
28 外耳道骨瘤	-	-	+	+	+	+	-	-	-	-	+	-
29 フシュケ孔	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-
30 ベサリウス孔	+	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-
31 卵円孔形成不全	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
32 肋孔開裂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
33 翼棘孔	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
34 床状突起間骨橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
35 左側横洞溝優位	-	-	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-
36 鱗状縫合骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
37 矢状縫合骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
38 ブレグマ小骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
39 後頭頸二分	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
40 下頷隆起	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
41 頸舌骨筋神経管	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-
42 副オトガイ孔	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
43 下頷隆起	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-
44 頸舌骨筋神経管	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
45 副下頷管	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表 6.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の上腕骨計測値 (mm) 及び示数

上腕骨 M No.	人骨番号	島内		島内 170-2
		163-2	164-1	
	性別	男性	男性	男性
	年齢	熟年	熟年	壯年
1	最大長	左 右		
5	中央最大径	左 右	24 26	21 21
6	中央最小径	左 右	18 17	17 15
7	骨体最小周	左 右		
7a	中央周	左 右	66 70	61 61
6/5	骨体断面示数	左 右	75.0 65.4	81.0 71.4

表 6.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の上腕骨計測値 (mm) 及び示数

上腕骨 M No.	人骨番号	島内		島内 171-1
		164-2	164-3	
	性別	女性	女性	女性
	年齢	熟年	壯年	壯年
1	最大長	左 右	258 274	266
5	中央最大径	左 右	20 21	20 21
6	中央最小径	左 右	16 16	15 17
7	骨体最小周	左 右	57 58	
7a	中央周	左 右	61 60	63 60
6/5	骨体断面示数	左 右	80.0 76.2	85.7 85.0

表 6.3. 島内地下式横穴墓群出土未成人骨の上腕骨計測値 (mm) 及び示数

上腕骨 M No.	人骨番号	島内	
		163-1	不明
		年齢	若年 13-15歳
5	中央最大径	左 右	18
6	中央最小径	左 右	13
7	骨体最小周	左 右	44
7a	中央周	左 右	52
6/5	骨体断面示数	左 右	72.2

表 7.1. 島内地下式横穴墓群出土成人骨（男・女）の焼骨計測値（mm）及び示数

桡骨 M No.	人骨番号		島内 163-2	島内 164-1	島内 170-1	島内 170-2	島内 171-1		島内 164-2	島内 164-3
	性別		男性	男性	男性	男性	男性		女性	女性
	年齢		熟年	熟年	熟年	壮年	熟年	熟年	熟年	壮年
1	最大長	左							204	
		右	225						204	
2	機能長	左							191	
		右	214						192	
3	最小周	左							40	
		右	40	41					41	
4	骨体横径	左		16					16	16
		右		16	18	14	16		17	
5	骨体矢状径	左		12					11	11
		右		12	12	11	13		12	
4a	骨体中央横径	左	15	16					16	
		右	15	16					17	
5a	骨体中央矢状径	左	12	12					11	
		右	11	13					12	
5 (5)	骨体中央周	左	42	44					43	
		右	42	44					44	
3/2	長厚示数	左							20.9	
		右	18.7						21.4	
5/4	骨体断面示数	左		75.0					68.8	68.8
		右		75.0	66.7	78.6	81.3		70.6	
5a/4a	中央断面示数	左	80.0	75.0					68.8	
		右	73.3	81.3					70.6	

表 8.1. 島内地下式横穴墓群出土成人骨（男・女）の尺骨計測値（mm）及び示数

尺骨 M No.	人骨番号		島内 164-1	島内 170-1	島内 170-2	島内 171-1		島内 164-2	島内 164-3
	性別		男性	男性	男性	男性		女性	女性
	年齢		熟年	熟年	壮年	熟年	熟年	熟年	壮年
1	最大長	左							222
		右							
2	機能長	左							196
		右							
3	最小周	左	35						37
		右	36		36				37
3'	中央周	左	46						46
		右	47		45	44			48
11	尺骨前後径	右	15	14	13	14		12	14
		左							
12	尺骨横径	右	17	19	16	18		16	17
		左	14						
11'	中央最小径	右	14		12	10			13
		左							
12'	中央最大径	左	16						16
		右	15		15	14			16
3/2	長厚示数	左							
		右							
11/12	骨体断面示数	左							87.5
		右	88.2	73.7	81.3	77.8		75.0	82.4
11'/12'	骨体断面示数	左	87.5						81.3
		右	93.3		80.0	71.4			81.3

表9.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の大脛骨計測値 (mm) 及び示数

大脛骨 M No.	人骨番号	島内 163-2		島内 163-4		島内 164-1		島内 169-1		島内 170-1		島内 170-2		島内 171-1		島内 173-1	
		性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
	年齢	壮年 後期	壮年	熟年	壮年	熟年	壮年	熟年	壮年	熟年	壮年	熟年	壮年	熟年	壮年	熟年	壮年
1	最大長	左 右	415 420		400												
2	自然位全長	左 右															
6	骨体中央矢状径	左 右	28 29	27		25	28					32	29				
7	骨体中央横径	左 右	26 25	32		24	27					28	29				
8	骨体中央周	左 右	84 85	91		85	79	88				93	91				
9	骨体上横径	左 右	31 33	36	35	30	31										
10	骨体上矢状径	左 右	28 25	25	25	24	24					22	22				
8/2	長厚示数	左 右															
6/7	骨体中央断面示数	左 右	107.7 116.0			104.2 84.4	107.4 96.3					114.3	100.0				
10/9	上骨体断面示数	左 右	90.3 75.8		70.6 69.4		77.4 71.4			71.0 81.5							

表9.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨および未成人骨の大脛骨計測値 (mm) 及び示数

大脛骨 M No.	人骨番号	島内 163-3		島内 164-2		島内 164-2		島内 164-3		島内 169-2		島内 171-1		島内 173-2		島内 163-1	
		性別	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	不明
	年齢	壮年	熟年	熟年	壮年	熟年	壮年	熟年	壮年	熟年	壮年	熟年	壮年	熟年	壮年	熟年	若年 13~15歳
1	最大長	左 右		379 380	379 380												
2	自然位全長	左 右															
6	骨体中央矢状径	左 右	23 25		23 23	23	25					26					19
7	骨体中央横径	左 右	24 25		25	25	26					25					18
8	骨体中央周	左 右	74 75	76	76	80		78		82							64
9	骨体上横径	左 右	28 30	30	30	34	30					23					24
10	骨体上矢状径	左 右	22 21	21	21	23	23		21								20
8/2	長厚示数	左 右															
6/7	骨体中央断面示数	左 右	95.8 100.0			92.3 92.0		104.0 96.2									105.6 105.3
10/9	上骨体断面示数	左 右	78.6 70.0	70.0	70.0	67.6	76.7					87.0					83.3 84.0

表 10.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の脛骨計測値 (mm) 及び示数

脛骨 M No.	人骨番号	島内 163-2	島内 163-4	島内 164-1	島内 169-1	島内 170-1	島内 171-1	島内 173-1
	性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
	年齢	壮年 後期	熟年	熟年	壮年	熟年	熟年	壮年
1	全長	左 右						
1a	最大長	左 右					362	
8	中央最大径	左 右	32 33		31	30		28 29
9	中央横径	左 右	20 20		21	21		20 19
10	骨体周	左 右	81 82		82	80		77 77
8a	栄養孔位最大径	左 右	36 37		33	35		
9a	栄養孔位横径	左 右	23 23		22	21		
10a	栄養孔位周	左 右	90 94		87	89		
10b	骨体最小周	左 右	74 76		72	75		66
9/8	中央断面示数	左 右	62.5 60.6		67.7	70.0		71.4 65.5
9a/8a	栄養孔位断面示数	左 右	63.9 62.2		66.7	60.0		
10b/1	長厚示数	左 右				67.6	72.7	

表 10.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨および未成人骨の脛骨計測値 (mm) 及び示数

脛骨 M No.	人骨番号	島内 163-3	島内 164-2	島内 164-3	島内 169-2	島内 171-1	島内 163-1 不明 若年 13~15歳	島内 165-3 不明 若年 12~15歳
	性別	女性	女性	女性	女性	女性		
	年齢	壮年	熟年	壮年	壮年	壮年		
1	全長	左 右						
1a	最大長	左 右		318				
8	中央最大径	左 右	27 27	26 21	26 26	27		
9	中央横径	左 右	20 20	19 18	21 21	21		
10	骨体周	左 右	72 72	72 64	73 73	76		
8a	栄養孔位最大径	左 右	29 31	28 24	29 32	30	24	28
9a	栄養孔位横径	左 右	22 22	21 21	22 21	24	17	19
10a	栄養孔位周	左 右	76 80	78 71	80 83	86	63	74
10b	骨体最小周	左 右	66 68	65 62	67 69	71	54	74
9/8	中央断面示数	左 右	74.1 74.1	73.1 85.7	80.8 77.8	77.8	70.8	
9a/8a	栄養孔位断面示数	左 右	75.9 71.0	75.0 87.5	75.9 65.6	80.0		67.9
10b/1	長厚示数	左 右						67.9

表 11.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の鎖骨計測値 (mm) 及び示数

鎖骨 M No.	人骨番号	島内 170-1		島内 170-2		島内 171-1		島内 164-3	島内 171-1
		男性	女性	男性	女性	男性	女性		
	年齢	熟年	壯年	熟年	壯年	熟年	壯年	壮年	壮年
1	最大長	左						141	
		右							
4	中央垂直径	左	10	9	11		10		
		右		10	11				9
5	中央矢状径	左	12	13	12		12		
		右		13	13				11
6	中央周	左	37	33	38		36		
		右		37	38				32
6/1	長厚示数	左					25.5		
		右							
4/5	中央断面示数	左	83.3	69.2	91.7		83.3		
		右		76.9	84.6				81.8

表 12.1. 島内地下式横穴墓群出土成人骨（男・女）の身長 (cm)

人骨番号	島内 163-2		島内 164-1		島内 169-1		島内 164-2	島内 164-3
	男性	女性	男性	女性	男性	女性		
年齢	壮年	後期	熟年	熟年	熟年	熟年		
身長 (ピアソン式)	左	159.3	156.5				146.6	
大顎骨最大長より	右	160.3			154.8		146.8	145.0



写真 1 島内地下式横穴墓群出土 未成人骨 163 号墓 1 号人骨（性別不明・若年）

左：頭蓋正面観 右：上顎左乳大歯残存

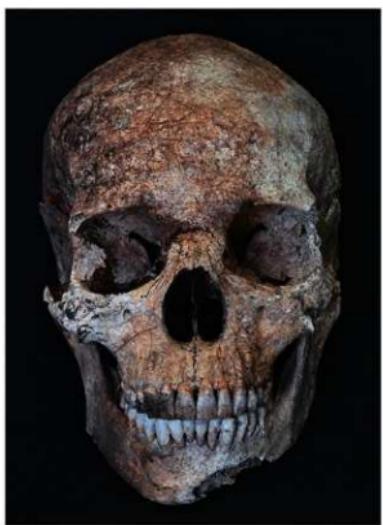
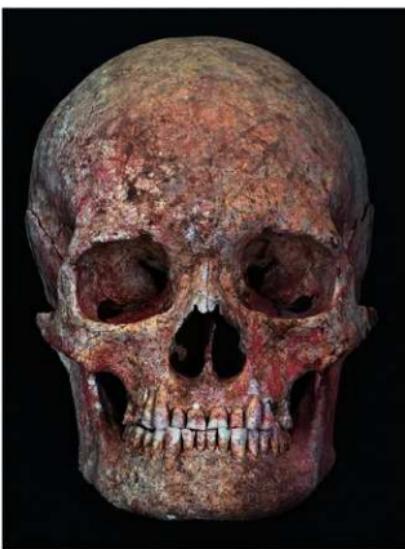
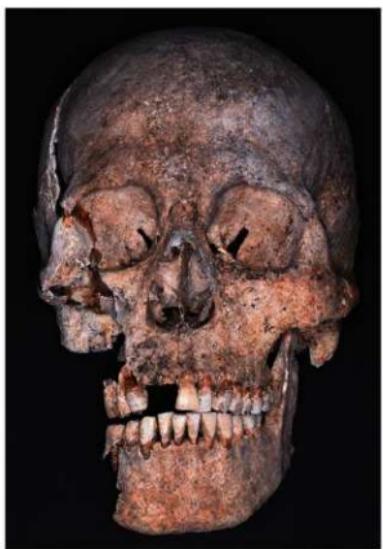


写真2 島内地下式横穴墓群出土 男性成人骨

左上：163号墓2号人骨（男性・壮年）

左下：170号墓2号人骨（男性・壮年）

右上：170号墓1号人骨（男性・熟年）

右下：172号墓2号人骨（男性・熟年）



写真3 島内地下式横穴墓群出土 女性成人骨
左上：164号墓2号人骨（女性・壮年）
左下：169号墓2号人骨（女性・壮年）

右上：164号墓3号人骨（女性・壮年）
右下：171号墓1号人骨（女性・壮年）

宮崎県えびの市灰塚地下式横穴墓群 24 号墓出土の人骨

鹿児島女子短期大学・竹中正巳

はじめに

宮崎県えびの市灰塚地下式横穴墓群では、大型農業機械による畑の耕作の際、玄室が陥没し、地下式横穴墓が発見されている。これらの不時発見に対応する緊急発掘はえびの市教育委員会により、その都度、しっかりと行われている。本稿では、2015 年 5 月に緊急調査された灰塚地下式横穴墓群 24 号墓から出土した古墳時代人骨について報告する。

出土人骨の所見

表 1 に示すとおり、灰塚地下式横穴墓群 24 号墓からは、2 体の古墳時代人骨が出土した。

表 1. 灰塚地下式横穴墓群 24 号墓出土人骨

墓番号	人骨番号	性別	年齢	保存状態	赤色顔料 頭部	赤色顔料 上半身	赤色顔料 下半身	特記
24 号墓	1 号人骨	不明	熟年	×	×	×	×	上顎左右第 1 大臼歯 : 事項近心舌側隅角に特徴的な摩耗
	2 号人骨	不明	成人	×	×	?	?	

・灰塚地下式横穴墓群 24 号墓（写真 1～3）

玄室の陥没によって発見された。2 体が対置埋葬されている。人骨の保存状態は悪い。奥壁側の人骨を初葬者（先に玄室に入れた人骨）と考え、1 号人骨と呼ぶ。奥壁から遠い人骨を 2 号人骨と呼ぶ。

1 号人骨は南頭位。全身が遺存するが、保存は悪い。仰臥伸展葬。赤色顔料は検出されていない。性別は不明である。年齢は歯の咬耗から熟年と推定される。上顎の歯列しか遺存していないが、う蝕が多い。また、上顎の左右の第 1 大臼歯の近心舌側に特徴的な咬耗の痕跡が認められる。作業に歯を使っていた可能性が考えられる。また、本人骨の第 4 腰椎から仙骨にかけて、変形性関節症が認められる（写真 3）。

2 号人骨は頭蓋のみが遺存する。保存状態は悪い。赤色顔料は検出されていない。頭蓋の厚さから成人と考えられる。性別は不明である。

おわりに

灰塚 24 号墓 1 号人骨（性別不明・熟年）の上顎左右第 1 大臼歯の近心舌側隅角には、咬合面から歯頭部方向に下がる特徴的な摩耗痕が認められ、同人骨の上顎左右中切歯には LSAMAT（上顎前歯部舌側面摩耗）の痕跡も確認できた。南九州の地下式横穴から出土する人骨からは、LSAMAT の認められる事例が報告されており、第 1 大臼歯の近心舌側隅角の摩耗痕も何らかの歯を使った作業によるものと思われる。今後、さらに検討していきたい。



写真1 灰塚地下式横穴墓群24号墓人骨出土状況（上：1号人骨 下：2号人骨）



写真2 灰塚地下式横穴墓群24号墓1号人骨の上顎左右第1大臼歯の近心舌側隅角に特徴的な摩耗痕
(左右中切歯にはLSAMAT(上顎前歯部舌側面磨耗)の跡)

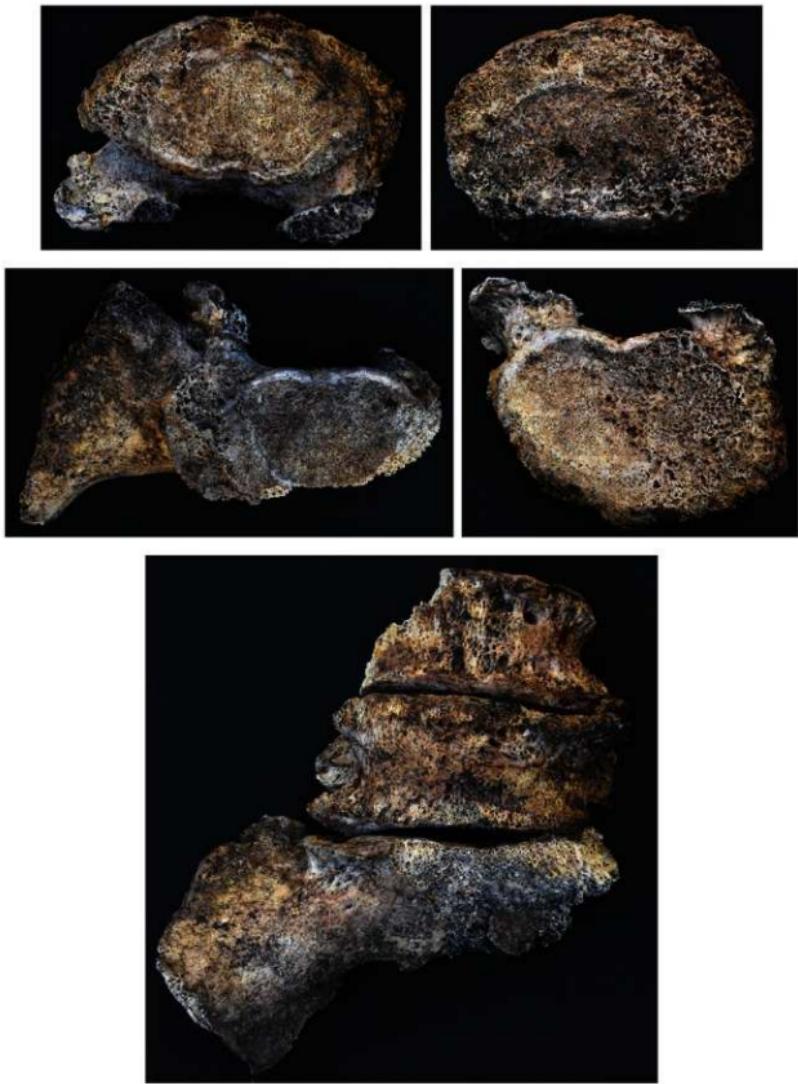


写真3 灰塚地下式横穴墓群 24号墓 1号人骨の変形性関節症（第4腰椎から仙骨まで）
(上左：第5腰椎椎体上面 上右：第4腰椎椎体下面 中右：第5腰椎椎体下面)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しまうちちかしきよこあなほぐん		はいづかちかしきよこあなほぐん			
書名	島内地下式横穴墓群VI			灰塚地下式横穴墓群II		
副書名	埋蔵文化崎発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名	えびの市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第58集					
編著者名	竹中正巳・橋本達也・中野和浩					
編集機関	えびの市教育委員会					
所在地	宮崎県えびの市大字大明司 2146-2					
発行年月日	2020年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
市 町村	遺跡 番号					
しまうち 島内地下式 横 穴 墓 群	えびの市大字島内字 平松・杉ノ原	9	1001	2015.10～ 2018.8	50m ²	畑耕耘陥没
はいづか 灰塚地下式 横 穴 墓 群	えびの市大字灰塚字 猫坂・四日市・高仏、 大字西長江浦字西城	9	2003	2015.6	3m ²	畑耕耘陥没
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
島内地下式 横 穴 墓 群	古墳	古墳	地下式横穴墓 板石積石棺墓	鉄刀・鉄剣 鉄鎌・刀子 貝釧	ヒメクロバエの ハエ開蛹殼多量	
灰塚地下式 横 穴 墓 群	古墳	古墳	地下式横穴墓	大刀・鉄鎌	LSAMAT 人骨	

えびの市埋蔵文化財調査報告書 第 58 集

島内地下式横穴墓群VI

灰塚地下式横穴墓群II

令和2（2020）年3月31日

編集・発行 えびの市教育委員会

えびの市大字栗下 1292

印 刷 有限会社 ソーゴーグラフィックス

人吉市下城本町 1426-1